

令和 7 年度老人保健健康増進等事業

「介護福祉士養成課程における ICT を活用した
教育のあり方に関する調査研究事業」
報 告 書

令和 8 年 3 月

公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会

目次

第1章 調査研究の概要	1
1 調査研究の目的	1
2 調査研究の体制及び方法	3
(1)検討委員会の設置及び検討	3
(2)アンケート調査の実施	5
(3)ヒアリング調査の実施	6
(4)教員向け研修会の開催	7
(5)ICTを活用した教育事例集及び報告書の作成	9
(6)本報告書における留意点について	9
3 調査結果のまとめ及び考察	11
3-1 アンケート調査結果の概要及び考察	11
(1)調査対象及び回収状況等について	11
(2)回答校の基本属性	11
(3)学習管理システム(LMS)	11
(4)ICT等を活用した介護福祉士養成教育	12
(5)介護テクノロジーを用いた介護実践の教育	21
(6)まとめと考察	29
3-2 ヒアリング調査結果の概要及び考察	32
(1)教育におけるICTの活用	32
(2)介護テクノロジー教育	34
3-3 本調査研究のまとめ	38
(1)ICT等活用や介護テクノロジー教育の展開	38
(2)今後に向けて	39
第2章 アンケート調査集計結果	41
1 概要	41
2 集計結果	42
■基本属性	42
(1)学校種別	42
(2)設置主体	42
(3)調査にご回答いただく方の職位	43
(4)教育年限	43
(5)介護福祉士養成に関する学科、コースの教員数	43
■学習管理システム(LMS)	44
(6)学習管理システム導入の有無	44

(6-1)導入している:活用場面.....	45
(6-2)導入している:活用効果.....	46
(6-3)導入していない:導入しない理由.....	47
■視点1:ICT等を活用した教育.....	48
(7)ICT等のデジタル機器・技術を活用した教育(授業)の有無.....	48
(8-1)コミュニケーション技術におけるICT等活用.....	50
(8-2)生活支援技術におけるICT等活用.....	57
(9)各科目におけるICT等活用.....	64
(10)関心があるICT等のデジタル機器・技術等.....	71
(11-1)ICT活用への取組.....	72
(11-2)ICT活用への今後の意向.....	73
(12)ICT等のデジタル機器・技術等活用の障壁.....	74
■視点2:介護テクノロジーに関する教育.....	76
(13)介護テクノロジーを用いた介護実践教育の有無.....	76
(14-1)コミュニケーション技術における介護テクノロジーの実践教育.....	78
(14-2)生活支援技術における介護テクノロジーの実践教育.....	81
(15)各科目における介護テクノロジーの実践教育.....	87
(16)関心がある介護テクノロジー.....	93
(17-1)介護テクノロジー教育の取組.....	94
(17-2)介護テクノロジー教育への今後の意向.....	95
(18)介護テクノロジー教育に関する重要な視点.....	96
■ヒアリング協力、研修への参加意向.....	98
(19)ヒアリング調査への協力有無.....	98
(20)研修への参加意向.....	98

第3章 ヒアリング調査結果.....	99
1 概要.....	99
2-1 ヒアリング結果【福祉系高等学校】__東奥学園高等学校(青森県).....	100
2-2 ヒアリング結果【福祉系高等学校】__宮城県迫桜高等学校(宮城県).....	104
2-3 ヒアリング結果【福祉系高等学校】__愛知県立古知野高等学校(愛知県).....	108
2-4 ヒアリング結果【専門学校】__東北保健医療専門学校(宮城県).....	112
2-5 ヒアリング結果【専門学校】__東京福祉専門学校(東京都).....	116
2-6 ヒアリング結果【短期大学】__富山短期大学(富山県).....	120
2-7 ヒアリング結果【四年制大学】__仙台大学(宮城県).....	124
2-8 ヒアリング結果【四年制大学】__桃山学院大学(大阪府).....	128
3 ヒアリングガイド.....	132

第4章 教員向け研修会の開催	134
1 概要	134
2-1 事例発表1 『学びの質』を高めるICT活用～高校福祉科からの実践報告～	136
2-2 事例発表2 地域の介護テクノロジー推進機関・介護施設との連携による教育事例	139
2-3 事例発表3 産学連携を軸とした介護テクノロジー教育の取組 ～企業連携で見た学生の変化～	141
3 研修会に対する参加者意見(終了後アンケート)	145
第5章 資料編	152
1 アンケート調査票	152
2 ヒアリング調査協力者・関係機関	164

第1章 調査研究の概要

1 調査研究の目的

「令和7年版高齢社会白書」によると、我が国の総人口は令和6年10月1日現在、1億2,380万人、65歳以上人口は3,624万人で総人口に占める割合（高齢化率）は29.3%である。また、人口は減少が続くと予想され、令和52（2070）年には総人口が9,000万人を割り込み、高齢化率は39%の水準になると推計されている。

高齢化の進展を背景に、介護ニーズの増加と深刻な介護人材不足に直面している中、介護サービスの質の維持・向上を実現するマネジメントモデルの構築やロボット・ICTの活用などの課題に対して、介護現場を預かる各団体の叡智を結集し、また、意識共有を図ることが求められている。¹⁾

一方、介護福祉士養成施設及び福祉系高等学校（以下、「養成施設等」）では、社会の要請に応じた教育内容へと変化を遂げ、高度な専門性を有する介護福祉士を輩出してきた。現在求められている介護福祉士像としては、自律的に介護過程の展開ができることをはじめ介護業務のチームリーダーといった介護職の中で中核的な役割を担うことが望まれている。これらは、前述する介護現場での課題と一致するものである。

このような中、公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会（以下「当協会」）では平成29年度の新カリキュラムに伴い「介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き」を作成し、ICT活用に関する授業内容を例示した。²⁾ また、当協会が開催する日本介護福祉教育学会及び全国教職員研修会において、ICTを活用した教育実践報告や関連する議論等が活発に行われており、その関心の高さと取組の成果が形となって現れ始めている。

第27回日本介護福祉教育学会の報告では、介護ロボット等を取り入れた授業内容や構成及び方法など授業デザインの検討について発表が行われた。学生への授業前後のアンケートから、多くの機器を体験する体験重視型授業よりも体験を踏まえて考えること、現場の実践事例を取り入れた実践・報告型授業で効果があることが示された。³⁾ 第28回日本介護福祉教育学会の報告では、全国の養成施設へのアンケート調査によって、「現在取り組んでいる福祉機器の教育内容では、あまりできていない/不十分である」との回答が5割を超え、養成施設によって教育内容にばらつきが生じており、体系的な教育とはなっていない現状が明らかとなった。こうしたことから、介護教員に対する教育環境の構築が課題として明示された。⁴⁾

また、令和5年度全国教職員研修会では、介護老人福祉施設の施設長を招いた分科会において、ICTの活用、ロボットの活用というのが当たり前の社会で、知識と技術を持った養成施設出身者が出てくることを切に願っているとの提言を受けている。⁵⁾ 令和6年度と同研修会では、ICTや介護ロボット等を介護教育の中に組み入れるために

は、介護現場の実態を踏まえた教育の展開が必要であること、また、養成施設等には国籍や年齢の幅、能力差など様々な背景を持つ多様な生徒・学生が入学をしてきているため、多様な学び方を探り、新たな技術を活用した教育の提供をしていくことが重要となっていることなどが提言された。⁶⁾

ICTを活用した教育実践の内容については養成施設等の判断に委ねられており、一部で先駆的な取組が活発にある一方で、上記のようにまだ十分に組み立てておらず体系的な教育が行われているとは言い難い養成施設等があることも実態となっている。⁴⁾

このため、本事業では、ICT等を活用した教育についてのアンケート、及びヒアリング調査を行うことで、介護施設等における介護実践との連続性を念頭に、ICT活用に関する実態を把握するとともに、当該調査結果を踏まえ、高度な専門職人材育成に向けたICT等を活用した教育上の留意点と課題について検討し整理することを目的として事業を実施する。

【参考・引用文献】

- 1)厚生労働省「介護現場革新会議基本方針」(2019)
- 2)公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会「介護福祉士養成課程 新カリキュラム 教育方法の手引き」(2019)
- 3)時本ゆかり、大久保弘枝「授業前後の比較にみる ICT・介護ロボット授業の効果と授業デザイン」(2021)
- 4)高野晃伸、山下科子「介護ロボット・介護支援機器教育の現状と課題」(2022)
- 5)令和5年度全国教職員研修会 第2分科会「ICT 教育が育む介護の未来像」より
- 6)令和6年度全国教職員研修会 第2分科会「ICT・介護ロボット教育」より

2 調査研究の体制及び方法

(1) 検討委員会の設置及び検討

四年制大学、短期大学、専門学校、及び福祉系高等学校など多様な学校種別の教員を含む構成員とする検討委員会を設置して調査研究を行った。本事業では介護現場での実践との連続性を念頭に置いていることから、ICT等を積極的に活用している介護施設関係者である業界団体・職能団体からも委員を選出し、構成員とした。

検討委員会の設置

○検討委員会委員(50音順・敬称略)	
川井 太加子	桃山学院大学 (委員長)
浅野 幸子	公益社団法人日本介護福祉士会
大森 順方	公益社団法人全国老人保健施設協会
奥野 勝太	富山短期大学
高木 諒	全国福祉高等学校長会・愛知県立古知野高等学校福祉科
高橋 利明	東京福祉専門学校
信澤 真由美	公益社団法人全国老人福祉施設協議会
堀江 竜弥	仙台大学
○オブザーバー(敬称略)	
高橋 健司	厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室室長補佐
鈴木 真智子	厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室 介護福祉専門官
樋渡 麻衣	厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室主査
山崎 彩夏	厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室 資格・試験係長
松本 薫	厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室資格・試験係
○事務局	
山田 洋輔	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会事務局・事務局長
菊池 芳久	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会事務局・事務局次長
渡邊 祐介	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会事務局
田中 佐千代	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会事務局 株式会社コモン計画研究所

検討委員会における検討は下表のとおりである。多くの委員に参加をいただくため、対面とオンラインによるハイブリッド開催とした。

検討委員会委員検討経過

○第1回検討委員会

日時：令和7年8月12日（火）17：00～19：00

場所：ビジョンセンター東京駅前702 + オンライン開催

議事：1 本調査研究事業の概要の説明

- (1) 本事業のテーマ
- (2) 調査研究方法の概略とアウトプット
- (3) 調査研究において共有すべきポイント
- (4) 調査研究のスケジュール(案)

2 ヒアリング調査

- (1) 高木委員
- (2) 奥野委員

3 今後のスケジュール

○第2回検討委員会

日時：令和7年9月22日（月）10：00～12：00

場所：AP東京八重洲12階 D・E + オンライン開催

議事：1 アンケート調査について

- (1) アンケート調査の概要
- (2) アンケート調査の全体像
- (3) アンケート調査票(案)
- (4) ヒアリング調査の概要
- (5) ヒアリング調査の構造
- (6) ヒアリングガイド(案)

2 今後のスケジュールについて

○第3回検討委員会

日時：令和7年11月25日（火）10：00～12：00

場所：AP東京八重洲11階・O + オンライン開催

議事：1 アンケート調査及びヒアリング調査について

- (1) アンケート調査実施状況及び速報仮値【抜粋】について
- (2) ヒアリング調査概要及びヒアリングガイド案について
- (3) ヒアリング調査候補について

2 事例集のイメージ(案)について

3 研修の概要(案)について

4 今後のスケジュールについて

○第4回検討委員会

日 時：令和8年2月2日（月）10：00～12：00

場 所：AP東京八重洲12階 ルームD・E + オンライン開催

- 議 事：1 ヒアリング調査の実施状況について
2 研修会開催要項（案）について
3 教育事例集（案）について
4 報告書（案）について
5 今後のスケジュールについて

○第5回検討委員会

日 時：令和8年3月16日（月）10：00～12：00

場 所：AP東京八重洲10階 Y1ルーム + オンライン開催

- 議 事：1 研修会の報告について
2 教育事例集(案)について
3 報告書(案)について

(2) アンケート調査の実施

養成施設等におけるICT等活用に関する教育実践の実態調査及び課題を把握するためのアンケート調査を行った。

アンケート調査の実施

目 的	<ul style="list-style-type: none">養成施設等におけるICT等を活用した教育の実態と課題の把握ヒアリング調査につながる事例の抽出
調査対象者	<ul style="list-style-type: none">介護福祉士養成施設及び福祉系高等学校
全数・抽出別	<ul style="list-style-type: none">全数（9月30日時点）
調査方法	<ul style="list-style-type: none">郵送で依頼、ウェブ又はエクセルでの回答エクセルは指定URLからダウンロード、ファイルをメールで送信
調査時期	<ul style="list-style-type: none">10月15日（水）郵送、11月14日（金）締切 →11月21日（金）まで延長11月11日（火）養成施設へ回答勧奨メール、11月18日（火）福祉系高等学校へ回答勧奨メール

調査客対数 と回収状況	種 別	対象数	エクセル 回収数	WEB 回収数	B 回収数 合計	B/A 回収率
	四年制大学	52	2	13	15	3.9%
	短期大学	38	1	6	7	1.8%
	専門学校	182	3	66	69	18.2%
	福祉系高等学校	108	11	26	37	9.7%
	合 計	A 380	17	111	128	33.7%

(3) ヒアリング調査の実施

ICT等活用に関する教育実践に先駆的に取り組んでいる養成施設等の教員を対象としたヒアリング調査を実施し、教育実践の現状と実際に取り組んだ際の留意点及び課題について聴取した。

なお、当該ヒアリングは、第1回検討委員会においても実施し、本事業のテーマに関する検討委員の共通認識を図ることとした。

ヒアリング調査の実施

目 的	<ul style="list-style-type: none"> 事例集に掲載する教育事例の収集
調査対象者	<ul style="list-style-type: none"> 介護福祉養成施設及び福祉系高等学校の教員
全数・抽出別	<ul style="list-style-type: none"> アンケート調査結果および検討委員会推薦等による有意抽出
調査対象	<ul style="list-style-type: none"> ICT等を活用した教育事例、介護テクノロジーを用いた介護実践についての教育事例の2つの視点をもとに、検討委員会での検討を経て対象を有意抽出した 以下8校（福祉系高等学校3、専門学校2、短期大学1、四年制大学2） <ol style="list-style-type: none"> 東奥学園高等学校（青森県） 宮城県迫桜高等学校（宮城県） 愛知県立古知野高等学校（愛知県） 東北保健医療専門学校（宮城県） 東京福祉専門学校（東京都） 富山短期大学（富山県） 仙台大学（宮城県） 桃山学院大学（大阪府） <p>※ご協力者の詳細は、本書「第5章 資料編」に掲載している</p>

調査方法	<ul style="list-style-type: none"> 半構造化面接 対面実施を基本とするが、ハイブリッドによる方法も対応した
調査時期	<ul style="list-style-type: none"> 令和8年1月～2月
研究倫理と合理的配慮	<ul style="list-style-type: none"> 調査に協力しない、回答しないことがあっても不利益は生じない 合理的配慮が必要な場合は個別に相談・対応する

(4) 教員向け研修会の開催

教員向け研修会を実施し、教育における展開の工夫、方法等について情報共有及び議論を行った。

教員向け研修会の開催

目的	<ul style="list-style-type: none"> 介護福祉士養成教育におけるICT活用の工夫、方法等に関する情報共有及び議論 教育事例の周知と活用、事例集への意見の把握 			
対象者	<ul style="list-style-type: none"> 介護福祉養成施設及び福祉系高等学校の教員 			
テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ICT等を活用した介護福祉士養成教育に関する研修会 			
日時	<ul style="list-style-type: none"> 令和8年3月6日（金）13：00～17：00 			
開方場所	<ul style="list-style-type: none"> TKPガーデンシティPREMIUM京橋ANNEX 			
参加費	<ul style="list-style-type: none"> 無料 			
定員・申込者	<ul style="list-style-type: none"> 定員200名、申込者106名 			
参加者	種別	参加者数合計	会場	リモート
	四年制大学	17	2	15
	短期大学	17	0	17
	専門学校	41	7	34
	福祉系高等学校	13	1	12
	合計	88	10	78

プログラム

時間	内容
12:30～	受付
13:00～	開会
13:10～13:40	本事業の趣旨 講 師：川井太加子 先生（桃山学院大学）
13:40～14:45	事例紹介① テーマ：「『学びの質』を高めるICT活用 —高校福祉科からの実践報告—」 講 師：高木諒 先生（愛知県立古知野高等学校） 概 要： 本発表では、ICTを「教えるための道具」ではなく、学びを深めるためのきっかけとして位置づけ、教育方法・教育内容の両面からその活用を紹介する。 本研修を通して、ICTが対面の学びを深化させる可能性について考えたい。 グループディスカッション
14:45～14:55	休憩
14:55～16:35	事例紹介② テーマ：「地域の介護テクノロジー推進機関・介護施設との連携による教育事例」 講 師：奥野勝太 先生（富山短期大学） 概 要： とやま介護テクノロジー普及・推進センターや介護施設との連携に至る動機から授業目的・内容、工夫点などについて富山短期大学の事例報告やワークショップを行う。 事例紹介③ テーマ：「産学連携を軸とした介護テクノロジー教育の取組 —企業連携で見た学生の変化—」 講 師：高橋利明 先生（東京福祉専門学校） 概 要： 「どのようにして介護テクノロジー活用のためのカリキュラムを作成し、実際に運用してきたのか」を、東京福祉専門学校とコニカミノルタ株式会社、株式会社善光総合研究所との産学連携事例を通じて具体的に共有する。単なる機器の操作説明ではなく、既存の教育課程にいかにか統合し、次世代の介護福祉士の育成に向けてどのように連携してきたかを紹介する。 グループディスカッション
16:35～16:45	まとめ
16:45～16:50	閉会

(5) ICTを活用した教育事例集及び報告書の作成

ICTを活用した教育事例集及び報告書の作成ヒアリングで収集した教育事例等を取りまとめた教育事例集を作成した。また、アンケート調査の結果も含めた本調査研究事業の報告書を作成した。

作成された教育事例集及び報告書は、印刷し関係各所に配布するほか、当協会のホームページからのダウンロードを可能とし、その旨の周知を行う。

(6) 本報告書における留意点について

①用語について

以下の用語について、本報告書で用いる定義・意味を示す。

■ **ICT**：本調査研究におけるアンケート調査及びヒアリング調査では、以下を具体例として示している。

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| ・ 学習管理システム(LMS) | ・ デジタル教科書 |
| ・ AI | ・ タブレット |
| ・ VR(ゴーグル)、ARなどの機器・技術 | ・ スマートフォン |
| ・ アバター | ・ 意見集約やアンケートツール |
| ・ 動画教材 | ・ 双方向コミュニケーションツール |
| ・ オンデマンド教材 | など |

■ **介護テクノロジー**：本調査研究におけるアンケート調査及びヒアリング調査では、以下を具体例として示している。なお、厚生労働省及び経済産業省が定める「介護テクノロジー利用の重点分野」（9分野 16 項目）をもとに、教育の視点から再分類をしている。

- | |
|---------------------------------------|
| ・ 移乗・移動支援：自動運転の車いすや歩行補助ロボットなど |
| ・ 排泄支援（予測・検知を含む）：排泄状況の把握・予測・検知システムなど |
| ・ 見守りセンサー・システム：センサーによる見守りなど |
| ・ コミュニケーションロボット：利用者とのコミュニケーション支援など |
| ・ 入浴支援：入浴補助機器、温度管理システムなど |
| ・ 介護記録・情報共有支援：介護記録アプリ、クラウド型情報共有システムなど |
| ・ 業務支援：人手不足解消や業務効率化を図る管理システムなど |
| ・ 機能訓練支援：身体機能維持・向上を目指す機器 |
| ・ 食事・栄養管理支援：食事管理や栄養改善を支援する機器 |
| ・ 認知症生活支援・認知症ケア支援：認知機能低下の高齢者を支援する機器 |
| ・ その他の機器：インカム、ナースコールなど |

②ヒアリング調査における商品名・製品名の表示について

ヒアリング調査においては“各養成施設等における実際の使用・活用方法”を伝えるために商品名・製品名を記載している場合がある。本報告書は、掲載している商品・製品の使用や活用を推奨するものではない。

3 調査結果のまとめ及び考察

3-1 アンケート調査結果の概要及び考察

(1) 調査対象及び回収状況等について

- 本調査は養成施設等 380 校を対象に実施し、回収数は 128 校、回収率 33.7%である。
- 調査依頼状及び調査票は郵送にて送付、回答はウェブフォーム又はエクセルファイルをダウンロードしてメール送信をする方法とした。
- ウェブフォーム回答が 128 校のうち 111 校を占め、エクセルファイルによる回答は 17 校と少数にとどまった。

(2) 回答校の基本属性

- 【質問 1】回答があった学校種別は、四年制大学 15 校、短期大学 7 校、専門学校 69 校、福祉系高等学校 37 校である。短期大学は対象数も 38 校と少ないが、回答数も 7 校と低位である。
- 【質問 2】設置主体は、学校法人が 68.8%を占め、公立 21.9%、社会福祉法人 8.6%である。
- 【質問 3】回答者は、学科長や教務主任による回答割合が高かった。

(3) 学習管理システム（LMS）

- 【質問 6】学習管理システム（LMS）を導入している割合は回答校の 43.8%、今後導入予定は 5.5%、導入していない（導入予定もない）は 50.8%であった。
学校種別にみると、四年制大学及び短期大学は 85%以上が導入済みであるが、専門学校は導入済みが 27.5%と低い。福祉系高等学校は、導入済み・導入していない（導入予定もない）がどちらも同じ 48.6%であった。
学習管理システム（LMS）は、学校種別により導入の有無に違いがみられ、専門学校の導入率が際立って低い結果となっている。
- 【質問 6-1】学習管理システム（LMS）の具体的な活用場面は、割合が高い順に、課題提示、生徒・学生への連絡、レポート提出・管理、記録や教材の共有、授業アンケートとなっており、これらは 8 割以上が活用している機能である。
四年制大学及び短期大学において活用している割合の累計値が高く、積極的に活用されていることがわかる。
- 【質問 6-2】学習管理システム（LMS）活用の効果は、生徒・学生への迅速な情報提供・共有が 98.2%と高い。反対に、効果を感じている割合が低い機能は試験結果の集計、採点の自動化等による負担軽減、学習状況に対する評価の客観性の担保である。
- 【質問 6-3】学習管理システム（LMS）を導入しない理由は、予算の確保が難し

い、機器や通信などの環境が整わない、教員の対応が難しいが上位であり、これらは専門学校において高い割合であった。福祉系高等学校は公立が一定数あることなどが影響して、法人・設置者の方針やその他の割合が高くなっている。

(4) ICT等を活用した介護福祉士養成教育

① ICT等を活用している割合及び活用している科目

- 【問7】ICT等のデジタル機器・技術を活用した介護福祉士養成教育が行われている割合は63.3%（81校）であった。
- 学校種別にみると、四年制大学66.7%、短期大学71.4%、専門学校55.1%、福祉系高等学校75.7%であり、専門学校における活用割合が最も低い。

実際に取り入れている科目は介護の基本、生活支援技術、介護総合演習、こころとからだのしくみなど、「領域：介護」「領域：こころとからだのしくみ」の科目での活用が多い。一方で、「領域：人間と社会」や「領域：介護」における介護実習でのICT等活用は相対的に少ない結果となっている。

② シラバス掲載の有無及び活用を後押ししている要因等（科目別）

- 【問8-1】科目「コミュニケーション技術」について、ICT等活用に関する回答シートに記載があったのは52校、シラバスにICT等活用に関する内容を掲載しているのは22校、活用の開始時期は5年以内が34校であるが10年以上前という回答もある。

ICT等活用を後押ししている要因は「学習管理システム（LMS）の導入」「教員の研修、FD」の割合が圧倒的に多く、「その他」においては、新型コロナウイルス感染症拡大、タブレット導入等が挙げられている。

- 【問8-2】科目「生活支援技術」について、ICT等活用に関する回答シートに記載があったのは60校、シラバスにICT等活用に関する内容を掲載しているのは24校、活用の開始時期は5年以内が36校であるが10年以上前という回答もある。

ICT等活用を後押ししている要因は「学習管理システム（LMS）の導入」「教員の研修、FD」「企業との協働」「介護現場との協働」「その他」が多い回答となっている。「その他」では、新型コロナウイルス感染症拡大、タブレット導入、動画活用の拡大などの要因が挙げられている。

- 【問9】「コミュニケーション技術」と「生活支援技術」以外の科目について、ICT等活用に関する回答シートに記載があったのは44校、科目数は延85科目である。

ICT等活用を後押ししている要因は「学習管理システム（LMS）の導入」「教員の研修・FD」「介護現場との協働」「その他」が要因として多い回答となっている。「その他」として新型コロナウイルス感染症拡大、タブレット導入等が挙げられている。

記載された具体的科目は、多い順に、介護総合演習（12）、介護過程（11）、介護福祉基礎（6）、認知症の理解（6）、こころとからだのしくみ（5）、こころとからだの理解（5）、介護の基本（4）、発達と老化の理解（3）、社会の理解・人間の尊厳と自立・介護実習・障害の理解・医療的ケア（各2）、人間関係とコミュニケーション・ICT介護ロボット・情報処理（各1）などとなっている。

③教育におけるICT等の具体的使用方法や使用場面

- 教育におけるICT等の具体的活用状況は、「動画活用」「情報共有」「情報収集」「管理」「ICT機器を使用」「ICT等の講義・体験」に整理・分類できる。
- 「動画活用」は視覚的に理解を促すために用いられ、介護現場、介護過程、成長発達、身体構造、病気、障害、認知症、医療的ケア、実技、介護姿勢、事例、コミュニケーション場面などの多様な動画が活用されている。自由記述からは、身体構造に関する動画が比較的多く活用されていることが明らかになっている。留学生にもわかりやすいこと、様々な動画コンテンツの存在が教育における動画の活用を後押ししている。

「教育におけるICT等の具体的使用方法や使用場面」（自由記述まとめ）

<p>■動画活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動画視聴 ・以下のような動画の活用 <ul style="list-style-type: none"> 介護現場 介護過程 成長発達 身体構造 病気 障害 認知症 医療的ケア 実技 介護姿勢 事例 コミュニケーション場面 	<p>■管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出欠 ・レポート・課題 ・テスト ・採点 ・授業アンケート ・提出物 ・個別指導 ・フィードバック ・介護実習関連資料
<p>■情報共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報共有 ・連絡 ・シラバス ・講義資料 ・授業中 ・実習中 ・事前・事後学習 ・作業や考え 	<p>■ICT機器の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PCやタブレット使用 ・発表資料作成 ・スライド作成 ・動画作成 ・アセスメントや計画作成の入力 ・各資料等入力 ・グループワーク発表
<p>■情報収集</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報収集 	<p>■ICT等の講義・体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICTの活用の講義 ・具体例の講義 ・機器の説明 ・デジタル記録体験 ・音声入力アプリ体験 ・介護記録ソフト体験

- ・「情報共有」や「管理」ではICT等の機能が効果的に使用されている。
「情報共有」は、生徒・学生と教員や生徒・学生の間での連絡、シラバス共有、講義資料共有、授業中や実習中の情報共有のほか、作業やお互いの思考等の共有、事前・事後学習において活用されている。
「管理」は、出欠、レポート・課題、テスト、採点、授業アンケート、提出物、個別指導、フィードバック、介護実習関連資料などにおいて活用されている。
- ・上記のほかに、様々な検索をして「情報収集」する、PCやタブレットなどの「ICT機器を使用」して生徒・学生が資料を作成・発表をする、「ICT等の講義・体験」をするなどの活用がなされている。

④ ICT等の活用にあたり留意又は工夫していること

- ・留意又は工夫していることは、「ICTを使えるように支援」「リテラシーを教育」「資料」「授業展開」に整理・分類できる。

「ICT等の活用にあたり留意又は工夫していること」(自由記述まとめ)

■ ICTを使えるように支援

- ・使い方を指導
- ・機器の準備や管理を指導
- ・機器に触れる機会を増やす
- ・確認習慣がない学生への対応
- ・使用が習慣となるよう促す
- ・テンプレート等を活用

■ リテラシーを教育

- ・個人情報の取り扱い
- ・安全な利用
- ・情報の確実性
- ・機器の導入を主目的にしない
- ・他者に伝える力

■ 資料

- ・データ化して共有
- ・アニメーション使用
- ・字幕(動画)
- ・ルビ使用
- ・色で工夫
- ・視覚的理解
- ・分かりやすく
- ・教科書、自作プリント併用
- ・紙面との併用

■ 授業展開

- ・動画活用
- ・機器を体験
- ・機器を理解
- ・双方向のやりとり
- ・教科書の補強として活用
- ・苦手なことへの配慮
- ・提出期日設定
- ・理解度にあわせる
- ・生徒・学生の作成状況等を確認
- ・作業を教員が確認
- ・意見や回答を確認
- ・確認テスト

- ICTを使いこなせていない（使いこなせない）生徒・学生には、「ICTを使えるように支援」する取組がなされている。具体的には、基本的な使い方や機器の準備・管理の指導、機器に触れる機会を増やすなどのほか、確認習慣がない学生への声かけ、文字入力に時間がかかってしまう学生へのテンプレート等活用などの工夫が図られている。
- 「リテラシーを教育」については、個人情報の取り扱い、目的外使用やSNSなどに関する安全な利用、正確な情報を収集するための方法を教える、機器の導入を主目的にしないことを教えるなどの記載があった。
- 「資料」については、紙面ではなくデータ化して共有する、アニメーションを使用、字幕(動画)の加工、色などの視覚的工夫のほか、紙面との併用を図るなどの配慮もみられた。
- 「授業展開」においては、動画を活用する、実際に機器を体験するという取組のほか、ICTを活用して生徒・学生の作業状況を共有・確認する、意見や回答を確認する、確認テストを行う等、双方向のやりとりを丁寧に行い作業の進捗や生徒・学生の理解度を確認する対応が図られている。

⑤ ICT等を活用した教育における課題

- **ICT等を活用した教育における課題**は、「教員・授業」「生徒・学生」「資料・教材」「機器・環境」に整理・分類できる。
- 「教員・授業」の課題では、機能を上手く活用できない、活用できるICTがわからないなどの教員のリテラシーの課題、生徒・学生の意見を活かしていない、学習データの蓄積・分析ができていないというデータ活用の課題、共感や非言語などの学びが難しい、主体的学び・実践的授業の展開が難しいなどの授業の特性を踏まえたICTの活用ができていないという意見がだされた。また、リアルタイムに教員が確認することを負担に感じる学生がいることに対する配慮の必要性、ICT導入が進んでいない施設(現場)が多い、費用や維持管理の視点から継続できるかが課題であるという意見が出された。
- 「生徒・学生」の課題では、操作が苦手な生徒・学生がいる、目的外利用やコピー&ペースト・チャットGPT・AIの安易な使用、誤った情報の収集、過度なICT依存といった使用方法の課題、オンデマンドやタブレットを見ない生徒・学生がいる、学校外でのデバイスや通信環境が整わない、充電不足・忘れて使えないなどの課題が挙げられている。
- 「資料・教材」の課題では、動画について画像のクオリティが低い、教材が少ない、最新情報ではない場合がある、データの信憑性がないなどの課題の指摘があった。
- 「機器・環境」の課題では、レンタルの仕組みの必要性、生徒・学生数に見合った機器数の確保が難しい、身近な展示があるとよいなどの機器確保に関する課題とともに、アップデートや新しい機能変更への対応が必要となっている状況が明らかになった。

「ICT等を活用した教育における課題」(自由記述まとめ)

■教員・授業

- ・機能を上手く活用できない
- ・機能の活用に時間がかかる
- ・活用できるICTがわからない
- ・生徒・学生の意見を活かせていない
- ・学習データの蓄積、分析ができていない
- ・共感や非言語などの学びが難しい
- ・主体的学びの展開が難しい
- ・実践的授業の展開が難しい
- ・留学生に対応した授業展開
- ・リアルタイムに教員が確認することを負担に感じる学生がいる
- ・導入が進んでいない施設が多い
- ・継続できるか課題
- ・回数を増やしたい
- ・評価方法

■生徒・学生

- ・操作が苦手
- ・スキルや活用に個人差
- ・目的外の利用
- ・コピー&ペーストをしてしまう
- ・チャットGPTで対応
- ・安易にAIを使用
- ・誤った情報を集めている
- ・使用することに依存
- ・オンデマンドを見ない
- ・タブレットを見返していない
- ・感想を送らない
- ・学校外で機器を確保できない
- ・Wi-Fi環境がない
- ・学校外で環境が整わない
- ・充電不足・忘れて使えない
- ・授業中の集中がそがれる
- ・学習内容より作業が優先される

■機器・環境

- ・レンタルの仕組みがほしい
- ・機器の貸し出をしてもらえない
- ・身近な展示があるとよい
- ・学生数に見合った機器数が必要
- ・機器が不足しておりグループ使用
- ・機器の管理場所が必要
- ・アップデートが必要
- ・機能が変更される
- ・スマホ利用の充電が個人負担

■資料・教材

- ・教材選択が難しい
- ・教材が少ない
- ・障害の教材が少ない
- ・画像のクオリティが低い
- ・最新情報ではない場合がある
- ・データの信憑性がない
- ・適切な教材づくり
- ・ルビ振り

⑥ ICT等活用により期待される効果、効果の把握・測定方法

- ・ ICT等活用により期待される効果は、「教育への効果」「生徒・学生への効果」「知識や理解が深まる」「就労先での効果」「教員の負担軽減」「効果の把握や測定の方法」に整理・分類できる。
- ・ 「教育への効果」には、効果に関する多様な記載があった。過去の授業内容確認、次回の授業への改善の反映、予習・復習の後押し、リアルタイムの指導・修正、協働学習の促進、実習におけるギャップ減少、生徒・学生の特性の理解、生徒・学生の理解度や違いが把握できるなどの記載があり、結果として指導がしやすい、説明がしやすい、評価がしやすいという効果が明らかになっている。
- ・ 「教育への効果」に関連して「知識や理解が深まる」効果も挙げられた。確実な知識の習得、学びの幅が広がる、習得が早くなったなどの効果のほか、発見や驚きを感じやすい、他の意見を知ることで自分の考えが深まるなど、新たな気づきを促すことへ

の効果もみられる。

- ・「生徒・学生への効果」では、ICT等に対する関心が高まる、PCを使えるようになるといった実務的な効果とともに、ICTを活用することで自分の質問や考えを伝えやすくなり、見やすい資料を作成できるといった成功体験を通して自己肯定感が高

「ICT等活用により期待される効果、効果の把握・測定方法」(自由記述まとめ)

■教育への効果

- ・過去の授業内容を確認しやすい
- ・次回の学習につなげることができる
- ・繰り返して予習・復習
- ・自宅での学習も容易
- ・リアルタイムの指導・修正
- ・資料の紛失がない
- ・提出物を手元で確認できる
- ・情報共有が可視化
- ・協働学習が促進
- ・実習におけるギャップが減少
- ・生徒・学生の特性の理解につながる
- ・生徒・学生の理解度や違いを把握
- ・柔軟な学習環境
- ・指導がしやすい
- ・説明がしやすい
- ・評価がしやすい

■生徒・学生への効果

- ・自ら学ぶ意欲の醸成
- ・ICT等に対する関心の高まり
- ・PCを使えるようになる
- ・自分の質問や考えを伝えることができる
- ・見やすい資料が作成できる
- ・自己肯定感が高まる
- ・積極的に参加する

■知識や理解が深まる

- ・理解度が増す
- ・理解しやすい
- ・イメージしやすい
- ・障害を理解する
- ・確実な知識の習得
- ・知識の定着
- ・学びの幅が広がる
- ・習得が早くなった
- ・発見や驚きを感じやすい
- ・他者との違いに気づく
- ・自分の考えを相対化しながら深めていく

■就労先での効果

- ・介護現場で活用できる
- ・抵抗感が少なくなる
- ・現場での普及促進
- ・報告・連絡・相談に役立つ
- ・働きやすくなる

■教員の負担軽減

- ・教員業務の軽減
- ・記録の管理の負担が軽減
- ・期限管理と資料の保管が容易
- ・修正の指導が容易
- ・欠席者への対応が容易
- ・予習・復習の把握ができる
- ・課題や提出をタイムリーに確認
- ・生徒・学生に迅速に連絡ができる
- ・公平性、利便性がある
- ・資料配付が予約できる

■効果の把握や測定の方法

【把握している】

- ・振り返りアンケート、授業アンケート
- ・演習中の様子
- ・期末テスト
- ・単元テスト
- ・定期試験の結果
- ・提出物
- ・学生からの授業評価
- ・自己評価・相互評価

【把握していない・わからない】

- ・現在は行っていない
- ・検討が必要
- ・感想を聞くのに留まっている
- ・効果測定の指標について成熟していない
- ・測定方法の見える化

まる、自ら学ぶ意欲の醸成につながるという効果も挙げられた。

- 「就労先での効果」では、介護現場でICTを活用できる、抵抗感が少なくなる、現場での普及促進など、ICT等を活用する人材となることへの効果が挙げられた。
- 「教員の負担軽減」では、教員業務の軽減、記録の管理の負担が軽減されるなどの記載のほか、修正の指導や欠席者対応が容易になる、予習・復習や提出物の把握・確認ができる、各種連絡がしやすいなどの管理・確認・連絡に関する利便性向上の効果が挙げられている。
- 「効果の把握や測定の方法」では、効果を把握する方法として、アンケート、テスト、授業評価とともに、日常的に演習中の様子で把握しているなどの取組がある一方で、現在は行っていない、検討が必要、感想を聞くのに留まっている、効果測定の指標について成熟していないという記載から、効果の測定を行っていない・できていないという現状も明らかになった。

⑦ ICT等活用に関する今後の展開と期待

- **ICT等活用に関する今後の展開と期待**は、「取組を継続」「積極的な活用」「教育の充実」「教員の対応」「生徒・学生の関心」「機器・環境の充実」「資料・教材の充実」「外部機関との連携」「ICTを活用できる人材育成」に整理・分類できる。
- 「積極的な活用」では、PCやタブレットのデバイスを活用したり、実際に現場で使用する機器を取り入れるなど、教育的効果を踏まえてICT等を積極的に活用していく取組が示された。
- 「教育の充実」では、ICTを活用して一人ひとりの学習データを踏まえた指導を行う、生徒・学生の意見を授業にいかすなどの教育活動の充実とともに、新しい発見や気づきを促す、苦手分野が克服できる、理解の深まりなどの生徒・学生が受けるメリットにつながる展開と期待に関する記載がみられた。
- 「教員の対応」では、教員のICTリテラシーの向上が図られ、教員間の情報共有が促進されること、教員向けの研修会の実施などへの期待が挙げられた。ICTを活用するための補助講師の配置に関する意見もあった。
- 「生徒・学生の関心」では、ICTを活用することで留学生のモチベーションの向上や学生の関心を喚起することへの期待が記載されていた。
- 「機器・環境の充実」では、校正機能、既読機能、画像の鮮明化などの機能の向上、現場での通信環境整備、補助金の活用、機器が適切にアップデートされていくことへの期待が挙げられた。
- 「資料・教材の充実」では、今後も動画や教材を確保して活用を進めたいという意見のほか、無料サイトを使いやすくしてほしいなど、教材の充実への取組や要望が挙げられた。
- 「外部機関との連携」では、介護現場を通して最新技術を学んだり、ICT活用についても施設との連携を強化していく必要性が挙げられた。
- 「ICTを活用できる人材育成」では、養成教育においてICT等を活用することは、

介護現場でICT活用を推進する人材養成にもつながるとの意見が挙げられている。

「ICT等活用に関する今後の展開と期待」(自由記述まとめ)

■取組を継続

- ・今後も継続

■積極的な活用

- ・積極的に導入したい
- ・教育的効果を考えて活用
- ・PCの活用
- ・iPadの活用
- ・実際使用する機器を取り入れる
- ・実習書類の一括管理
- ・AIとの親和性に基づく積極的活用

■教育の充実

- ・授業の質
- ・個別学習データを活用した教育・指導
- ・学びの過程の蓄積と振り返りの迅速化
- ・次回の授業で振り返りをいかす
- ・予習への使用を検討
- ・ハイブリッド教育
- ・リモートによる遠隔授業
- ・先進的な取組に触れる
- ・介護過程の思考を中心に据えた授業
- ・記録におけるICT利用
- ・オンライン会議方法を学ぶ
- ・学習の可視化と主体性向上
- ・学生双方の共有の学び
- ・新しい発見や気づきを促す
- ・他の人の課題を通して振り返る
- ・苦手分野化が克服できる
- ・コミュニケーションの理解を深める
- ・理解の深まり

■教員の対応

- ・慣れていない教員でも利用できる
- ・デジタルディバイドを少なくする
- ・研修の機会
- ・教員間の情報共有促進
- ・補助講師の配置検討

■生徒・学生の関心

- ・留学生のモチベーションの向上
- ・ICTの活用が学生の関心を喚起

■機器・環境の充実

- ・補助金活用
- ・記録の校正機能
- ・既読の仕組みがほしい
- ・施設での通信環境
- ・カメラ画像の鮮明さ
- ・最新のアップデート

■資料・教材の充実

- ・適切な教材の確保
- ・様々な事例教材
- ・多様な活用事例
- ・導入できる教材を積極的に活用
- ・介護過程の教材
- ・視覚・聴覚的な教材
- ・オンデマンド動画活用
- ・学習用動画の確保
- ・無料サイトを使いやすく
- ・実習記録ペーパーレス化

■外部機関との連携

- ・介護現場をとおして最新技術を学ぶ
- ・施設との連携

■ICTを活用できる人材育成

- ・就職後や日常生活でも活用できる
- ・ICTを活用できる即戦力
- ・ICTを活用して利用者支援
- ・ICTを活用してペーパーレス化

⑧関心があるICT等のデジタル機器・技術等

- 【問 10】介護福祉士養成課程において関心があるICT等のデジタル機器・技術等は、視覚的な効果が期待できる機器であるVR、ARなどの機器・技術、動画教材への関心が高く、また、デバイスではパソコンよりもタブレットを志向する状況となっている。学校種別にみると、四年制大学はAIへの関心が高い。

⑨ICT活用への取組、今後の意向

- 【問 11】ICT活用へのこれまでの取組を学校種別にみると、四年制大学、短期大学、福祉系高等学校は『取り組んできた』※1、専門学校は『取り組んでこなかった』※2の割合が高い。
- 今後の意向は、いずれの学校種別も『取り組みたい』※3という意向が6割以上となっている。四年制大学、短期大学は『取り組みたくない』は0%である一方で、福祉系高等学校と専門学校は1割ほどではあるが今後も『取り組みたくない』※4と回答している。

※1『取り組んできた』=積極的に取り組んできた+取り組んできた

※2『取り組んでこなかった』=あまり取り組んでこなかった+全く取り組んでこなかった

※3『取り組みたい』=是非、取り組みたい+取り組みたい

※4『取り組みたくない』=あまり取り組みたくない+全く取り組みたくない

⑩ICT等のデジタル機器・技術等活用の障壁

- 【問 12】以下、ア)～セ)についてICT等のデジタル機器・技術等活用の障壁となっているかを尋ねたところ、障壁となっている割合が最も高いのは、セ)予算の確保が難しい、次いで、ク)マニュアルやノウハウがない、キ)教員のデジタル機器等に対する苦手意識、ス)機器のメンテナンスが難しい、ケ)推進する教員、キーパーソンが不在、サ)介護現場との連携が難しいが続いている。
- ア)組織の方針、イ)必要性を感じていない、ウ)組織で目的等が共有されていないという組織に関わる要因は、『あてはまらない』※1が『あてはまる』※2を上回る結果となった。

※1『あてはまる』=とてもあてはまる+あてはまる

※2『あてはまらない』=あまりあてはまらない+全くあてはまらない

ICT等のデジタル機器・技術等活用の障壁

ICT等のデジタル機器・技術等活用の障壁となっているか	『あてはまる』		『あてはまらない』
ア) 法人・設置者の方針	34.3%	<	35.1%
イ) 必要性を感じていない	18.0%	<	52.4%
ウ) 組織の中で目的・効果が共有されていない	28.9%	<	41.4%
エ) デジタル機器・技術等の活用をした授業のデザインができない	35.2%	>	34.4%

ICT等のデジタル機器・技術等活用の障壁となっているか	『あてはまる』		『あてはまらない』
オ) 授業時間数に余裕がない	39.0%	>	29.7%
カ) 他の科目、教員との連携が難しい	36.8%	>	32.8%
キ) 教員のデジタル機器等に対する苦手意識	46.9%	>	23.4%
ク) マニュアルやノウハウがない	52.3%	>	17.2%
ケ) 推進する教員、キーパーソンが不在	43.8%	>	25.8%
コ) 協力機関や企業がない・探せない	33.6%	<	35.9%
サ) 介護現場との連携が難しい	41.4%	>	28.9%
シ) 機器や通信などの環境が整わない	39.8%	>	29.7%
ス) 機器のメンテナンスが難しい	46.1%	>	25.0%
セ) 予算の確保が難しい（維持を含めて）	57.8%	>	10.1%

※青セル：5割台のセル

※緑セル：4割台のセル

(5) 介護テクノロジーを用いた介護実践の教育

①教育に介護テクノロジーを取り入れている割合及び取り入れている科目

- 【問 13】介護福祉士養成教育に介護テクノロジーを取り入れている割合は 45.3% (58 校) であった。ICTを活用している割合が 63.3% であったことと比べると、介護テクノロジーを教育に取り入れている割合は 18 ポイント低い。

学校種別にみると、四年制大学は 60.0%、短期大学は 71.4%、福祉系高等学校は 56.8% であり、これらは過半数を超えている。一方で、専門学校は取り入れている割合が 33.3% と低位である。

実際に取り入れている科目は生活支援技術が最も多く、次いで介護実習、介護の基本、介護総合演習、コミュニケーション技術、認知症の理解の順であり、「領域：介護」において多く取り入れられている。

②シラバス掲載の有無及び活用を後押ししている要因等（科目別）

- 【質問 14-1】科目「コミュニケーション技術」について、介護テクノロジー教育に関する回答シートに記載があったのは 10 校、介護テクノロジーに関する教育について「シラバスに掲載している」は 2 校、活用の開始時期は 5 年以内が 6 校を占める。

取り扱うきっかけ・活用を後押ししている要因は「介護現場との協働」「学習管理システム（LMS）の導入」「企業との協働」「教員の研修、FD」が要因として多い回答となった。

- 【質問 14-2】科目「生活支援技術」について、介護テクノロジー教育に関する回答シートに記載があったのは 37 校、介護テクノロジーに関する教育について「シラバス

に掲載している」のは19校、活用の開始時期は5年以内が25校を占める。

取り扱うきっかけ・活用を後押ししている要因は「企業との協働」「介護現場との協働」「補助金や助成金」「その他」が要因として多い回答となっている。「その他」では「想定される教育内容（例）に示されたため」という要因も挙げられている。

- 【質問15】「コミュニケーション技術」と「生活支援技術」以外の科目において、介護テクノロジー教育の回答シートに記載があったのは22校、科目数は延32科目、シラバスに介護テクノロジー教育に関する内容を掲載しているのは12校である。

取り扱うきっかけ・活用を後押ししている要因は「学習管理システム（LMS）の導入」「企業との協働」「介護現場との協働」「その他」が要因として多い回答となっている。「その他」では「介護現場でLIFEが導入されたこと」なども挙げられた。

記載された具体的科目は、多い順に、介護過程(6)、社会福祉基礎・介護実習・介護総合演習各(4)、介護実習・介護総合演習(1)、介護の基本(3)、人間関係とコミュニケーション・こころとからだの理解・認知症の理解・ICT介護ロボット・介護ICT・情報処理・チームビルディング演習(各1)などとなっている。

③教育における介護テクノロジーの具体的使用方法や使用場面

- 教育に介護テクノロジーをどのように取り入れているかについては、「実際に体験」「機器を理解」「活用例を理解」「使用方法を習得」「機器を通して学びを深める」に整理・分類できる。

授業の中で、企業や現場から外部講師を招いて、企業や現場等の外部機関に出向いて「実際に体験」という体験型の学びに関する記述が多くみられた。「実際に体験」をしている介護テクノロジーは、移乗・移動・排泄支援、見守りセンサー、コミュニケーションロボット、介護記録についての記載が多かったが、自由記述からは各校が確保できる機器の範囲で対応している様子がうかがえた。

体験型の学びのほかに、福祉機器展に参加したりLIFEやスマート介護の学びを通して多様な「機器を理解」する、現場でどのような活用がされているか「活用例を理解」するなどが挙げられた。

介護テクノロジーの「使用方法を習得」という記述もあったが、相対的には少ない状況であった。

上記のほかに、「機器を通して学びを深める」取組が挙げられ、介護テクノロジーの学びを通して利用者の尊厳の理解、アセスメントや計画立案、科学的介護の理解につなげたり、業務改善や生産性の向上などに触れる授業展開をしているとの記述もあった。

「教育における介護テクノロジーの具体的使用方法や使用場面」（自由記述まとめ）

■実際に体験

- ・ 移乗支援
- ・ 移動支援
- ・ 歩行支援
- ・ 排泄支援
- ・ 見守りセンサー
- ・ コミュニケーションロボット
- ・ 介護記録
- ・ 電子カルテ
- ・ クラウド型情報共有システム
- ・ インカム
- ・ 認知症VR
- ・ 分身ロボット

■実際に体験（外部講師を招いて）

- ・ 企業に来ていただき使用体験
- ・ 外部講師から介護ロボットの活用を学ぶ
- ・ 現場での活用を知る

■実際に体験（外部機関に出向いて）

- ・ 研究開発機関に出向いて
- ・ 現場に出向いて
- ・ 専門店に出向いて

■機器を理解

- ・ 福祉機器展に参加
- ・ LIFEやスマート介護を通して
- ・ 授業内で紹介
- ・ 企業と連携した情報提供

■活用例を理解

- ・ 現場における活用例
- ・ 現場での活用方法
- ・ 写真、イラスト、活用場面動画

■使用方法を習得

- ・ 介護記録の練習
- ・ 移乗方法の習得

■機器を通して学びを深める

- ・ 尊厳の理解
- ・ アセスメントや計画立案
- ・ 科学的介護の理解
- ・ 業務改善
- ・ 生産性の向上

④介護テクノロジー教育において留意又は工夫していること

- ・ 介護テクノロジー教育において留意していることは、「リテラシーを教育」「実践につながる知識」「利用者の理解」「生産性向上」「介護の質の向上」「実際に体験する」「多様な機器や最新の機器」「介護実習との連携」「外部機関との連携」に整理・分類できた。
- ・ 使用する意味や必要性の理解など「リテラシーを教育」する、抵抗感を持たない、データの見方、分析方法など「実践につながる知識」を修得する、「利用者の理解」「介護の質の向上」「生産性向上」の視点に触れることなどが留意点として挙げられた。
- ・ 工夫していることについては、「実際に体験する」、「多様な機器や最新の機器」を取り入れる、「介護実習との連携」を図る、企業や現場等との「外部機関との連携」に積極的に取り組むなどの記述がみられた。

「介護テクノロジー教育において留意又は工夫していること」（自由記述まとめ）

<p>■リテラシーを教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使用する意味 ・必要性の理解 ・メリットとデメリットの理解 ・活用効果の理解 ・情報の管理 ・ICTを活用するマネジメント 	<p>■実際に体験する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際に体験 ・実際に見て触れる
<p>■実践につながる知識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践で生かせる ・抵抗感を持たない ・活用場面の理解 ・活用事例を理解 ・使用方法の理解 ・実物の映像を利用 ・データの見方、分析、活用 ・スマート介護士の教材使用 	<p>■多様な機器や最新の機器</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な機器を紹介 ・最新機器の情報 ・機器を吟味して購入
<p>■利用者の理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利用者の尊厳の理解 	<p>■介護実習との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護実習との連続性
<p>■生産性向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生産性向上に触れる 	<p>■外部機関との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企業のデモンストレーション ・企業に見学 ・職員にレクチャーする内容を学生向けに行う ・企業と連携 ・現場と連携 ・福祉機器展を見学・参加
<p>■介護の質の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・機器がない場合の工夫 ・介護者の健康保持 	<p>■その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理解度や習熟度をチェック ・未来の介護を考える機会をつくる

⑤介護テクノロジー教育における課題

- ・ 介護テクノロジー教育における課題は、「授業展開」「教員」「介護実習」「機器」「連携」「費用」に整理・分類できる。
- ・ 「授業展開」の課題では、介護テクノロジー体験の機会と質の担保が充分ではない、毎年実施できない、授業時間数が確保できないといった課題とともに、決められた流れや時間割の中で体験等の実施時期を調整することの難しさ、基本的な技術軽視への不安などが課題として挙げられている。
- ・ 「教員」の課題では、介護テクノロジーに関するキャッチアップが教員に必要であり、調整や情報収集が教員の負担になっていることが明らかになった。
- ・ 「介護実習」の課題では、実習先が介護テクノロジーを活用していないなどの課題がみられた。
- ・ 「機器」の課題では、機器の確保や最新機器への対応が困難である、対応する機器の種類・数に限界があるなどの課題のほか、レンタルが容易ではないという記述もみら

れた。

- 「連携」の課題では、介護テクノロジーを教育に取り込むためには学外機関との連携の必要性が認識されているとともに、連携先である介護現場の活用が進んでいないことへのジレンマが挙げられている。
- 「費用」の課題では、購入やレンタルの費用確保の困難さが記載されていた。

「介護テクノロジー教育における課題」（自由記述まとめ）

■授業展開 <ul style="list-style-type: none">・ 紹介で終わる・ 説明で終わる・ 1度の体験で終わる・ 体験の機会をつくりたい・ 福祉機器展のみの対応・ 授業時間数が確保できない・ 実際の現場での使用ではない・ 生徒同士の体験にとどまっている・ 毎年実施できない・ 見学時期との調整が必要・ 蓄積データを活用したい・ 現場のデータ活用を活用したい・ 事例がない・ 基本的な技術軽視への不安・ 体験できない	■介護実習 <ul style="list-style-type: none">・ 実習先で導入されていない・ 活用している実習先が限られる・ 実習先が活用しているかわからない
	■機器 <ul style="list-style-type: none">・ 機器の確保が困難・ 最新機器への対応が難しい・ 種類・数に限界がある・ 維持が難しい・ レンタル期間が限定される・ レンタルの仕組みがほしい
	■連携 <ul style="list-style-type: none">・ 現場の活用が進んでいない・ 学外機関との連携が必要
■教員 <ul style="list-style-type: none">・ 教員による情報収集が必要・ 情報収集が難しい・ 担当する教員に負担・ キャッチアップが必要・ I Tリテラシーがない	■費用 <ul style="list-style-type: none">・ 費用確保が困難・ 機器が高額・ コストパフォーマンスが悪い・ 無償で体験ができない

⑥介護テクノロジー教育により期待される効果、効果の把握・測定方法

- 介護テクノロジーを教育に取り込むことにより期待される効果は、「教育への効果」「介護実習への効果」「就労先での効果」「その他の効果」に整理・分類できる。
- 「教育への効果」では、生徒・学生のモチベーション、利用者の理解、知識・体験の広がりなどとともに、業務負担や介護者の健康保持、介護の質の向上の理解につながるなどの記述があった。また、「介護実習への効果」として、記録関連の介護テクノロジーを活用することで情報の共有が容易になり、随時の指導・確認ができる等の効果も挙げられている。
- 「就労先での効果」は、現場で介護テクノロジーの活用を提案できる、利用者にあった機器の活用やQOLを意識した活用ができるなど、現場での活用や普及促進を担う人材の育成効果への期待が明らかになった。

- ・「その他の効果」では、学生募集に効果、求人の要件となっている、介護のイメージアップといった関心を高め、人材確保につながる効果を期待する記述がみられた。
- ・「効果の把握や測定の方法」は、アンケートやレポート等で授業等の効果を把握していると回答がある一方で、把握していない・わからないなどの記述もあった。

「介護テクノロジー教育により期待される効果、効果の把握・測定方法」
(自由記述まとめ)

■教育への効果

- ・学びのモチベーション
- ・利用者の理解につながる
- ・利用者の尊厳の理解につながる
- ・利用者に配慮した機器の活用
- ・知識・体験の広がり
- ・見学や体験前の事前学習になる
- ・活用場面を理解
- ・業務負担軽減を実感
- ・介護者の健康保持
- ・質の高いケア
- ・科学的介護につながる

■介護実習への効果

- ・随時、指導・確認ができる
- ・実習日誌を実習先と共有
- ・実習日誌を教員間で共有
- ・日本語の負担軽減（留学生）
- ・日誌の紛失防止

■その他の効果

- ・学生募集に効果
- ・求人の要件
- ・介護のイメージアップ

■就労先での効果

- ・実際に活用ができる
- ・現場で提案ができる
- ・使用に抵抗感がない
- ・現場での普及促進につながる
- ・現場で積極的に活用できる
- ・利用者にあった機器の活用ができる
- ・利用者のQOLを意識した活用ができる
- ・中核的な人材となる

■効果の把握や測定の方法

【把握している】

- ・授業アンケート
- ・振り返りシート
- ・課題レポート
- ・定期試験
- ・学生からの言葉

【把握していない・わからない】

- ・測定方法は未確立
- ・評価基準がない
- ・アンケートを行っていない
- ・実施していない
- ・わからない

⑦介護テクノロジー教育に関する今後の展開と期待

- ・介護テクノロジー教育に関する今後の展開と期待は、「取組を継続」「体験の充実」「体験にとどまらない学び」「機器の充実」「教員の負担軽減」「介護を変える」「介護のあり方」に整理・分類できる。
- ・介護テクノロジー教育に関する今後の展開と期待として、すでに教育に取り込んでいる養成施設等は現在の取組を毎年実施するなど「取組を継続」していくことが挙げられている。
- ・授業の中で体験学習が多く取り入れられていることは記述のとおりであるが、今後の期待においても、最新の機器や多様な機器等を活用して「体験を充実」させることの必要性について記載があった。

- ・「体験にとどまらない学び」では、導入の意義の理解を深める、使い方や効果などを現場を通して学ぶ、外部講師・機関と連携して多様な技術に触れる、機器導入のノウハウを知る、蓄積データの活用、利用者に応じた機器の理解や活動など、リテラシーやより深い知識や技術の修得への期待が挙げられている。
- ・「機器の充実」では、養成施設等で機器を共有する、最新の機器選定と貸出を期待するなど、機器確保のハードルを下げる意見が挙げられている。
- ・そのほか、機器の調達を特定の教員が担うことがないように「教員の負担軽減」を図る、介護テクノロジーを活用した新たな支援のあり方、介護現場での生産性向上、科学的介護の推進など、これからの「介護のあり方」が推進されることへの期待も挙げられている。

「介護テクノロジー教育に関する今後の展開と期待」（自由記述まとめ）

<p>■取組を継続</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎年実施する ・継続する 	<p>■機器の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内で機器を充実 ・養成施設等で機器を共有 ・最新の機器選定と貸出 ・関連企業との関係を構築 ・必須備品としての整備方針要 ・実習先のWi-Fi利用 ・機器の使いやすさの向上
<p>■体験の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・購入による体験 ・レンタルによる体験 ・最新機器の体験 ・授業の中での体験 ・現場で体験 ・多様な機器を体験 	<p>■教員の負担軽減</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特定の教員に頼らない調達介護を
<p>■体験にとどまらない学び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入の意義の理解 ・使い方や効果などを現場を通して学ぶ ・外部講師・機関と連携して多様な技術に触れる ・機器導入のノウハウ ・蓄積データの活用 ・活用方法を学ぶ ・利用者に応じた機器の理解 ・利用者の安全に配慮した活用 ・学習意欲の向上 ・介護実習でいかせる力を養う 	<p>■介護を変える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進路選択の要件 ・介護現場を変革する人材 ・小中学生が介護ロボットを体験
	<p>■介護のあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意思疎通が難しい方への支援 ・新たな支援のあり方 ・介護現場での生産性向上 ・科学的介護の推進

⑧関心がある介護テクノロジー

- ・【問 16】介護福祉士養成課程において取り扱いたいと考える介護テクノロジーを学校種別にみると、四年制大学や短期大学は排泄支援（予測・検知を含む）、見守りセンター・システム、コミュニケーションロボット、移乗・移動支援、専門学校や福祉系高等学校は介護記録・情報共有支援に関心が高い。
- ・関心の程度を示す累計値は、短期大学、四年制大学に高く、次いで福祉系高等学校、

専門学校の順である。専門学校は「特にない」や無回答の割合も高く、他に比べると“取り入れている割合が低く、関心も低い”状況にある。

⑨介護テクノロジー教育に関するこれまでの取組、今後の意向

- ・【問 17】介護テクノロジー教育に関するこれまでの取組を学校種別にみると、短期大学は『取り組んできた』※1、四年制大学、福祉系高等学校、専門学校は『取り組んでこなかった』※2の割合が高い。
- ・今後の意向は、いずれの学校種別も『取り組みたい』※3という意向が6割以上である。四年制大学、短期大学は『取り組みたくない』は0%である一方で、福祉系高等学校と専門学校の1割台は今後も『取り組みたくない』※4と回答している。

※1『取り組んできた』=積極的に取り組んできた+取り組んできた

※2『取り組んでこなかった』=あまり取り組んでこなかった+全く取り組んでこなかった

※3『取り組みたい』=是非、取り組みたい+取り組みたい

※4『取り組みたくない』=あまり取り組みたくない+全く取り組みたくない

⑩介護テクノロジー教育に関する重要な視点

- ・【問 18】以下、ア)～カ)について重要であると考えているかを尋ねたところ、重要な視点と考えている割合が最も高いのは、オ)リテラシー（現場で活用する力）を教育する77.3%である。しかし、いずれにおいても7割以上が『重要である』と回答しており、項目による大きな違いはみられなかった。

介護テクノロジー教育に関する重要な視点

介護テクノロジーを教育することについて、どのような視点が重要であると考えてるか	『あてはまる』※1	『あてはまらない』※2
ア) 介護テクノロジーの種類、特性を教育する	72.7%	9.3%
イ) 介護テクノロジーの活用による介護への効果を教育する	73.4%	6.3%
ウ) 活用にあたってのセキュリティ対策（個人情報の保護）を教育する	76.6%	5.5%
エ) 介護テクノロジーの活用における倫理観を教育する	73.4%	5.5%
オ) リテラシー（現場で活用する力）を教育する	77.4%	4.7%
カ) 介護テクノロジーの活用における介護福祉士の役割や関わりを教育する	75.7%	3.1%

※1『あてはまる』=とてもあてはまる+あてはまる

※2『あてはまらない』=あまりあてはまらない+全くあてはまらない

(6) まとめと考察

ポイント

- I C T等の活用 63% > 介護テクノロジー教育の実施 45%
- 専門学校において活用や導入が進んでいない
- 全ての科目において I C T等の活用、介護テクノロジー教育が行われていた
- I C T等の活用がもたらす教育の変化へのインパクト
- 介護テクノロジー教育は外部機関との連携がポイント
- リテラシー教育が重要
- I C T等の活用及び介護テクノロジー教育による効果が明らかに

■ I C T等の活用 63% > 介護テクノロジー教育の実施 45%

- ・ 介護福祉士養成教育に I C T等のデジタル機器・技術を活用している割合は 63.3%、介護テクノロジー教育を実施している割合は 45.3%であった。介護テクノロジー教育の実施は5割を下回り、I C T等活用に比べると取組は進んでいない。
- ・ 調査結果では、動画を含めた I C T等活用は新型コロナウイルス感染症拡大以前においても活用されていた様子が見える一方で、介護テクノロジー教育はここ数年の間に取り組みられるようになった状況にある。導入年数の短さが、介護テクノロジー教育の実施率の低さの要因の一つである可能性はある。取組みたい意向も多いことから、介護テクノロジー教育実施の割合は今後高くなる可能性がある。
- ・ 介護テクノロジー教育に関する課題（自由記述）として、実施を阻む要因につながる内容に注目すると、レンタル・購入等を含めた機器の確保、費用の確保、学外機関との連携、これらをマネジメントする教員への負担が課題として抽出できる。
- ・ I C T等活用は教員の負担軽減効果が認められた一方で、介護テクノロジー教育は教員への負担が課題となっている。

■ 専門学校において活用や導入が進んでいない

- ・ 学習管理システム（LMS）は、学校種別により導入の有無に違いがみられ、四年制大学や短期大学における導入が進んでいるが、専門学校の導入率は際立って低い結果であった。専門学校が学習管理システム（LMS）を導入していない理由は、「予算の確保・機器や通信などの環境が整わない・教員の対応が難しい」が上位である。
- ・ また、専門学校における I C T等活用、介護テクノロジー教育のどちらにおいても、活用や実施の割合は低い結果となった。I C T等活用を阻んでいる要因の上位には「マニュアルやノウハウがない・予算の確保が難しい・推進する教員やキーパーソンが不在」が挙げられている。
- ・ 学習管理システム（LMS）の導入及び I C T等活用のハードルとなっている共通要因は「財源確保」と「推進をする人がいない」ことにある。

■全ての科目においてICT等の活用、介護テクノロジー教育が行われていた

- 「介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き(公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2019)」には、コミュニケーション技術及び生活支援技術には想定される教育内容の例として、「情報の活用と管理におけるICT活用」「介護ロボットを含んだ福祉用具の活用」が示されている。本調査の結果では、上記2科目に限らず、介護福祉士養成課程の全ての科目においてICT等の活用、介護テクノロジーにかかる教育が行われている実態が明らかになった。
- ICT等の活用では学習管理システム(LMS)や動画の活用が多くみられ、介護テクノロジーに比べると「領域：人間と社会」「領域：こころとからだのしくみ」においても活用が進んでいる。学習管理システム(LMS)の導入と多様な動画コンテンツの存在がICT等の活用を拓いている。また、少数ではあるがデジタル教科書、VR活用もなされており、今後のAI活用への関心もみられた。社会のトレンドを踏まえると、今後もICT等の活用は広がる可能性がある。一方で、使用方法や情報管理などのリテラシーのあり方、適切な動画教材の少なさが課題となっている。
- 介護テクノロジーにかかる教育は、全ての科目において取り入れられているが、その特性から「領域：介護」の科目における導入が多い。「領域：介護」の科目では体験型の教育が多く展開され、「領域：介護」以外の科目では知識として制度や動向、種類や特徴を知る教育が展開されていた。また、利用者の理解、尊厳の理解、科学的介護の理解につなげ、今後は業務改善や生産性向上を知る機会にもつなげたいとする意見が出されており、介護テクノロジー教育は介護の本質やあり方への教育につながる可能性を有している。

■ICT等の活用がもたらす教育の変化へのインパクト

- ICT等の活用は、学習管理システム(LMS)の特性を活用した情報管理、情報共有、リアルタイム指導、動画やVRなどの視覚的な学び、デジタル教科書活用など、教育の方法に変化に大きなインパクトを与えていることが明らかになった。結果として、繰り返しの学びや事前・事後学習への取組が容易になった、生徒・学生の理解が深まった、教員の業務負担が少なくなった等の効果が挙げられている。ただし、一部の養成施設等においては、資料を画面で共有、福祉機器展に行くなどこれまで取り組んできた内容にとどまる記載もあり、活用には格差がある状況も見える。
- 一方で、ICTが苦手な生徒・学生が一定数いることや、留学生・年齢の高い学生がいる養成施設等がある実態を踏まえ、生徒・学生の理解度や特性を理解する取組や一人ひとりの学びを支える工夫・配慮の必要性が指摘されている。

■介護テクノロジー教育は外部機関との連携がポイント

- 介護テクノロジー教育は、介護テクノロジーを学内において、あるいは介護現場や関係機関に出向いて体験する体験型の教育が多く行われている。機器を確保する予算(購入・レンタル)、教員が機器に詳しくない等が課題として挙げられているが、これらを克服する対応として補助金等の活用や外部機関(介護現場・企業・関係機関)

と連携があり、外部機関との連携の重要性・必要性が調査結果においても指摘されている。

- 外部機関との連携の工夫は、後述の事例調査においてまとめている。

■リテラシー教育が重要

- ICTや介護テクノロジーは日々進化し、且つ多種多様であるため、機器の使い方を学んでも現場でいかせない可能性が充分考えられる。調査の結果からは、養成施設等における教育は、単なる機器の使用方法ではなく、リテラシーを教育することが重要であるとの意見がみられた。
- リテラシー教育の具体的効果、リテラシーの先にある介護の質の向上、業務改善や生産性向上に教育の中でどのようにアプローチしていくかという点については、アンケート調査の結果からは明らかにならなかった。

■ICT等の活用及び介護テクノロジー教育による効果が明らかに

- 本調査において、ICT等の活用及び介護テクノロジー教育に関する多くの効果が明らかになったことは重要な成果と考えられる。
- 具体的には、教育の質向上（予習復習の定着や多様なアプローチを通して分からないところを残さない等）、効果的な介護実習の実施、教員の負担軽減、生徒・学生の意欲・知識・理解向上、就労先で活用や普及促進をする人材となる（卒業後の期待を含めた記載が多かった）、少数ではあったが学生募集や現場の人材確保につながる効果（介護テクノロジーを活用している現場に就職希望）、介護のイメージアップの効果等が明らかになった。自由記述は定性的なデータであるため、限定的・特定の養成施設等が経験している効果もあるが、自由記述に記載された多様な効果を共有し、自校の教育活動の参考や目標とすることは重要である。

3-2 ヒアリング調査結果の概要及び考察

(1) 教育におけるICT等の活用

事例においては、【学習管理システムやコミュニケーションツール等】【動画】【VR】【デジタル教科書】【パソコン・タブレット・スマートフォンなどのデバイス】などの活用がみられ、それぞれにおいて様々な効果や工夫のポイント、課題等が明らかになった。

①学習管理システムやコミュニケーションツール等__生徒・学生と教員の双方に大きな効果

事例では、学習管理システムやコミュニケーションツールを活用していないのは1校のみであった。学習管理システムを活用しているのは2校であり、他ではコミュニケーションツール（Microsoft Teams）や学習管理アプリケーション（Google Classroom）などを活用して教育が展開されていた。➡事例2、3、4、7、8

これらのツールを活用した結果、双方向でタイムリーな対応、データの共有、データの蓄積がなされ、生徒・学生と教員の双方に大きな効果が明らかになった。

効果	具体的な効果の例
双方向でタイムリーな対応	<ul style="list-style-type: none">・ 教員とつながっている安心感（生徒・学生）・ 学びへのモチベーションを後押し（生徒・学生）・ 一人ひとりの特性や課題の把握（教員）・ 次回の授業の見直し（教員）
データの共有	<ul style="list-style-type: none">・ 予習や復習のしやすさ（生徒・学生）・ 繰り返して学ぶ（生徒・学生）・ 協働作業が他者の理解、チームづくりに（生徒・学生）・ 介護実習先・教員間の連携による教育の展開（教員等）
データの蓄積	<ul style="list-style-type: none">・ 教員の業務効率化（教員）・ 蓄積データを活用した授業の展開（教員）

導入当初は設定などの初期対応に苦労があるが、次年度以降は教員の業務効率化につながるという意見もあった。➡事例4

また、介護実習記録を画像共有するなどの工夫を展開している例もあり、多様な機能がなくても、運用の工夫により、今あるツールや仕組みを最大限に活用している取組もみられた。システムの機能に頼ることなく、運用面を工夫するスモールステップの例ととらえることができる。➡事例2、7

学習管理システムやコミュニケーションツール等は便利である反面、活用するほど情報に埋もれる生徒・学生が出てくるという指摘もあった。時間内に課題提出を終わらせる、教員間で課題提示を共有するなど、運用をする側の配慮も参考となる。

➡事例2、4、8

②動画_工夫によって様々な活用ができる

動画による視覚的教材は、生徒・学生の理解を促す効果があることから、様々な科目で活用が進んでいた。

留学生にもわかりやすい、静止して説明ができる、資料として共有すれば繰り返して見ることができるなど、メリットは多様で、とりわけ、領域「介護」「こころとからだのしくみ」における科目では活用は効果的であるという示唆があり、本事業のアンケート調査においても同様の結果が明らかになっている。

動画については、スマートフォンで簡単に撮影できる実態があり、教育に適したコンテンツがないことを背景に教員が自作したり、生徒・学生同士で動画を撮って確認作業をするなどの創意工夫に満ちた活用が展開されていた。➡事例2、7

また、Zoomを利用してライブ配信するなどの取組もみられ、ウェブ会議ツールを使用した工夫の事例となっている。➡事例8

③VR_新たな教育の可能性につながる

VRは、現実のように体験できるメリットがあり、例えば認知症の方の見え方を体験できるなど、非常に効果的であるとの意見があった。また、VRゴーグルを使って介護者が見ている視点を確認するなど、これまでにない新たな教育の可能性が見えてくる。

高価である、VRのコンテンツが限られていることが課題とされているが、企業からデモンストレーションの機器を借りたり、生徒等でVRのコンテンツを作成するなど、活用を進める取組がみられた。➡事例1、2、7

④デジタル教科書_様々なメリットがある

デジタル教科書を活用しているのは1校のみであった。➡事例4

1つのデバイスで全ての教科書を見ることができ、持ち運びの便利さとともに、忘れ物が無くなる、メモを書いたり、付箋を貼ったり、検索が簡単にできる機能が使え、便利であるなどの意見が挙げられ、実際の活用状況からは紙面の教科書にはないメリットがみえてきた。教科書を活用して補足資料等を作成しやすくなる、ペーパーレス化が進むという意見もあった。

⑤パソコン・タブレット・スマートフォンなどのデバイス__選択と活用は多様に

事例を概観するかぎり、生徒や学生がデバイスを持っていない、Wi-Fiがないなどの課題はゼロではないものの、デバイス等の有無は時代の流れとともにICT活用を阻む大きな課題ではなくなっている様相がみられた。生徒・学生の多くはスマートフォンを持ち、パソコン・タブレット・スマートフォンのどれを使うかの選択は広がり、パソコンよりもスマートフォンやタブレットの活用が進んでいる状況がみられた。

事例ではタブレット等を支給して効果的に教育を展開している学校もあるが、そうした対応がなくても、生徒や学生が所持しているパソコン・タブレット・スマートフォンを教育において活用できる状況にあるといえる。

ただし、デバイスの操作が苦手、スマートフォンを所持していない、自宅にWi-Fiがないなどの課題が福祉系高等学校を中心に挙げられた。こうした生徒等に対しては、学内で作業や学習を進めるなどの対応がなされており、一定の配慮が必要である。

(2) 介護テクノロジー教育

事例においては、介護テクノロジー教育を展開するにあたり【連携による効果的な教育】【科目】【授業展開】【費用】という点において、様々な工夫や課題等が明らかになった。

①連携による効果的な教育__様々な連携先・連携方法がある

事例では、各校が多様な機関等と連携し、様々な方法で介護テクノロジー教育を展開している状況が確認でき、今後、介護テクノロジー教育をすすめていくにあたっては、連携をする先、連携の方法ともに示唆に富む事例が多くみられる。

【連携先】 介護テクノロジー教育をすすめるための連携先として、企業、施設・事業所、地域機関、大学や研究機関等があった。

それぞれには強みや特性があり、連携先と協働して教育していく取組には大きな効果が期待できる。

連携先	ポイント
①企業	<ul style="list-style-type: none"> ・介護テクノロジーを開発・販売している企業 ・特定の機器に特化した機能や活用を体験、理解できる ・国際福祉機器展、CareTEX、施設・事業所、教員間のネットワーク等を活用してつながる <p>➔事例4、5、7</p>
②施設・事業所	<ul style="list-style-type: none"> ・介護テクノロジーを活用している施設・事業所 ・実際の活用や運用、マネジメントの必要性を理解できる ・介護実習や卒業生を通してつながる、地域の推進機関や企業を通してつながる <p>➔事例1、3、4、5、6、8</p>
③地域機関	<ul style="list-style-type: none"> ・介護テクノロジー普及の推進を担う地域の機関等 ・多様な機器、最新の機器を体験、理解できる ・プラットフォーム機関への相談、企業や介護事業所との情報共有を通してつながる ・教育機関との連携をしていない機関もある <p>➔事例6</p>
④大学や研究機関等	<ul style="list-style-type: none"> ・大学に講義を依頼 ・研究機関に出向いて介護テクノロジーを学ぶ <p>➔事例3、4</p>

【連携方法】 連携先との連携方法として多くみられたのは、①企業や施設・事業所の職員が来校して授業で講義をする事例である。講話という形態をとっている場合もあれば、複数回の連続講義を通して多様な機器や機器の詳細を学ぶ取組もみられた。企業の講義に地域の施設・事業所が参加している例もあり、施設・事業所が学生の学びの実態を知り、最新機器を知る機会につながっている事例があった。

②講義にとどまらず、授業内で機器を体験する取組もみられた。企業や施設・事業所が来校して校内にある既存の機器を活用して体験する機会を設けたり、企業や施設・事業所が機器を持ち込んで体験の機会をつくる事例があった。対応が可能な企業や施設・事業所が限定されることや、体験できる機器に限られるという課題があるものの、生徒・学生の深い学びにつながる取組ととらえることができる。

③企業、施設・事業所、地域の介護テクノロジー推進機関等に出向き、話をきく、実際に見る、体験をする取組があった。現場での具体的活用場面や校内では体験でき

ない多様な機器を知る機会となる一方で、受入先との日程調整や生徒・学生の人数が多い場合の調整、生徒・学生の移動手段の確保などの課題が挙げられた。

連携方法	ポイント
①授業で講義	<ul style="list-style-type: none"> ・企業や施設・事業所の職員、大学の教員等が来校して講義や講話 ・1回のみ、連続講義などの取組がある ・企業の講義に、地域の施設・事業所が参加した例もある <p>➡事例3、4、5、7、8</p>
②授業で体験	<ul style="list-style-type: none"> ・企業や施設・事業所が来校して、校内にある既存の機器の体験をサポート ・企業や施設・事業所が機器を持ち込み、授業内で体験する機会をつくる ・持ち込める機器の種類や台数等には限界がある <p>➡事例3、5、7、8</p>
③出向いて話を聞く・見る・体験をする	<ul style="list-style-type: none"> ・介護テクノロジーを制作・活用している企業や施設・事業所に出向いて話を聞く・見る・体験をする ・介護テクノロジーがある推進機関や研究機関に出向いて話を聞く・見る・体験をする ・実際の活用や多様な機器を知る機会となる ・受入先との日程調整、生徒・学生数が多い場合等の対応の工夫等が必要である <p>➡事例4、6</p>

②科目_様々な科目で介護テクノロジー教育が展開されている

介護テクノロジーの教育を既存の科目において展開する事例が多くを占めたが、独自科目を設けて教育をする事例もあった。独自科目を設けている場合は、企業や施設・事業所と連携した授業を構成しやすく、多様な機器や場面の体験に加え、介護現場でのマネジメントの視点を学ぶことができている。➡事例5

また、手引きの【想定される教育内容の例】に記載されたコミュニケーション技術や生活支援技術の科目に限定せず、様々な科目で介護テクノロジー教育が展開されている実態が明らかになり、アンケート調査からも同様の結果が得られている。介護過程の授業でICT等や介護テクノロジーを取り入れ、生徒・学生の介護の理解深化に取り組む事例もみられた。➡事例1、2、3、4、6、7、8

③授業展開__授業展開の工夫とリテラシー教育の必要性

授業の組み立てを工夫し、科目間連携や連携先との適時な連携を通して、介護テクノロジーの教育を進める事例があった。学生等の理解を促す授業の組み立て、カリキュラム構成は参考になる。➡事例6

介護テクノロジーの教育のポイントとして、介護現場で活用できるリテラシーやマネジメントを教育することの大切さが、複数の事例で語られている。また、介護テクノロジーありきではないことを学ぶ、介護テクノロジーを通して利用者の気持ちの理解、尊厳の理解につなげる大切さも事例において指摘されている。意識的な教員の問いかけ、授業展開も事例から読み解くことができる。

➡事例1、2、3、4、5、6、7、8

④費用__介護テクノロジーに関する機器等を確保するために

介護テクノロジーの教育に必要な機器等を確保するためには、費用等が課題となっている。

機器を購入するか、レンタルするかについては、教育だけでなく研究にも活用する機器類は学内で協議の上購入する、バージョンアップする機器やコストの高い機器類はレンタル対応するなどの枠組みを設けている事例があった。➡事例6

レンタルについては、デモンストレーション機器の貸出し、期間限定による貸出しなど企業による様々な対応があり、学校の所在地によっては運搬費がかかるなどの課題もみられた。

購入については、ICTやDX等を推進する事業の補助金等を活用している事例もあった。➡事例1、3

一方で、購入やレンタルにとらわれることなく、前述したような連携先と協働することで、費用を押しえつつ効果的に教育に取り組めることが明らかになった。

3-3 本調査研究のまとめ

(1) ICT等活用や介護テクノロジー教育の展開

本調査研究の第1回検討委員会の議論において、「ICT等の活用を推進する」「介護テクノロジー教育を広げる」ことを出発点に、その先にある「ICT等活用や介護テクノロジー教育を展開することで、教育がどのように変わるのか、介護がどのように変わるのか」が重要であるとの視点が共有された。

上記を踏まえ、「教育の変化」「介護の変化」について言及する。

①教育の変化

アンケート調査やヒアリング調査の結果からは、ICT等の活用による双方向のやり取りや視覚的な教材が、生徒・学生の学びのモチベーション、主体的学び、理解の深化等に良い影響を及ぼしている実態が把握できた。また、介護テクノロジー教育は、生徒・学生の就労先の選択にも影響を与えるなど、生徒・学生の介護に対する意識に変化を与えている。

教員は、生徒・学生一人ひとりの特性や学習状況を理解するツールとしてICT等を活用し、それを個別の指導にいかす取組とともに、授業アンケートなどを通じて疑問や分からないところを残さない授業展開をする、蓄積されたデータをいかす試み、資料の共有による繰り返しの学び(予習・復習)の環境を整えるなど、生徒・学生の理解の深化につながる教育方法の工夫に取り組んでいる状況が把握できた。「これまで学生が理解しているか不安なところもあったが、授業アンケートなどを通して、次の授業で理解ができていない部分を補足したり、確認することができる。教員としての安心にもつながり、授業を改善していくきっかけになっている」という意見がヒアリング調査において出されており、ICT等活用における教育の変化の一端ととらえることができる。

施設・事業所や企業等については、アンケート調査やヒアリング調査の対象ではなかったため間接的な把握にとどまるが、ヒアリング調査からは施設・事業所や企業等が養成施設等に協力し、介護福祉士養成教育において生徒・学生と一緒に育てていく取組が多く把握できた。こうした「連携」は、介護現場でのマネジメント、介護テクノロジーの特性の理解など、施設・事業所や企業等にこそできる現場目線、開発目線の視点を教育にいかせる取組であり、生徒・学生の意識の変化や理解の深化に影響を与える教育の展開につながっている。

②介護の変化

介護の変化については、象徴的な事例がいくつかある。介護テクノロジー教育等を通して、利用者の気持ちや尊厳の理解が進んだという例、利用者にあった支援の方法を提案した例、科学的介護の理解につながった例などである。

具体的には、介護テクノロジーを使った排泄の場面で利用者の「恥ずかしい」という気持ちを理解し声かけの工夫を図る、データの理解を通して足を置く場所を変えて楽な姿勢を維持する支援を提案した、アラームが鳴って対応するのではなくアラームが鳴る前に対応することが介護にとって大切であることを認識したなどである。

これらは、介護テクノロジーを使うことで利用者の状況の把握、介護を再考するきっかけとなるよう、教員が気付きのための声かけや思考の整理をする工夫をしている。介護テクノロジーの導入や使用が教育の本来の目的ではないことを改めて認識するとともに、教育の工夫により介護テクノロジーの導入や使用が介護に変化をもたらす機会になることを示す例である。

本調査研究では、介護福祉士養成教育におけるICT等活用や介護テクノロジー教育が、介護現場における「介護」をどのように変えたかというところまでは把握ができていない。これらは今後の課題といえる。

(2) 今後に向けて

ICT等活用や介護テクノロジー教育を推進するにあたり、本調査研究の結果を踏まえ「新たな連携」「教員の学びの機会」「スタートアップや活用の支援」の必要性を明示する。

①新たな連携

養成施設等の一部からは、生徒・学生の確保が難しい今、ICT等活用や介護テクノロジー教育にまで対応ができないという意見が寄せられている。ICT等活用や介護テクノロジー教育をすすめるためには、学校や教員の努力だけでは限界も見え、今後は新たな連携のあり方を模索していく必要がある。

まず、学校間の連携として、例えば、介護テクノロジー教育について機器の確保を学校間で調整する仕組み等が考えられる。ほかに、施設・事業所と連携して一緒に学びの機会をつくっていく、企業と連携して教員が介護テクノロジーを学んだり、協働して効果的な教育への活用を模索するなどが考えられる。

本調査研究において「連携」が一つのキーワードであることを踏まえると、新たな連携について様々な視点から検討を進める必要がある。

②教員の学びの機会

アンケート調査からは「教員のキャッチアップが必要」、教員向け研修会の意見からは「学びの機会をつくってほしい」という意見が挙げられた。ICTや介護テクノロジーの進歩は飛躍的であり、教員の知識等が追い付かない状況は想像に難くない。また、教員向け研修会の意見では、「企業や介護施設・事業所等との連携が重要であることを知った」「尊厳や利用者の気持ちの理解につながることで腑に落ちた」などの意見があり、「具体的にどうしたらよいのか」「なぜ教育が必要なのか」というスタートのところで戸惑い、立ち止まっている状況が見えてくる。

ICT等活用や介護テクノロジー教育を推進するにあたっては、ICTや介護テクノロジーについて学び、教育することの意味や教育方法等を共有する「教員の学びの機会」を積極的につくっていく必要がある。

③スタートアップや活用の支援

ヒアリング調査では、熱意と関心を持つ教員が、ICT等活用や介護テクノロジー教育を創意工夫のもとすすめている様子が伝わってきた。一方で、教員の努力に頼っていたり、教員に負担がかかっている様子も見えてきている。アンケート調査からは、推進する人材の不在がICT等活用や介護テクノロジー教育推進の障壁となっているという結果も得られた一方で、ICT等活用や介護テクノロジー教育に取り組んでいきたいという意向が大きいことも確認できている。

ICT等活用や介護テクノロジー教育を実施している学校がその内容を深化させることは重要であるが、同時に、活用できていない・教育に取り入れていない養成施設等に取り組むを広める視点は、教育に差を生じさせないという意味からも大変重要である。活用できていない・教育に取り入れていない養成施設等を後押しするためのスタートアップ支援、活用支援の仕組みを検討する必要がある。

第2章 アンケート調査集計結果

1 概要

養成施設等におけるICT等活用に関する教育実践の実態調査及び課題を把握するためのアンケート調査を行った。

アンケート調査の実施(再掲)

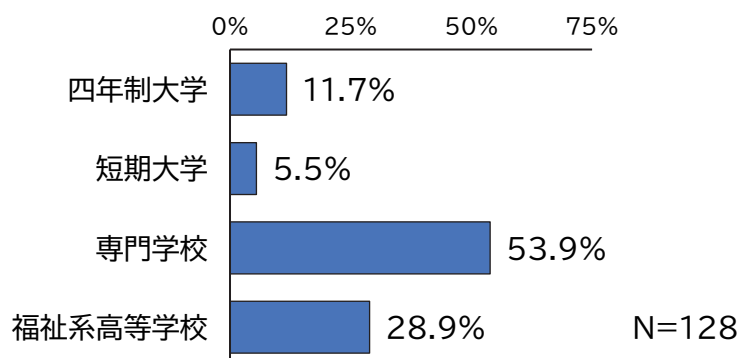
目的	<ul style="list-style-type: none"> 養成施設等におけるICT等を活用した教育の実態と課題の把握 ヒアリング調査につながる事例の抽出 					
調査対象者	<ul style="list-style-type: none"> 介護福祉士養成施設及び福祉系高等学校 					
悉皆・抽出別	<ul style="list-style-type: none"> 全数（9月30日時点） 					
調査方法	<ul style="list-style-type: none"> 郵送で依頼、ウェブ又はエクセルでの回答 エクセルは指定URLからダウンロード、ファイルをメールで送信 					
調査時期	<ul style="list-style-type: none"> 10月15日（水）郵送、11月14日（金）締切 →11月21日（金）まで延長 11月11日（火）養成施設へ回答勧奨メール、11月18日（火）福祉系高等学校へ回答勧奨メール 					
調査客対数と回収状況	種別	対象数	エクセル回収数	WEB回収数	B回収数合計	B/A回収率
	四年制大学	52	2	13	15	3.9%
	短期大学	38	1	6	7	1.8%
	専門学校	182	3	66	69	18.2%
	福祉系高等学校	108	11	26	37	9.7%
	合計	A 380	17	111	128	33.7%

2 集計結果

■基本属性

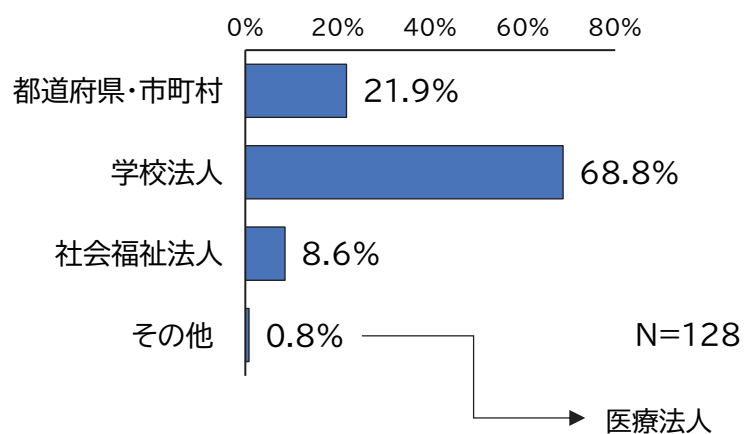
(1) 学校種別

【質問1】学校種別をお教えてください。(1つに○)



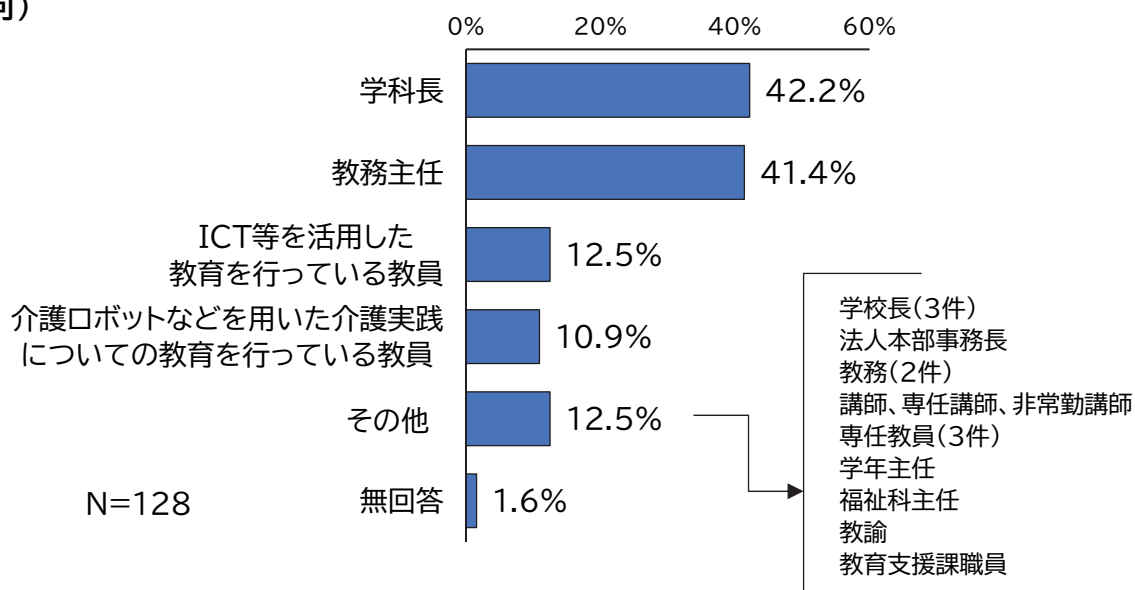
(2) 設置主体

【質問2】貴校の設置主体をお教えてください。(1つに○)



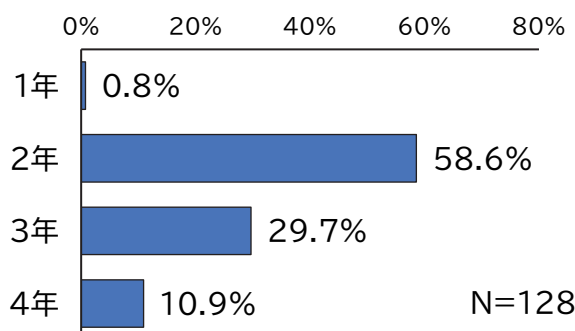
(3) 調査にご回答いただく方の職位

【質問3】この調査にご回答いただく方の職位（お立場）等をお教えてください。（複数回答可）



(4) 教育年限

【質問4】介護福祉士養成にかかる教育年限をお教えてください。



(5) 介護福祉士養成に関する学科、コースの教員数

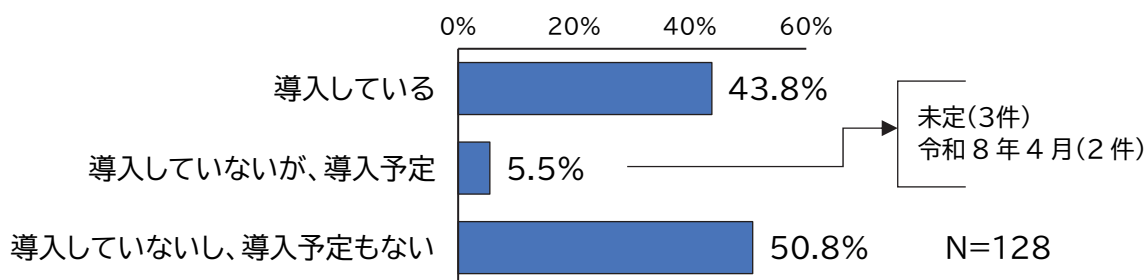
【質問5】介護福祉士養成に関する学科、コースの教員数をお教えてください。

	専任			非常勤		
	回答学校数	平均	最大	回答学校数	平均	最大
全体	126	4.2	9	111	8.1	36
四年制大学	15	4.3	9	10	8.6	20
短期大学	7	3.9	5	6	9.8	22
専門学校	67	3.9	7	60	11.3	36
福祉系高等学校	37	4.9	8	35	2.2	5

■学習管理システム（LMS）

（6）学習管理システム導入の有無

【質問6】貴校では、学習管理システム（LMS）（課題提示、レポート提出、教材共有などを行う仕組み）を導入していますか。



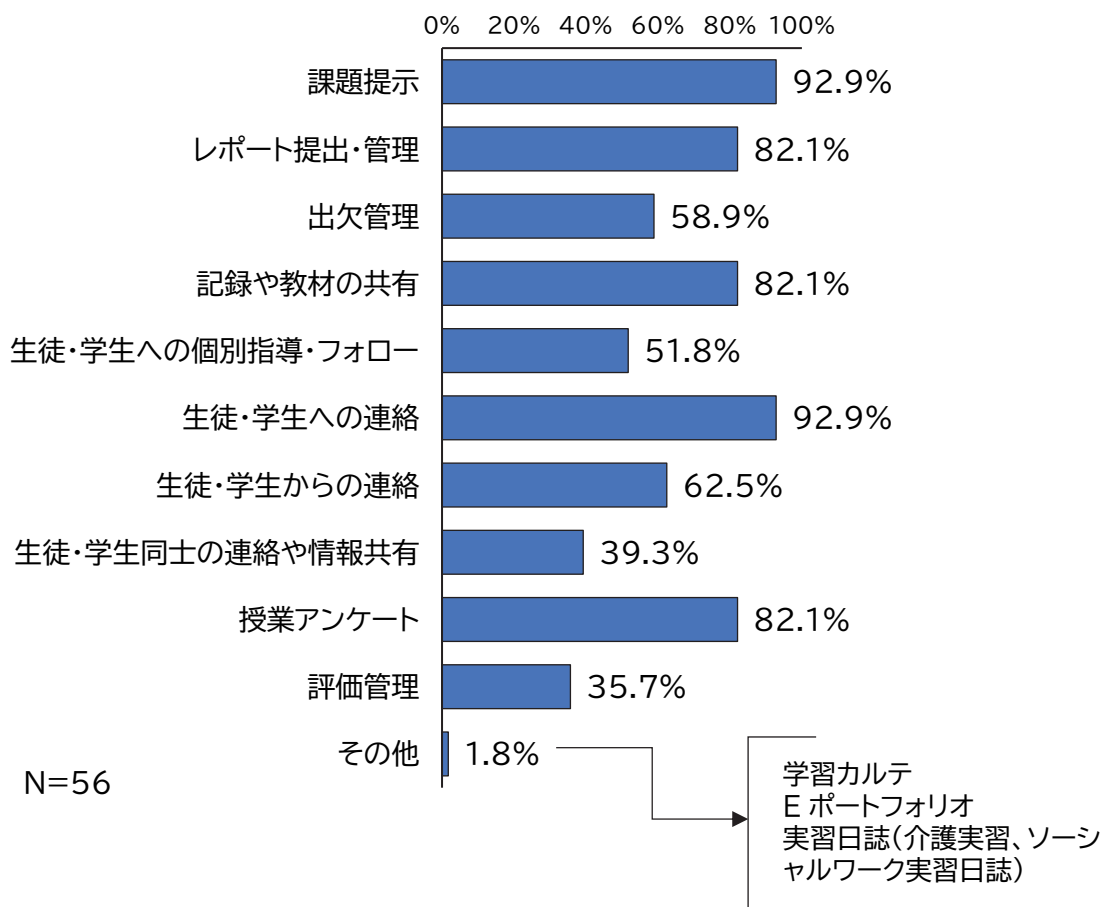
学校種別／学習管理システム導入の有無

	合計	導入している	導入していないが、導入予定	導入していないし、導入予定もない
全体	128 100.0	56 43.8	7 5.5	65 50.8
四年制大学	15 100.0	13 86.7	1 6.7	1 6.7
短期大学	7 100.0	6 85.7	1 14.3	0 0.0
専門学校	69 100.0	19 27.5	4 5.8	46 66.7
福祉系高等学校	37 100.0	18 48.6	1 2.7	18 48.6

※上段は回答数、下段は割合(%)

(6-1) 導入している：活用場面

【質問6-1】 導入している場合、どのような活用をしていますか。(複数回答可)



N=56

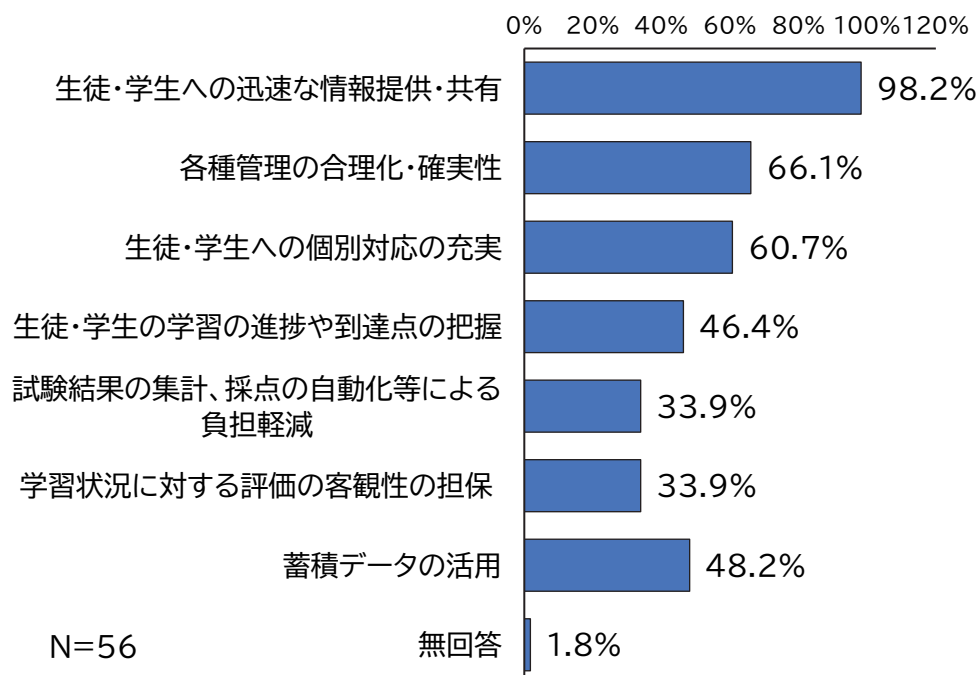
学校種別／導入している：活用場面

学校種別	合計	課題提示	レポート提出・管理	出欠管理	記録や教材の共有	生徒・学生への個別指導・フォロー	生徒・学生への連絡	生徒・学生からの連絡	生徒・学生同士の連絡や情報共有	授業アンケート	評価管理	その他	累計値
全体	56 100.0	52 92.9	46 82.1	33 58.9	46 82.1	29 51.8	52 92.9	35 62.5	22 39.3	46 82.1	20 35.7	1 1.8	682.1
四年制大学	13 100.0	13 100.0	13 100.0	9 69.2	12 92.3	10 76.9	12 92.3	8 61.5	6 46.2	13 100.0	9 69.2	1 7.7	815.3
短期大学	6 100.0	4 66.7	5 83.3	4 66.7	5 83.3	5 83.3	6 100.0	4 66.7	2 33.3	5 83.3	4 66.7	0 0.0	733.3
専門学校	19 100.0	17 89.5	14 73.7	13 68.4	16 84.2	8 42.1	18 94.7	14 73.7	7 36.8	16 84.2	6 31.6	0 0.0	678.9
福祉系高等学校	18 100.0	18 100.0	14 77.8	7 38.9	13 72.2	6 33.3	16 88.9	9 50.0	7 38.9	12 66.7	1 5.6	0 0.0	572.3

※上段は回答数、下段は割合(%)

(6-2) 導入している：活用効果

【質問6-2】 導入している場合、どのような効果がありますか。(複数回答可)



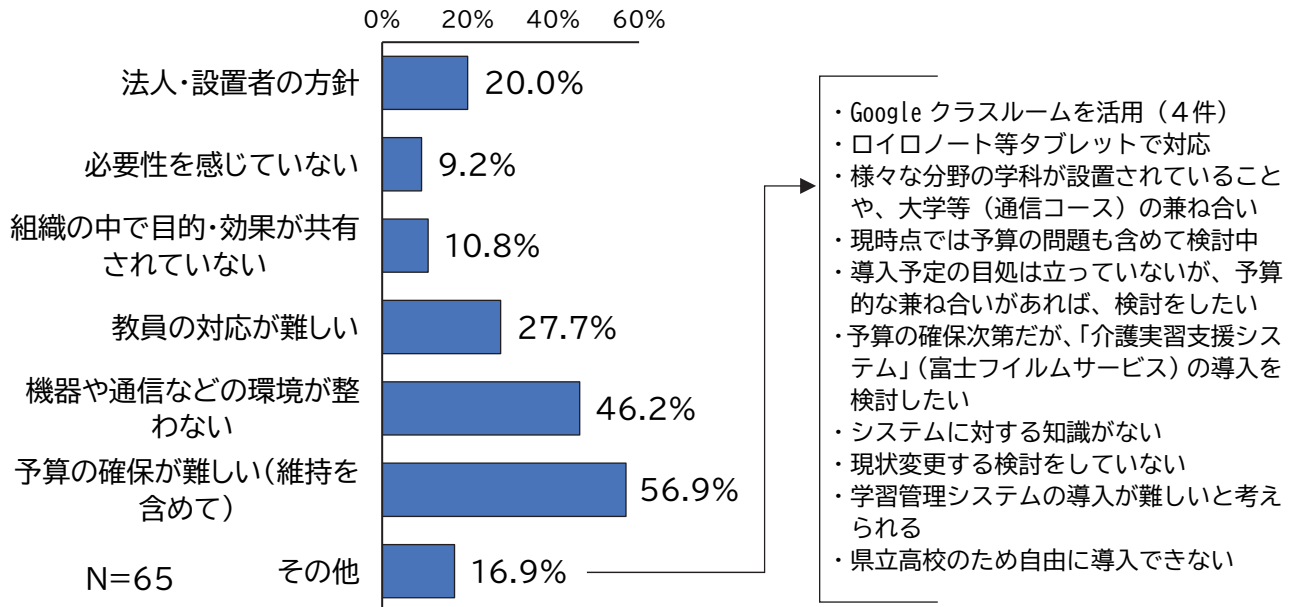
学校種別／導入している：活用効果

	合計	生徒・学生への迅速な情報提供・共有	各種管理の合理化・確実性	生徒・学生への個別対応の充実	生徒・学生の学習の進捗や到達点の把握	試験結果の集計、採点の自動化等による負担軽減	学習状況に対する評価の客観性の担保	蓄積データの活用	その他	無回答
全体	56 100.0	55 98.2	37 66.1	34 60.7	26 46.4	19 33.9	19 33.9	27 48.2	0 0.0	1 1.8
四年制大学	13 100.0	13 100.0	9 69.2	8 61.5	4 30.8	5 38.5	6 46.2	9 69.2	0 0.0	0 0.0
短期大学	6 100.0	6 100.0	5 83.3	5 83.3	3 50.0	3 50.0	3 50.0	2 33.3	0 0.0	0 0.0
専門学校	19 100.0	19 100.0	15 78.9	10 52.6	10 52.6	6 31.6	6 31.6	8 42.1	0 0.0	0 0.0
福祉系高等学校	18 100.0	17 94.4	8 44.4	11 61.1	9 50.0	5 27.8	4 22.2	8 44.4	0 0.0	1 5.6

※上段は回答数、下段は割合(%)

(6-3) 導入していない：導入しない理由

【質問6-3】質問6で学習管理システム（LMS）を導入していないし、導入予定もないと回答した場合、導入しない理由についてお聞かせください。（複数回答可）



学校種別／導入していない：導入しない理由

	合計	法人・設置者の方針	い 必要性を感じていない	が 組織の中で目的・効果が共有されていない	教員の対応が難しい	機器や通信などの環境が整わない	予算の確保が難しい(維持を含めて)	その他	無回答
全体	65 100.0	13 20.0	6 9.2	7 10.8	18 27.7	30 46.2	37 56.9	11 16.9	0 0.0
四年制大学	1 100.0	0 0.0	0 0.0	1 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
短期大学	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
専門学校	46 100.0	6 13.0	6 13.0	5 10.9	17 37.0	27 58.7	30 65.2	4 8.7	0 0.0
福祉系高等学校	18 100.0	7 38.9	0 0.0	1 5.6	1 5.6	3 16.7	7 38.9	7 38.9	0 0.0

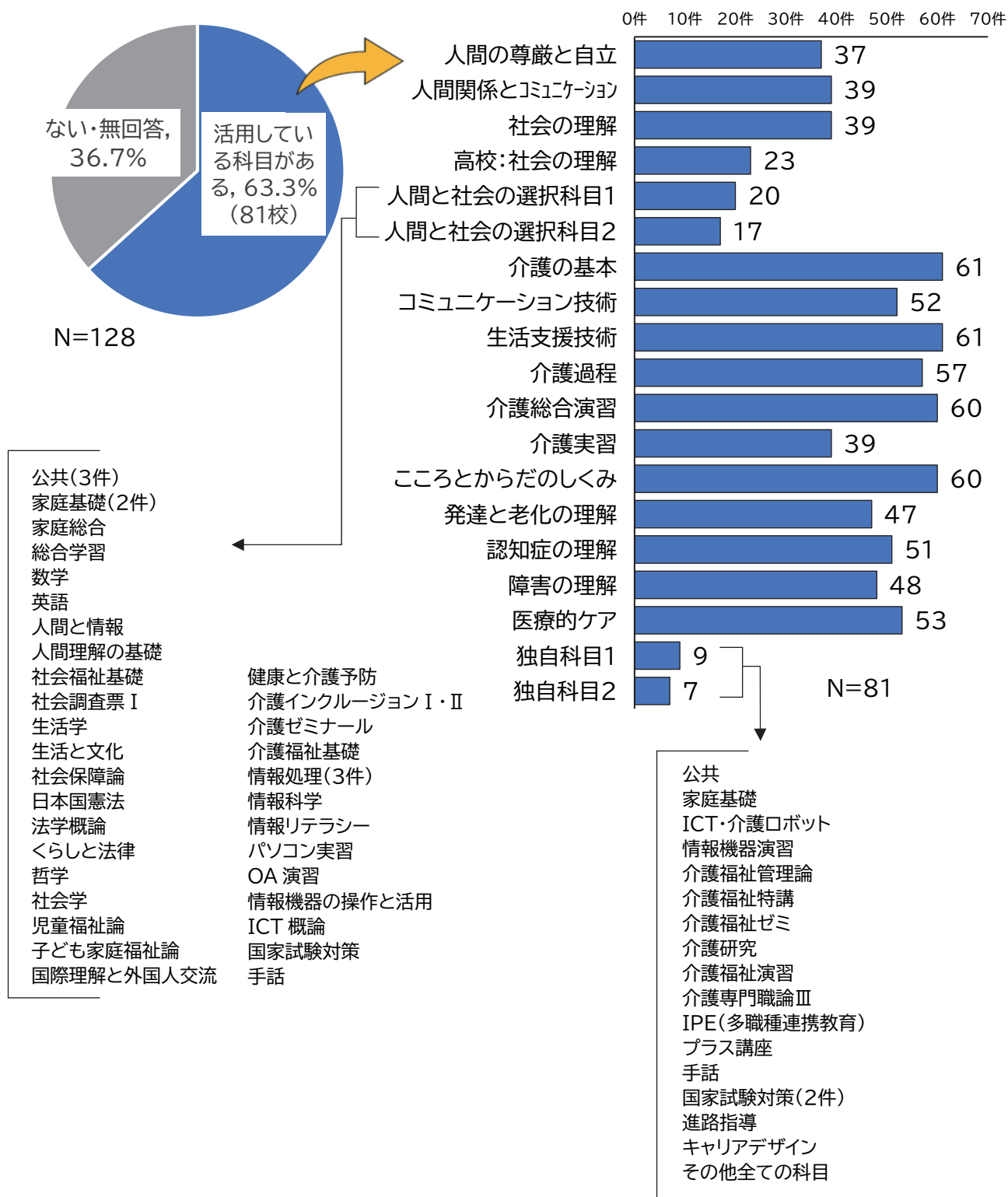
※上段は回答数、下段は割合(%)

■視点1：ICT等を活用した教育

(7) ICT等のデジタル機器・技術を活用した教育（授業）の有無

【質問7】貴校の介護福祉士養成課程における以下の科目において、ICT等のデジタル機器・技術を活用した教育（授業）が行われていますか。

※活用されていると回答があった科目を複数回答で集計



学校種別／ICT等のデジタル機器・技術が活用されている科目の有無（単数回答）

	合計	活用している科目がある	ない・無回答
全体	128 100.0	81 63.3	47 36.7
四年制大学	15 100.0	10 66.7	5 33.3
短期大学	7 100.0	5 71.4	2 28.6
専門学校	69 100.0	38 55.1	31 44.9
福祉系高等学校	37 100.0	28 75.7	9 24.3

※上段は回答数、下段は割合(%)

学校種別／ICT等のデジタル機器・技術が活用されている科目（複数回答）

	合計	自立人間の尊厳と	人間関係とコミュニケーション	社会の理解	理解 高校・社会の	選択科目1	人間と社会の 選択科目2	介護の基本	コミュニケーション技術	生活支援技術	介護過程
全体	81 100.0	37 45.7	39 48.1	39 48.1	23 28.4	20 24.7	17 21.0	61 75.3	52 64.2	61 75.3	57 70.4
四年制大学	10 100.0	7 70.0	8 80.0	9 90.0	- -	3 30.0	2 20.0	9 90.0	8 80.0	9 90.0	9 90.0
短期大学	5 100.0	3 60.0	3 60.0	3 60.0	- -	1 20.0	0 0.0	2 40.0	3 60.0	2 40.0	3 60.0
専門学校	38 100.0	27 71.1	28 73.7	27 71.1	- -	11 28.9	12 31.6	23 60.5	17 44.7	25 65.8	19 50.0
福祉系高等学校	28 100.0	- -	- -	- -	23 82.1	5 17.9	3 10.7	27 96.4	24 85.7	25 89.3	26 92.9

	合計	介護総合演習	介護実習	こころとから だのしくみ	理解 発達と老化の	認知症の理解	障害の理解	医療的ケア	独自科目1	独自科目2	平均科目数
全体	81 100.0	60 74.1	39 48.1	60 74.1	47 58.0	51 63.0	48 59.3	53 65.4	9 11.1	7 8.6	9.6
四年制大学	10 100.0	8 80.0	4 40.0	8 80.0	9 90.0	10 100.0	10 100.0	9 90.0	2 20.0	2 20.0	12.6
短期大学	5 100.0	4 80.0	4 80.0	5 100.0	3 60.0	4 80.0	3 60.0	4 80.0	0 0.0	0 0.0	9.4
専門学校	38 100.0	22 57.9	13 34.2	20 52.6	25 65.8	28 73.7	25 65.8	29 76.3	6 15.8	4 10.5	9.5
福祉系高等学校	28 100.0	26 92.9	18 64.3	27 96.4	10 35.7	9 32.1	10 35.7	11 39.3	1 3.6	1 3.6	8.8

※上段は回答数、下段は割合(%)

※平均科目数は、回答があった1校当たり

(8-1) コミュニケーション技術におけるICT等活用

【質問8-1】 質問7において、H)コミュニケーション技術について「活用している」「今後活用予定」である場合に伺います。

「コミュニケーション技術」におけるICT等活用の回答シートに記載があったのは**52校**である。

①活用の時期・期間

選択肢	回答数
() 年前から	47
今年度から	2
今後活用予定	3

1 年前 (5 件)、2 年前 (7 件)
3 年前 (5 件)、4 年前 (9 件)
5 年前 (6 件)、7 年前 (1 件)
8 年前 (2 件)、9 年前 (1 件)
10 年前 (6 件)、15 年前、29 年前

②シラバス掲載の有無（番号は1つ）

選択肢	回答数
掲載あり	22
掲載なし	30

③取り扱うきっかけ、活用を後押ししていること(複数回答可)

選択肢	回答数 (件)
学習管理システム (LMS) の導入	19
補助金や助成金	1
推進事業等の指定校	3
自治体との協働・自治体の後押し	3
企業との協働	5
介護現場との協働	6
設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働	1
教員の研修、FD	14
科目間連携推進	7
その他	8

- ・コロナ禍で生徒一人一台タブレット端末の導入が進んだため
- ・新型コロナウイルス感染症拡大
- ・生徒が一人一台タブレットを持ったこと
- ・学園全体でデジタルテキストが主流となったため
- ・高校でiPadが一人一端末が開始されたため
- ・効果的な授業展開のため
- ・学生の興味を促進するため
- ・YouTube や動画活用

④教育における具体的使用方法や使用場面（ICT活用/コミュニケーション技術）

分類	要点	記載内容
動画活用	動画視聴	動画視聴や教材提示
	介護現場	実際の実習場面を見る
	実技	実技の動画再生及び撮影内容の再生の共有
	事例	動画で事例を観たり、振り返りをしたり、提出物を管理
	コミュニケーション場面	コミュニケーション場面、コミュニケーション技術の動画教材を活用することで視覚的、体感的に学ぶ
情報共有	情報共有	情報共有等に活用
	連絡のやり取り	連絡事項の共有、個人的な連絡
		教務連絡
		連絡
		生徒への連絡
		授業などの連絡
	シラバス	シラバス
	講義資料	授業資料の配付閲覧
		web上にレジュメや資料のアップロード
		授業資料の共有
		授業内容に関する資料提示、事例提示、映像表示
	授業中	授業資料の提示
		授業中の記録や教材の共有
パワーポイントを使用した教材を電子黒板で提示		
実習中	パワーポイントを使用した授業	
	巡回に行けない際の状態の把握・指導	
事前学習等	事前学習、教科書の理解を補強する際に使用	
作業や考え	意見出しや思考の整理、生徒同士の PowerPoint 等の共同編集	
管理	出欠	出席管理
		出欠管理
	レポート・課題	課題提示、レポート提出
		課題の提出
		レポート課題の提出
		課題提示・回収、
		校外介護実習のレポート
	課題のやり取り	
	テスト	テスト
		小テスト
	採点	採点
		課題の添削
	授業アンケート	授業アンケートにも使用
毎回の授業の振り返りやアンケート		
授業の振り返り		
個別指導	個別指導	
	提出物の管理、テスト答案の返却等で活用	
提出物	授業に関わる写真を撮らせて提出	
フィードバック	関連授業のフィードバック	
情報収集	情報収集	調べ学習
ICT機器の活用	タブレット使用	提出物等のレポート等は生徒持参のタブレットを活用
	グループワーク発表	グループワークなどの発表
講義・体験	ICTの活用の講義	ICTの活用を講師にきていただき実施
	具体例の講義	「コミュニケーション支援ツール」「コミュニケーションロボット」「ICTを活用した記録」「情報の共有化」「会議」といった授業で具体例を示しながら授業を展開
	機器の説明	福祉用具販売業者による介護テクノロジー用品の説明と体験
	デジタル記録	ハナストで音声認識のデジタル記録の活用

分類	要点	記載内容
	音声入力アプリ 介護記録ソフト	法人連携企業が開発している音声入力アプリ等の活用 介護記録ソフト（音声入力）の企業の方に講義と体験を 依頼し、最新の介護現場の状況を学ぶ
その他		視覚障害者の見え方、聴覚障害者の聞こえ方・聴覚障害 者・視覚障害者の実際の生活の様子・災害時にどんなこ とに困るのかを具体的に知る

⑤留意又は工夫していること（ICT活用/コミュニケーション技術）

分類	要点	記載内容
ICTを使え るように支援	確認習慣がない 学生への対応	LMSを確認する習慣がつかない学生への対応
	使用が習慣と なるよう促す	クラスルームに情報をあげても見ない生徒もいるため、連絡 係をつくり、教師があげたものをグループLINEでも流す 事前に「見ないことで不利益が生じても対応はしない」と伝 えているものの、習慣づくような促しや、内容によっては他 の方法での促しも同時に行う
	使い方を指導	生徒が混乱しないよう、また教員間で指導方法に大きな差が 生じないよう、ICTの使用方法をできるだけ統一
資料	アニメーション 使用	アニメーションの使用などで、変化をつけながらの教材作成
	ルビ使用	留学生のためのルビ使用の資料にする
	色で工夫	授業中に課題提示を実施するときは、色を使い見やすいよう にしている
	視覚的理解	文字だけでは伝わりづらいため、視覚的理解が進むように
	分かりやすく	分かりやすさ
	教科書、自作プ リント併用	教科書、自作プリントとの併用
	データ化して 共有	可能な限りペーパーレス データ修正の必要がない資料はPDFにする
授業展開	機器を体験	介護現場で使用されている用具に触れる
	機器を理解	毎年実施できるとは限らないため、体験できない時は様々な ソフトをそのHP等を元に紹介 自分事として捉えられるよう使用のイメージを持ちながら 授業を展開
	双方向のやり とり	一方通行の授業にならないように注意している
	生徒・学生の作 成状況等を確認	スライドなどを作成する際は、作成状況を把握するため、編 集者に生徒だけではなく教師も追加
	意見や回答を 確認	生徒各自の意見や回答を確認
	リテラシーを 教育	学生が機器を使用できるだけでなく、他者に伝える力を身に つけられるようにする
その他	安全な利用	調べ学習の際は、リテラシーに留意するよう指導している
		チャンネル数を出来るだけ簡潔に少なく 障害や生活のしづらさはマイナスなことだけではないし、社 会には様々な工夫があること、一人ひとり障害のあり方は異 なることは伝えている

⑥教育における課題（ICT活用/コミュニケーション技術）

分類	要点	記載内容
教員・授業	生徒・学生の意見をいかせていない	生徒側からの意見の質の向上や活用の仕方 授業の振り返りをGoogleフォームで行う場合、送信ただけで終わり、その先に結びつけることが困難
	共感や非言語などの学びが難しい	共感や非言語、準言語的コミュニケーションなどの人間的なやり取りを体験的に学ぶことが難しい
	機能の活用に時間がかかる	システムがあっても、使いこなすこと（覚えること）に時間を要す
	留学生に対応した授業展開	日本人だけでなく外国人留学生にも理解できるようにレベルを考えての授業展開
	回数を増やしたい	もう少し回数を増やしたい
	活用できるICTがわからない	コミュニケーションの授業の中でどのようなICTを取り入れていけばよいか、創意工夫がなかなか思い浮かばず実践に生かせない
	資料・教材	適切な教材づくりが難しい
教材選択が難しい		教材選択が難しい
生徒・学生	目的外の利用	自身の個人的な情報を投稿するなど誤用しないよう事前に伝える必要がある 授業と関係のないアプリ等の閲覧（使用時のルールに関する指導）
	使用することに依存	依存しすぎること
	授業中の集中がそがれる	授業中の使用方法について(集中がそがれる)
	スキルや活用に個人差	授業外で扱う場面も多いため、ICT機器を積極的・主体的に活用する生徒とそうでない生徒との差が大きい
	充電不足・忘れて使えない	授業内でiPadを使いたいが、「充電がない」「家に置いてきた」ということも多々あり、使いたいときに使えない場合も多い
	学校外で環境が整わない	タブレット端末を持ち帰っても、家庭で通信環境が整っていないために対応できないケース
	コピー＆ペーストなどの不適切利用が不安	介護実習日誌も電子化したいが、生徒が漢字を覚えなかったり、AIを使って書いたものをコピー＆ペーストする可能性を考えると、導入した方が良いか悩む
	機器・環境	機器の貸出をしてもらえない
身近な展示があるとよい		全てを用意できるわけではないため、展示会などが身近で行われるとありがたい
学生数に見合った機器数が必要		学生数に見合った機器数の準備が必要であったり、授業で活用するのが年に1回程度となり、メンテナンスも含めて管理場所や方法など様々な課題が想定される
機器が不足しておりグループ使用		パソコンの台数に限りがあり、グループでの使用しか学生が使えない
機器の管理場所が必要		授業で活用するのが年に1回程度となり管理場所や方法など様々な課題が想定される
レンタルの仕組みがほしい		高いものなので、福祉用具などレンタルがあると助かる

⑦効果、効果の把握・測定方法（ICT活用/コミュニケーション技術）

分類	要点	記載内容
知識や理解が深まる	理解度が増す	授業に入りやすいし、理解が深まりやすい
		個人の理解度の深まりと広がり
	理解しやすい	文字で理解できない部分の補強をするため、学生からの感想は「わかりやすい」
	イメージしやすい	イメージしやすい
	障害を理解する	障害に応じたコミュニケーションでは、それぞれの障害をリアルにとらえることができる
		障がいのある方とのコミュニケーション方法を理解でき、介護実習等で実施することができた
自分の考えを相対化しながら深めていく	生徒が他者の意見や考えに触れる機会が増え、自分の考えを相対化しながら深めていく姿が見られる	
教員の負担軽減	課題や提出をタイムリーに確認	課題への取組や提出状況をタイムリーに確認できる
		提出状況を把握できる
	公平性、利便性がある	出席管理、課題の提出等における公平性、利便性（ペーパーレス、提出・確認作業が学内に限定されない）がある
	予習・復習の把握ができる	授業時間以外の予習・復習の把握ができる
	生徒・学生に迅速に連絡ができる	電話ができない場合や出張時など生徒へ迅速に連絡ができる
生徒・学生への効果	自ら学ぶ意欲の醸成	自ら学ぶ意欲の醸成
教育への効果	過去の授業内容を確認しやすい	授業の振り返りを行うときに過去の授業内容が残っているので確認しやすい
	次回の学習につなげることができる	教員も生徒の学びを当日中に振り返ることができ、次回の学習につなげることができる
	自宅での学習も容易	いつでもどこでも学習することができ、自宅での学習も容易
	指導がしやすい	介護実習日誌を電子化し、施設とも共有することで、教員の指導も把握でき、同じ目標に向かって指導がしやすくなる
就労先での効果	抵抗感が少なくなる	介護職も導入の抵抗感が少なくなる
	報告・連絡・相談に役立つ	情報伝達がスムーズになり、将来介護現場で働く際の報告・連絡・相談に役立つ
	現場での普及促進	現場で働いた際に、業務の生産性向上・効率化の1つとして、様々な最新ソフトの導入などを提案できる人材になる
	介護現場が明るくなる	介護現場が明るくなり働きやすくなる
効果の把握や測定の方法	振り返りアンケート	振り返りアンケート
	感想を聞くのに留まっている	視聴して感想を聞くのに留まっていることが多い
	学生からの授業評価	学生からの授業評価により把握する
	提出物	提出物の質や振り返りの内容から把握する
	効果測定の指標について成熟していない	効果測定の指標について成熟していない

分類	要点	記載内容
	測定方法の見える化	測定方法の見える化
	検討が必要	効果の測定方法は検討する必要がある
	現在は行っていない	卒後何年か後にアンケートをとる方法が考えられるが、現在は行っていない
その他		課題などを把握でき、記録に残せる
		分析できる

⑧今後の展開と期待（ICT活用/コミュニケーション技術）

分類	要点	記載内容
教育の充実	授業の質	授業の質の向上
	学びの過程の蓄積と振り返りの迅速化	学びの過程の蓄積と振り返りの迅速化の両面を兼ねることができるようになりたい
	コミュニケーションの理解を深める	ICT活用によって、生徒自身がコミュニケーションについての理解をさらに広げたり深めたりすることを期待している
	新しい発見や気づきを促す	ICTを取り入れることで新しい発見や気づき、刺激になる
	ハイブリッド教育	ハイブリッド教育の展開
	リモートによる遠隔授業	リモートによる遠隔授業
	記録におけるICT利用	科目における「記録」の項目においては、介護現場でもPCやタブレット入力、インカムによる情報共有などに移行しているところも増え、そういった点も視野にいれた授業展開や演習を取り入れることを今後検討したい
教員の対応	慣れていない教員でも利用できる	システムに慣れていない教員でも利用がしやすいようになればよい
	教員間の情報共有促進	非常勤講師との情報共有、授業の進捗状況の確認ができる
	研修の機会	研修の機会
	デジタルデバイドを少なくする	教員間のデジタルデバイドを少なくすることも必要である
ICTを活用できる人材育成	就職後や日常生活でも活用できる	介護実習やボランティア活動だけでなく、就職後や日常生活でも活用できるようにする
	ICTを活用できる即戦力	人材不足の現場でICTの活用を含め様々な情報（知識）を持ち、即戦力として活躍してもらいたい
	ICTを活用してペーパーレス化	ICTを活用できる人材を育成し、ペーパーレス化の一助を担う
	ICTを活用して利用者支援	ICTを活用し、利用者支援につなげる人材の育成
積極的な活用	積極的に導入したい	活用できるものがあれば、積極的に導入したい
外部機関との連携	介護現場を通して最新技術を学ぶ	企業協力が難しいことが多いため、ICTを率先して活用している介護現場に見学に行き、最新技術を学びたい
機器・環境の充実	補助金活用	専門学校に介護テクノロジー機器を常設したいが、費用が高額すぎるので、補助金等があればよい
	既読の仕組み	クラスルームでは、生徒が連絡を見た場合「既読」がつくような仕組みがあると良い

分類	要点	記載内容
	日誌の校正機能	介護実習日誌では、電子化した際に、A Iを使用したものが分かるような仕組みや、ワードのように文章や文字の誤っている部分に印がつくような仕組みがあると良い
その他		生成A Iの活用 記録が電子化されることを生徒は望んでいる

(8-2) 生活支援技術におけるICT等活用

【質問8-2】 質問7において、I) 生活支援技術について「活用している」「今後活用予定」である場合に伺います。

「生活支援技術」におけるICT等活用の回答シートに記載があったのは**60校**である。

①活用の時期・期間

選択肢	回答数
() 年前から	52
今年度から	4
今後活用予定	4

➡

1 年前 (4 件)、2 年前 (5 件)
3 年前 (6 件)、4 年前 (9 件)
5 年前 (8 件)、6 年前 (4 件)
7 年前 (2 件)、8 年前 (2 件)
9 年前 (1 件)、10 年前 (7 件)
15 年前 (1 件)、29 年前 (1 件)

②シラバス掲載の有無（番号は1つ）

選択肢	回答数
掲載あり	24
掲載なし	30
無回答	6

③取り扱うきっかけ、活用を後押ししていること(複数回答可)

選択肢	回答数 (件)
学習管理システム (LMS) の導入	18
補助金や助成金	7
推進事業等の指定校	3
自治体との協働・自治体の後押し	2
企業との協働	10
介護現場との協働	10
設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働	1
教員の研修、FD	17
科目間連携推進	6
その他	18

➡

<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染拡大により積極的な導入が始まった ・新型コロナ感染拡大 ・コロナ禍で生徒一人一台タブレット端末の導入が進んだため ・学園全体でデジタルテキストが主流となったため ・生徒1台タブレット端末の導入・効果的な授業展開のため ・高校でiPadが一人一台が開始されたため ・YouTubeや動画活用 ・映像で生徒に見せることでより理解が深まると考えたため ・学習の深化

④教育における具体的使用方法や使用場面（ICT活用/生活支援技術）

分類	要点	記載内容
動画活用	動画視聴	動画の活用
		動画の視聴
		動画を授業内容に導入
		言葉でのイメージが付きにくい視覚的情報で関連付ける
		動画を観る(政府広報、ニュースなど)
		授業動画の配信
	介護現場	介護現場の写真や動画を観てアセスメントを行う
		授業担当教員が実際の現場の事例や動画を使用している
	介護過程	介護過程の事例を動画視聴し、介護過程の展開に使用している
	成長発達	成長発達における資料や動画を使用
病気	わかりにくい病気に関する動画を使用	
障害	障害者の理解について、状態像の把握	
認知症	認知症ケアの場面、動画の視聴（ユマニチュード等々） 実際の認知症の方の様子をみってもらう	
医療的ケア	学校にある医療的ケアの物品や手順を実際動画でまとめて視聴	
情報共有	シラバス	シラバス、コマシラバス
	講義資料	講義資料をウェブ上にアップロードしている
		講義資料は全てアップロード
		授業で使用するスライドを事前発信
		記録や教材の共有
	生徒同士、生徒と教員での画像やスライドの共有	
	授業中	パワーポイントを使用した教材を電子黒板で提示 パワーポイントで作成した資料をモニターで映している
	実習中	介護実習記録を学生、教員（学校）、指導者（施設）で共有
実習期間中の報告・連絡・相談を行っている 学生と教員とのデータのやりとり（実習日誌や成果物（介護過程の展開シート）の添削）を行っている		
作業や考え	生徒の考えを全体で共有したいとき、同じ考えや異なる考えをグループ分けし、整理・分類したいときに使用	
事前・事後学習	介護実習の事前・実習中・事後学習	
管理	出欠	出欠管理
	レポート・課題	レポート課題の提出
		レポート提出
		課題は Teams にて提出
		課題の提出
		授業中に課題提示を行っている
	課題のやり取り	
	テスト	小テスト
		単元における小テストの実施
	授業アンケート	授業アンケートにも使用している
アンケート		
提出物	介護過程の展開を記入する際に、Google classroom上で作成、提出し、提出したものを教員の添削も classroomで行っている	
情報収集	情報収集	報告会や事業所検索時の活用
		地域の施設や機関等の社会資源の場所や仕事内容について調べる
		各行政機関が提供するサービス
		本や教科書では調べきれないことをインターネットを使って調査する
		研究内容をまとめたり情報を集める際にICTを活用している
		調査の際の資料検索 調べ学習
ICT機器の活用	アセスメントや計画作成の入力	アセスメントを打ち込んだり、介護計画を入力したりなどをタブレットで実施

分類	要点	記載内容
		事例による演習を行う際、Microsoft Teams の課題配信機能を使用して、アセスメントシートや個別援助計画のフォーマットを配信し学生が入力、入力した内容をリアルタイムで教員が確認し、学生に個別にアドバイスをを行っている
	PCやタブレット使用	毎回の授業でパソコンを使用し、ワードやエクセル等の使い方等について学習している
		パソコン、タブレット使用
		グループワークの時に、タブレットに入力し発表
		ワード活用による授業形式
	発表資料作成	校内でのバリアフリー、ユニバーサルデザインを探し、クラスで発表をさせる
	スライド作成	自分の調べた事柄をスライドでまとめ、発表させる
動画作成	実習後の報告会での資料作り（パワポだけでなく、音声を録音し動画を作成）	
デジタル化	デジタルテキスト	デジタル教科書には記入やポイントのメリハリが付けやすい
		デジタルテキスト使用
	実習書類	実習に関する書類をデジタル化
ICT等の講義・体験	導入による業務改善	新たな機器の導入により業務改善について考える
	具体例の講義	先進的な施設の事例についてふれる
		「福祉用具と介護ロボット」の授業で具体例を示しながら授業を展開している
福祉機器展	ICT機器や介護ロボットをレンタルし、学生が体験できるように、プチ福祉機器展の実施	
その他		ルビ付きスライドの作成、オンデマンド活用
		QRコードの活用
		効果的な演習を行うため、生成AIの活用

⑤留意又は工夫していること（ICT活用/生活支援技術）

分類	要点	記載内容
ICTを使えるように支援	使い方を指導	教員が事前に、使い方を練習し、説明できるようにしている
	機器に触れる機会を増やす	デジタル機器に触れる機会を増やし、苦手意識がないようにしている
	機器の準備や管理を指導	事前に使用することを伝え、充電をしておくことや、持参することを伝えておく
資料	視覚的理解	視覚化を促し、より実践的な演習の実施
		ICTを活用することで学生へ視覚的で見やすい資料を提供することができる
	色の工夫	付箋の色や文字の大きさなど変えられるので見やすく整理・分類できる
		授業中に課題提示を実施するときは、色を使い見やすいようにしている
	ルビ使用	留学生用にパワーポイントにルビ振り
	動画活用	医療現場での映像を適宜使用
	データ化して共有	動画授業で視聴するのみでなく、LMSやGoogleClassroomにあげ自宅でもみられるようにする
紙面との併用	細かな添削については、紙に印刷したものに赤を入れることもある	
授業展開	機器を体験	留学生もいるため、ゆっくり丁寧に、TVモニターを使用しながら行っている
		分かりやすさ
		留学生が理解しやすいような授業の在り方を考えている

分類	要点	記載内容
	理解度にあわせる	どの部分に注目するのか、何に気づかせたいのか、生徒たちのレベルに合わせて問いかけを行う 動画教材を要所要所でストップして、どこを見るべきかなど、介護を行う上での基本的留意点を想起させるように説明し、利用者を観察するように促している
	双方向のやりとり	アンケートや感想はできるだけタイムリーに学生に共有、小テストはクラス全体の回答率等も共有している 90分の中で全ての学生の入力に目を通し、アドバイスができるようにしている（不公平感が内容に配慮）
	教科書の補強として活用	教科書を補強するために活用
	確認テスト	個人点数にかかわるものはほか学生にわからないよう配慮、単元が終了ごとに小テスト（確認テスト）の配信
	意見や回答を確認	生徒各自の意見や回答を確認している
	作業を教員が確認	個人個人やグループの作業を教員が確認している
	リテラシーを教育	情報の確実性
情報の根拠を明確にするため、使用するホームページは公のものを使用		
正確性を確認の上実施している		
安全な利用		インターネット上のコミュニケーションについても扱う 出典を明らかにすること、正しい情報を見極めることなどを指導
個人情報の取り扱い		個人情報の取り扱いを指導 個人を特定できる情報は全てアルファベット入力、資料の印刷は自宅プリンタのみ、コンビニのプリンターは利用不可
機器の導入を主目的にしない	機器の導入が主目的にならないように、どの業務改善をするために機器の導入をするのかを具体的に考えることができるようにしている	
その他		あくまで動画であることの認識 ネガティブなイメージを持ちやすい

⑥教育における課題（ICT活用/生活支援技術）

分類	要点	記載内容
教員・授業	機能を上手く活用できない	全ての機能を上手く活用できていない 思考の展開が分かるようなツールを活用できていない、どの場面でどのように活用するのかといった有効的な活用方法についての教員側のスキル
	学習データの蓄積、分析ができていない	全て使いこなせているわけではないこと、学生の学習データの蓄積、分析までは十分には使用できていない
	生徒・学生の意見を活かしていない	学生の疑問をとり入れる 生徒側からの意見の質の向上や活用の仕方
	導入が進んでいない施設が多い	導入が進んでいない施設の方が多いため、施設から導入の難しさを説得されてしまう
	リアルタイムに教員が確認することを負担に感じる学生がいる	リアルタイムに入力している内容を教員が確認することに抵抗を感じる学生もいるため、何らかの配慮が必要
	継続できるか課題	たいへんな活動でもあるので、継続できるかが課題
	資料・教材	ルビ振り

分類	要点	記載内容
	教材が少ない	看護などと比べると教材会社や教科書会社から出されている教材が充実していない
	障害の教材が少ない	障害を学ぶ教材の少なさ
	最新情報ではない場合がある	情報の更新がされていないものもあり、最新の知識につながらない
	データの信憑性がない	内容の信憑性
	動画のクオリティが低い	動画のクオリティを上げる
生徒・学生	スキルや活用に個人差	I C T活用の習得に大きく個人差がある P Cスキルなどの個人差
	操作が苦手	P C操作が苦手な学生は使い方、P C入力にも時間がかかるため、P Cに慣れてもらうための工夫が必要 タブレットやパソコン等の使用に慣れていない生徒は、調べることの以前に時間がかかってしまう
	誤った情報を集めている	偏った情報になってしまったり、誤った情報を集めている場面がある
	コピー＆ペーストで対応	ネットの情報を見て、コピー＆ペーストをしてしまい、どの部分が重要なのか理解をしていない
	チャットG P Tで対応	チャットG P Tに全てを頼ろうとする時もみられる
	安易にA Iを使用	アセスメント等の立案過程に安易にA Iを使い、全てをコピー＆ペーストするなど学習の妨げになっている
	W i - F i環境がない	インターネットが使用できない環境での入力方法がない（実習先など） W i - F i環境の整備
	目的外の利用	教師が巡回したり、達成状況の把握ができていないと、自分の好きな事柄を調べていたり、他者と写真を撮るなど別の目的に使用する場合がある
	機器・環境	アップデートが必要
機能が変更される		Jambord がなくなってしまったので、代替できる機能を探している
スマホ利用の充電が個人負担		教室でする場合、個人のスマホ入力になるため、充電の問題等個人に負担がかかっている
その他	留学生	留学生に対しての指導が難しく、日本語が読めず理解不足を感じる
		外国人を受け入れ、専門的な言葉や表現が伝わりにくい 留学生の日本語能力
		動画等の授業内容を改善しても、留学生のモチベーションが低いと、教育効果に表れない

⑦効果、効果の把握・測定方法（ICT活用/生活支援技術）

分類	要点	記載内容
知識や理解が深まる	理解度が増す	個人の理解度の深まりと広がり
	確実な知識の習得	確実な知識の習得
	知識の定着	知識の定着
	学びの幅が広がる	ネットを使用することで、学びの幅が広がる
	理解しやすい	目で見て理解することが大切、学生の理解度も飛躍的に向上する イメージしやすくなり、一般的なDVDでなく教員が実際行う動画であるため、留意点も理解しやすい 視覚・聴覚からのインプットで学びの定着を期待 教科書等で学んだ知識が実際の生活でどのように活用されているか、制度を身近に感じることができ、法制度を分かりやすく説明しているものに触れられる
教員の負担軽減	欠席者への対応が容易	評価を付けて返却時、欠席していても送信で返却できる
	修正の指導が容易	デジタルで扱うほうが、修正がしやすい
	記録の管理の負担が軽減	記録の管理の負担が軽減できる
	資料配付が予約できる	配付資料が事前に予約できる
教育への効果	予習・復習	何度も繰り返し見直して予習・復習ができる 復習
	説明がしやすい	情報の分析・解釈・統合するときに、不足している部分、考えられることなど、説明がしやすい
	リアルタイムの指導・修正	手書きの場合は、学生が書いたものを全て修正させなければいけないが、入力途中で事例に対するアセスメントの考え方などを説明できるため、学生も徒労感がない PCでリアルタイムに入力内容が確認できるため、学生の不十分な点をすぐに指摘し、修正できる
	提出物を手元で確認	回収提出物がいつでも手元で確認出来る
	過去の授業内容を確認しやすい	授業の振り返りを行うときに過去の授業内容が残っているので確認しやすい
	評価がしやすい	純粹に学生が行った介護過程の評価がしやすい
	生徒・学生の特性の理解につながる	スライドなどを作成した際、その生徒の個性も表現することができる 同じ動画を視聴していることで、学生たちがどんなところに視点をおいて観察しているのかがわかりやすい
	生徒・学生への効果	自分の考えを相手に伝えることができる
自ら学ぶ意欲の醸成		介護への気持ちを上げたい学生が、興味を持って授業に参加 自ら学ぶ意欲の醸成
ICT等に対する関心の高まり		実習での学びの発表や就職活動での動きの際、ICTや介護ロボットに対する発言が増えた
自己肯定感が高まる		スライドなどを作成した際、生徒の個性も表現ができるため、見る人達の姿勢によっては自己肯定感が高まる
見やすい資料が作成できる		成果物に関し、手書き文字の上手下手の影響を受けず大変見やすい資料が作成できる
PCを使えるようになる		実習等での日誌作成をする際に、パソコンを使用して作成ができる
効果の把握や測定の方法		期末テスト
	演習中の様子	演習中の様子

分類	要点	記載内容
	定期試験の結果	定期試験の結果で留学生の理解度を把握する
	提出物	何かしらの課題提出があった際に提出物を確認し、効果の有無を把握する
	検討が必要	効果の測定方法は検討する必要がある

⑧今後の展開と期待（ICT活用/生活支援技術）

分類	要点	記載内容
取組を継続	今後も継続	今後も継続
積極的な活用	AIとの親和性に基づく積極的活用	AIとの親和性があるため、適切な活用をすれば発展することが期待できるかもしれない
	教育的効果を考えて活用	ICTに頼りすぎずに、場面に合わせて教育的効果を考えたうえで活用していきたい
	実際使用する機器を取り入れる	演習でとまどわないために、実際使用する物品、教員が行う手順の動画を学生の疑問をとり入れていきたい
	実習書類の一括管理	実習に関する書類が一括管理でき、個々の実習状況の把握ができ、巡回に関係なく記録の指導が可能になる
教育の充実	授業の質	授業の質の向上
	主体的な学び	すぐにフィードバックできるため、生徒がもう一度考えてみようとする主体的に動くことができるようになる
	個別学習データを活用した教育、指導	個別学習データから、最適化された教育、指導の展開ができる
	予習への使用を検討	予習に使用できないか検討中
	次回の授業で振り返りをいかす	データを残すこともできるので次回の授業で振り返りがしやすい
	オンライン会議方法を学ぶ	ビデオ会議機能にある画面共有機能を使用しながらグループワークの発表を行うことで、オンライン会議の方法なども説明していきたい
教員の対応	慣れていない教員でも利用できる	システムに慣れていない教員でも利用がしやすいようになればよい
	補助講師の配置検討	学生個々の学習能力に合わせて対応することを考えると、補助講師の配置も検討したい
		研修の機会
資料・教材の充実	導入できる教材を積極的に活用	導入できる教材があれば積極的に活用したい
	視覚・聴覚的な教材	継続して視覚・聴覚からのインプットを継続していく
	多様な活用事例	さまざまな活用事例が増えていくこと
	学習用動画の確保	学習用動画の確保
	介護過程の教材	介護過程の展開は、文章を見て展開するのではなく、自分の目でみて情報収集をして展開をしていくことが重要、そうした教材が増えていくことに期待したい
機器・環境の充実	最新のアップデート	最新のアップデートを期待
	施設での通信環境	施設でネットが使えるようになってほしい
生徒・学生の関心	留学生のモチベーションの向上	留学生のモチベーションの向上
	ICTの活用が学生の関心を喚起	学生の興味関心を引き、国試にもつながるように展開できればいいと思う
その他		当たり前にICTが活用されている 学生が、ICTや介護ロボットを導入、ノーリフティングケアに取り組んでいる施設を選ぶようになってきたため、採用のために取り入れる施設が増えてきている

(9) 各科目におけるICT等活用

【質問9】その他の科目のICT活用

「コミュニケーション技術と生活支援技術以外の各科目」におけるICT等活用の回答シートに記載があったのは**44校、科目数は延85科目**である。

①活用の時期・期間（85科目の集計）

選択肢	回答数
() 年前から	66
今年度から	12
今後活用予定	7

1年前 (4件)、2年前 (7件)
 3年前 (8件)、4年前 (14件)
 5年前 (21件)、6年前 (7件)
 7年前 (7件)、10年前 (10件)

②シラバス掲載の有無（85科目の集計・番号は1つ）

選択肢	回答数
掲載あり	36
掲載なし	46
無回答	3

③取り扱うきっかけ、活用を後押ししていること（85科目の集計・複数回答可）

選択肢	回答数 (件)
学習管理システム (LMS) の導入	28
補助金や助成金	1
推進事業等の指定校	1
自治体との協働・自治体の後押し	0
企業との協働	4
介護現場との協働	12
設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働	3
教員の研修、FD	27
科目間連携推進	11
その他	33

- ・ コロナ禍
- ・ コロナ禍で Microsoft Teams (for Education) の使用を開始したことがきっかけ (元々学生に対しての iPad の配布は行っていた)
- ・ 学習管理システム等が導入されているため
- ・ 高校で iPad が一人一端末が開始されたため
- ・ 生徒が一人一台タブレットを持ったため
- ・ 介護過程のシステム導入を検討して活用した
- ・ 教科書で学んでいることと現場とを結びつけて理解するため
- ・ 身体の仕組みや臓器など、映像の方が分かりやすいため
- ・ 業者からの紹介

④教育における具体的使用方法や使用場面（ICT活用/各科目）

分類	要点	記載内容
動画活用	動画視聴	(介護福祉基礎)授業内容に関連する内容の動画視聴
		(介護総合演習Ⅰ) 参考動画の視聴
		(認知症の理解)留学生の増加に伴い、留学生の学力向上させるために動画を活用
	介護姿勢	(介護の基本)介護者の健康管理の一環として、ノーリフティングケアや介護者の介護姿勢の把握
	介護過程	(介護過程)アセスメントシートや計画書の記入の仕方や事例検討においてDVDを活用
	身体構造	(介護過程)動画を観る(体のしくみや動き)
		(こころとからだの理解)血液の循環や音の聞こえ方を見せる
		(こころとからだのしくみ)身体のしくみ(解剖やメカニズム)など、画像や動画などを使用
		(こころとからだの理解)動画の視聴など
(こころとからだの理解)臓器の動きを動画で見る		
(発達と老化の理解)身体構造等を3D映像		
医療的ケア	(認知症の理解)からだのしくみ等の動画の活用	
	(医療的ケア)医療的ケアの5手技を動画にとり、いつでも振り返りが可能	
情報共有	講義資料	(人間の尊厳と自立)講義資料をアップロード
		(介護過程)資料配付
	授業中	(介護福祉基礎)パワーポイント教材を電子黒板で提示
		(こころとからだの理解)パワーポイント
	作業や考え	(介護過程)教科書の提示
		(介護総合演習Ⅰ)入力した内容をリアルタイムで教員が確認、各学生へ個別にアドバイスをを行う
管理	出欠	(介護総合演習Ⅰ)出欠管理
	レポート・課題	(社会福祉基礎)レポート提出
		(社会福祉基礎)課題提示
		(人間の尊厳と自立)レポート課題の提示・提出
		(介護の基本)授業課題を学習システムの中で出している
		(介護過程)課題管理
		(介護総合演習Ⅰ)課題提出
		(こころとからだの理解) 課題の提出
		(こころとからだの理解)課題の作成
		(こころとからだの理解)課題作成したものを共有する
		(発達と老化の理解)課題の提出
	テスト	(発達と老化の理解)小テスト
	授業アンケート	(社会福祉基礎)授業アンケート
		(こころとからだの理解)アンケートをする
		(こころとからだの理解)授業の振り返り
(こころとからだの理解)生徒への連絡や提出物の確認		
(こころとからだの理解)テストの返却		
(発達と老化の理解)アンケート		
介護実習関連資料	(介護総合演習)課題機能を使用し、介護実習資料(個人票、自己課題、実習目標、実習計画、総合反省、報告書)を管理	
情報収集	情報収集	(介護過程)介護実習先の概要を調べる
	(こころとからだの理解)調べ学習	
ICT機器の活用	PCやタブレット使用	(こころとからだの理解)ワード活用による授業形式
	各資料等入力	(介護総合演習Ⅰ)事例による演習を行う際、課題配信機能の使用や個人票、実習記録、実習計画書等実習で活用する各資料等のフォーマットを配信し、学生が入力

分類	要点	記載内容
	生徒・学生の資料作成	(介護総合演習Ⅰ)実習に向けた個人票の作成、週別目標の作成、実習時の記録物の作成
		(介護過程)介護過程の実践を作成し発表する
		(介護総合演習)資料をグループの共有作業で作成
	スライド作成	(介護過程)アセスメント表について共有編集
(こころとからだの理解)介護実習の学びをスライドにまとめて発表		
		(こころとからだの理解)介護計画を立案し、スライドでまとめ、他者に発表
デジタル化	デジタルテキスト	(介護福祉基礎) デジタル教科書
講義・体験	VR体験	(こころとからだの理解)認知症VR体験
その他		(社会の理解) 効果的な演習を行うため、生成AIの活用
		(社会の理解)教科書にある内容を補強する形で随時導入
		(社会の理解)制度理解
		(介護総合演習)国家試験対策

⑤留意又は工夫していること（ICT活用/各科目）

分類	要点	記載内容
リテラシーを教育	個人情報の取扱	(介護総合演習Ⅰ)個人情報の管理の留意
		安全な利用
	情報の確実性	(こころとからだの理解)ICTを活用する際は、情報の取り扱いに気をつけるように指導
		(介護過程)共有設定の管理を行うなど、トラブル防止への配慮をしている
		(こころとからだの理解)インターネット上のコミュニケーションについても扱う
ICTを使えるように支援	使い方を指導	(こころとからだの理解)タブレット端末の使用スキルに違いがあるため、ある程度は使えるように指導
	テンプレート等を活用	(介護過程)ICTが苦手な生徒への支援やテンプレート提供を行い、作業自体が目的にならないようにする
授業展開	双方向のやりとり	(発達と老化の理解)アンケートや感想はできるだけタイムリーに学生に共有
		(介護の基本)授業に対してのモチベーション向上のために教員のコメントは必ず記入して返却
	提出期日設定	(介護総合演習)期限を決めている
		(人間の尊厳と自立)レポート提出期日管理
		(介護総合演習Ⅰ)提出期限
	理解度に合わせる	(介護総合演習Ⅰ)提出時のルールなど内容確認の前に注意事項の提示や、学生の理解度に合わせた指導を配慮している
	苦手なことへの配慮	(こころとからだの理解)血や内臓を見ることが苦手な生徒もいるため、事前に伝え、無理矢理見せることがないようにする
	動画活用	(こころとからだのしくみ)使用動画などの選択
		(介護過程)難しい言葉を使わず、分かりやすく説明している動画を提示
		(社会の理解)用語について、具体的な場面と想定される動画を視聴し、口頭で説明を加え、理解を促す
(認知症の理解)動画を見て視覚的に理解をさせた後、プリントを活用しての振り返り		
(認知症の理解)ユマニチュードなどの動画の活用		

分類	要点	記載内容
		(介護総合演習Ⅰ)常に新しい動画を模索 (介護過程)映像から利用者の表情やしぐさなどにも目を向けてアセスメントや計画にいかせるようにしている。同じもの(場面や様子)を見た時に、他者の気づきや表現方法の違いについて感じ取り、取り入れることができるようにしている
	教科書の補強として活用	(社会の理解)教科書の理解を補強するため、ニュース番組などを視聴し、制度の現場・課題を確認する
	機器を体験	(介護過程)タブレットを使う場面と使わない場面の区別をつけるように
	機器を理解	(こころとからだの理解)ゲーム性が強いので、生徒の興味を惹くことができる
資料	字幕	(医療的ケア)わかりやすく字幕をつける
	色の工夫	(社会福祉基礎)授業中に課題提示を実施するときは、色を使い見やすいようにしている
その他		(不明)QRコードの活用 (介護総合演習)穴埋めの作成など

⑥教育における課題（ICT活用/各科目）

分類	要点	記載内容
教員・授業	機能を上手く活用できない	(発達と老化の理解)全ての機能を活用できていない (介護過程)思考の展開がわかるようなツールを活用できていない
	生徒・学生の意見をいかせていない	(介護福祉基礎)生徒側からの意見の質の向上や活用の仕方 (こころとからだの理解)授業の振り返りが送信して終わってしまい、その先に結びつけることが難しい
	主体的学びの展開が難しい	(こころとからだの理解)分野の都合上、iPadを使って生徒主体で動いたり、体験したりするような授業を展開することが他教科と比べて少ない
	実践的授業の展開が難しい	(介護総合演習Ⅰ)もっと現場の状況を伝えられる実践的授業の展開
	評価方法	(介護過程)評価方法
	資料・教材	教材が少ない
動画のクオリティが低い		(介護総合演習)カメラ画像の解像度の粗さ
生徒・学生	スキルや活用に個人差	(こころとからだの理解)人によって使用スキルが様々なため、授業展開が難しい (こころとからだの理解)活用の習得に大きく個人差
	操作が苦手	(介護過程)パソコン等の操作が苦手な生徒に対する指導に多くの時間がかかる
	理解度に差がある	(介護総合演習Ⅰ)理解度の低い学生と高い学生との授業展開の差別化(時間の確保など含む)対応についての配慮
	オンデマンドを見ない	(認知症の理解)オンデマンドで課題を配信しているが、学力の低い学生ほど、見ていない傾向がある (認知症の理解)オンデマンド配信の動画を全員が見ているわけではない
	タブレットを見返していない	(介護過程)タブレットを見返して勉強する生徒が少ない
	感想を送らない	(こころとからだの理解)感想を送らない生徒がいるので、確認が難しい
	コピー&ペーストで対応	(介護の基本)コピー&ペーストする学生がいる
	学校外で機器を確保できない	(介護総合演習Ⅰ)パソコンが必須、修理中などの場合、学内であれば貸与し作成も可能だが、自宅で作成できない

分類	要点	記載内容
		(こころとからだの理解)生徒が自宅で復習をする際には使用しづらい
	学校外で環境が整わない	(人間の尊厳と自立)機器環境の差
	学習内容より作業が優先される	(介護過程)共同編集やスライド装飾などにおける過度な時間浪費など、習内容より作業が優先される点が課題

⑦効果、効果の把握・測定方法（ICT活用/各科目）

分類	要点	記載内容
知識や理解が深まる	イメージしやすい	(発達と老化の理解)身体構造等はよりイメージがわかりやすいと考えている
		(こころとからだの理解)実物(臓器)などを見せることは出来ないため、模型よりも動画鑑賞がイメージしやすい
	発見や驚きを感じやすい	(介護過程)動画を観ることで、自分たちの体の動きの発見や驚きを感じやすい
	理解しやすい	(認知症の理解)視覚化によって、理解度を高める
	理解度が増す	(認知症の理解)動画を見た後に、問題をとくことで、理解力が向上する
		(社会の理解)動画など視聴すると、理解度が向上すると、学生の反応が多い
		(こころとからだのしくみ)生徒の理解力や技術の向上
		(社会の理解)視覚教材は、理解度が増し記憶に残る
	習得が早くなった	(医療的ケア)学生の習得が早くなった
	知識の定着	(介護総合演習)知識の定着
他者との違いに気づく	(介護過程)介護実習では、実習先や担当利用者が個々で異なるため、同じ事例(映像)を使用することによって他者との違いに気づきやすい	
教育への効果	繰り返し予習・復習	(人間の尊厳と自立)何度も繰り返し見直して予習・復習ができる
	リアルタイムの指導・修正	(介護総合演習Ⅰ)リアルタイムでの入力内容が確認できるため、時間に制限なく常時指摘内容を配信でき、学生も自分の余裕ある時間に自宅などで修正対応が可能
	情報共有が可視化	(介護過程)情報共有が可視化される
	協働学習が促進	(介護過程)協働学習が促進される
		(介護総合演習)主体的にチーム内での役割分担や協同作業ができる
	評価がしやすい	(介護総合演習)期限管理が可能のため評価しやすい
	資料の紛失がない	(介護総合演習)資料の紛失がない
	過去の授業内容を確認しやすい	(社会福祉基礎)授業の振り返りを行うときに過去の授業内容が残っているので確認しやすい
	柔軟な学習環境	(人間の尊厳と自立)柔軟な学習環境
	実習におけるギャップが減少	(介護過程)実習前に実習先のイメージを持った状態で準備でき、実習が始まってからのギャップが減少
	生徒・学生の理解度や違いを把握	(介護の基本)学生個々の興味関心がわかる、文章能力がある程度把握できる
教員の負担軽減	期限管理と資料の保管が容易	(介護総合演習)提出資料の期限管理と資料の保管
	教員業務の軽減	(介護総合演習)教員業務の軽減
	修正の指導が容易	(こころとからだの理解)用紙と違い、教師が指導した部分を訂正しやすく、消したり、書いたり容易
生徒・学生への効果	自分の質問や考えを伝えることができる	(こころとからだの理解)授業で質問を受ける際に発言が少ない生徒が、書き込むことで自分の質問や考えを伝えることができる

分類	要点	記載内容
	積極的に参加する	(こころとからだの理解)早押しクイズ形式の競争ゲームで座学が好きではない生徒も積極的に参加することができる
就労先での効果	介護現場で活用できる	(介護過程)就職後、介護現場でも使うことができる
		(介護総合演習Ⅰ)入力作業に慣れ、現場での電子カルテに対応していける
効果の把握や測定の方法	自己評価・相互評価	(介護過程)自己評価・相互評価などで学習効果を測定できる
	授業アンケート	(介護総合演習)授業終了後、学生にアンケートをとり、満足度を確認しながら進めている
	演習中の様子	(社会の理解)学生への授業アンケートや演習中の様子や理解度を確認
	単元テスト	(こころとからだのしくみ)単元テストなどによる習得度の確認
その他		(介護総合演習Ⅰ)自分の働く職場を想像し、適した就職につなげる

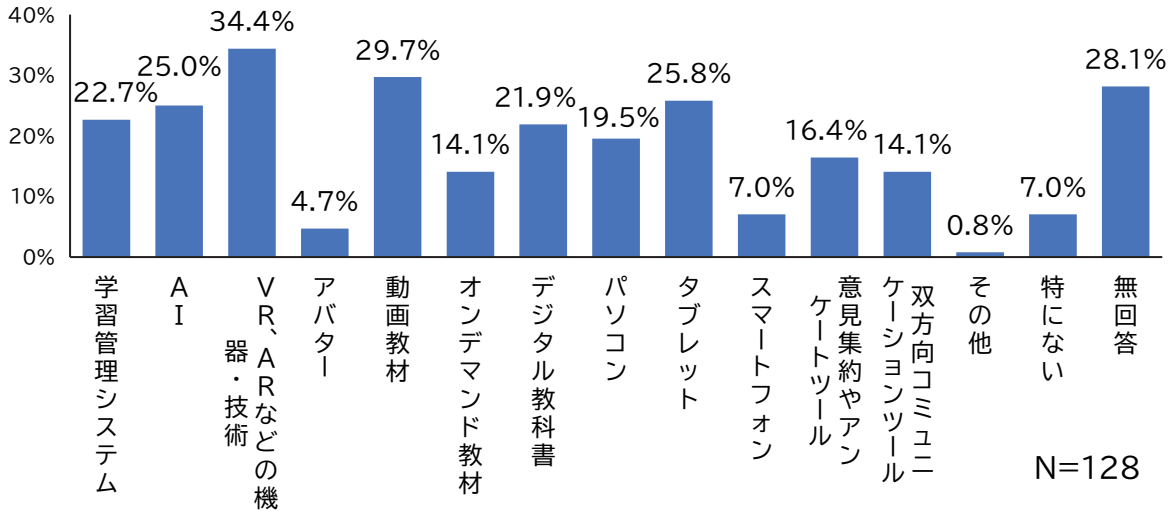
⑧今後の展開と期待（ICT活用/各科目）

分類	要点	記載内容
今後も継続	今後も継続	(介護総合演習)今後も継続していく
積極的な活用	積極的に導入したい	(こころとからだの理解)今後も使用できる分野を探し、効果が得られるのであれば積極的に使用したい (社会の理解)積極的に導入したい
	PCの活用	(介護総合演習Ⅰ)介護現場では、PCで記録を作成する施設も増えており、学生時代から積極的に使用する
	i P a dの活用	(こころとからだの理解)情報などの教科においてPCだけではなく、i P a dの指導もしていただき、生徒達が様々な場面で円滑に使えるようにしてほしい
教育の充実	授業の質	(介護福祉基礎)授業の質の向上
	苦手分野が克服できる	(社会の理解)学生の苦手とする分野において理解度を高め、国試の点数が向上する (介護過程)訂正などがすぐにできるため、アセスメントや介護計画作成への難しさや抵抗感が軽減される
	理解の深まり	(介護過程)単に体のつくりを言葉で覚えるだけでなく、体のつくりや動きを学習することで、生活支援技術など他科目への理解も深めることができる
	学生双方の共有の学び	(介護総合演習Ⅰ)画面共有機能を使用しながらグループワークの発表を行うことは学生双方の共有の学び
	他の人の課題を通して振り返る	(こころとからだの理解)作成した課題を共有することで、家庭学習の際には自分の課題だけではなく、他の人の課題からも振り返ることができる
	介護過程の思考を中心に据えた授業	(介護過程)介護過程の思考を中心に据えた授業設計が可能になる
	学習の可視化と主体性向上	(介護過程)ICT活用により、学習の可視化と主体性向上が期待され個別最適化も可能になる
	先進的な取組に触れる	(介護過程)実習先だけではなく、先進的な取組等、各事業所の充実した取組を調べる機会につなげたい
教員の対応	慣れていない教員でも利用できる	(社会福祉基礎)システムに慣れていない教員でも利用がしやすいようになればよい
	資料・教材の充実	適切な教材の確保
様々な事例教材		(介護過程)様々な事例の教材が欲しい
オンデマンド動画活用		(認知症の理解)オンデマンドの動画を見て、QAなどの問題をとく

分類	要点	記載内容
	無料サイトを使いやすく	(こころとからだの理解)クイズを作成する際に有料コンテンツが多く、無料版では出題方式の幅などが狭い為、無料版でも出来ることが増えてほしい (介護総合演習)広告を減らして欲しい
	実習記録ペーパーレス化	(介護総合演習Ⅰ)今後は、実習に関わる記録物を施設と連動しペーパーレスに取り組む
外部機関との連携	施設との連携	(介護総合演習Ⅰ)適した施設との連携
機器の充実	カメラ画像の鮮明さ	(介護総合演習)カメラ画像の鮮明さが増すこと
その他		(認知症の理解)国家試験の合格率の上昇

(10) 関心がある I C T 等のデジタル機器・技術等

【質問 10】 貴校の介護福祉士養成課程の教育において、関心がある I C T 等のデジタル機器・技術等がありますか。(複数回答可)



学校種別 / I C T 等のデジタル機器・技術等

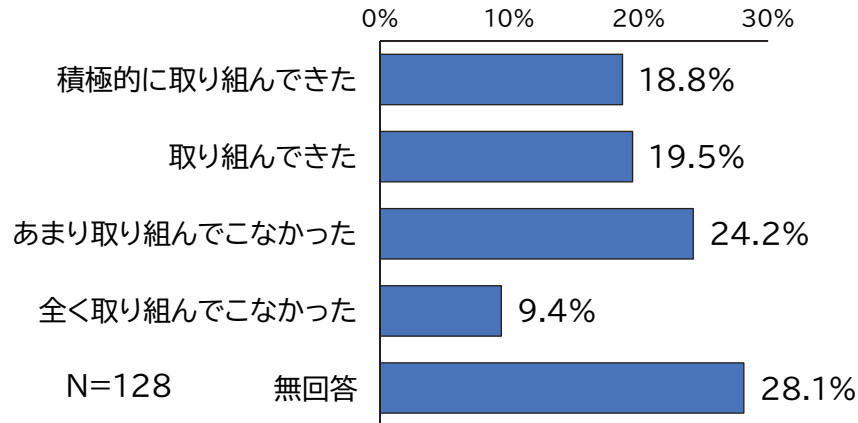
	合計	学習管理システム	AI	VR、ARなどの機器・技術	アバター	動画教材	オンデマンド教材	デジタル教科書	パソコン
全体	128 100.0	29 22.7	32 25.0	44 34.4	6 4.7	38 29.7	18 14.1	28 21.9	25 19.5
四年制大学	15 100.0	6 40.0	7 46.7	6 40.0	2 13.3	5 33.3	4 26.7	3 20.0	5 33.3
短期大学	7 100.0	1 14.3	2 28.6	3 42.9	0 0.0	3 42.9	0 0.0	1 14.3	1 14.3
専門学校	69 100.0	12 17.4	12 17.4	19 27.5	2 2.9	17 24.6	9 13.0	15 21.7	13 18.8
福祉系高等学校	37 100.0	10 27.0	11 29.7	16 43.2	2 5.4	13 35.1	5 13.5	9 24.3	6 16.2

	合計	タブレット	スマートフォン	意見集約やアンケートツール	双方向コミュニケーションツール	その他	特にない	無回答	累計
全体	128 100.0	33 25.8	9 7.0	21 16.4	18 14.1	1 0.8	9 7.0	36 28.1	347 271.1
四年制大学	15 100.0	2 13.3	2 13.3	3 20.0	3 20.0	0 0.0	0 0.0	5 33.3	53 353.3
短期大学	7 100.0	0 0.0	1 14.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 14.3	2 28.6	15 214.3
専門学校	69 100.0	19 27.5	4 5.8	9 13.0	9 13.0	0 0.0	5 7.2	21 30.4	166 240.6
福祉系高等学校	37 100.0	12 32.4	2 5.4	9 24.3	6 16.2	1 2.7	3 8.1	8 21.6	113 305.4

※上段は回答数、下段は割合(%)

(11-1) ICT活用への取組

【質問 11-1】これまで、貴校は介護福祉士養成課程の教育において、ICT等のデジタル機器・技術の活用に積極的に取り組んできましたか。



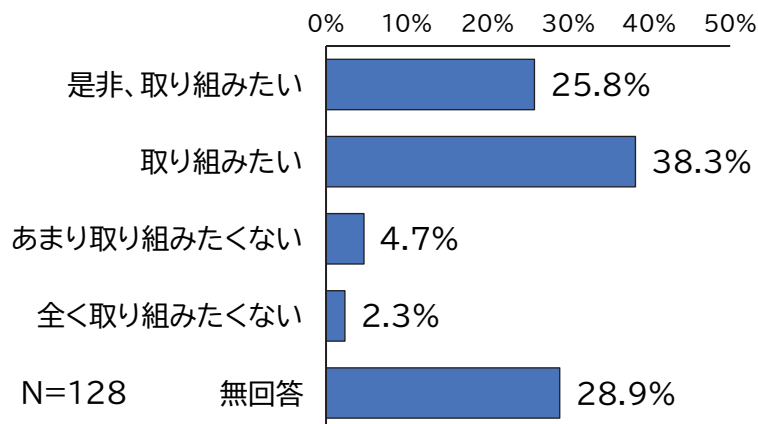
学校種別／ICT活用への取組

	合計	積極的に取り組んできた	取り組んできた	あまり取り組んでこなかった	全く取り組んでこなかった	無回答
全体	128 100.0	24 18.8	25 19.5	31 24.2	12 9.4	36 28.1
四年制大学	15 100.0	2 13.3	8 53.3	0 0.0	0 0.0	5 33.3
短期大学	7 100.0	2 28.6	1 14.3	1 14.3	1 14.3	2 28.6
専門学校	69 100.0	11 15.9	5 7.2	22 31.9	11 15.9	20 29.0
福祉系高等学校	37 100.0	9 24.3	11 29.7	8 21.6	0 0.0	9 24.3

※上段は回答数、下段は割合(%)

(11-2) ICT活用への今後の意向

【質問 11-2】 今後、貴校は介護福祉士養成課程の教育において、ICT等のデジタル機器・技術の活用に積極的に取り組んでいきたいですか。



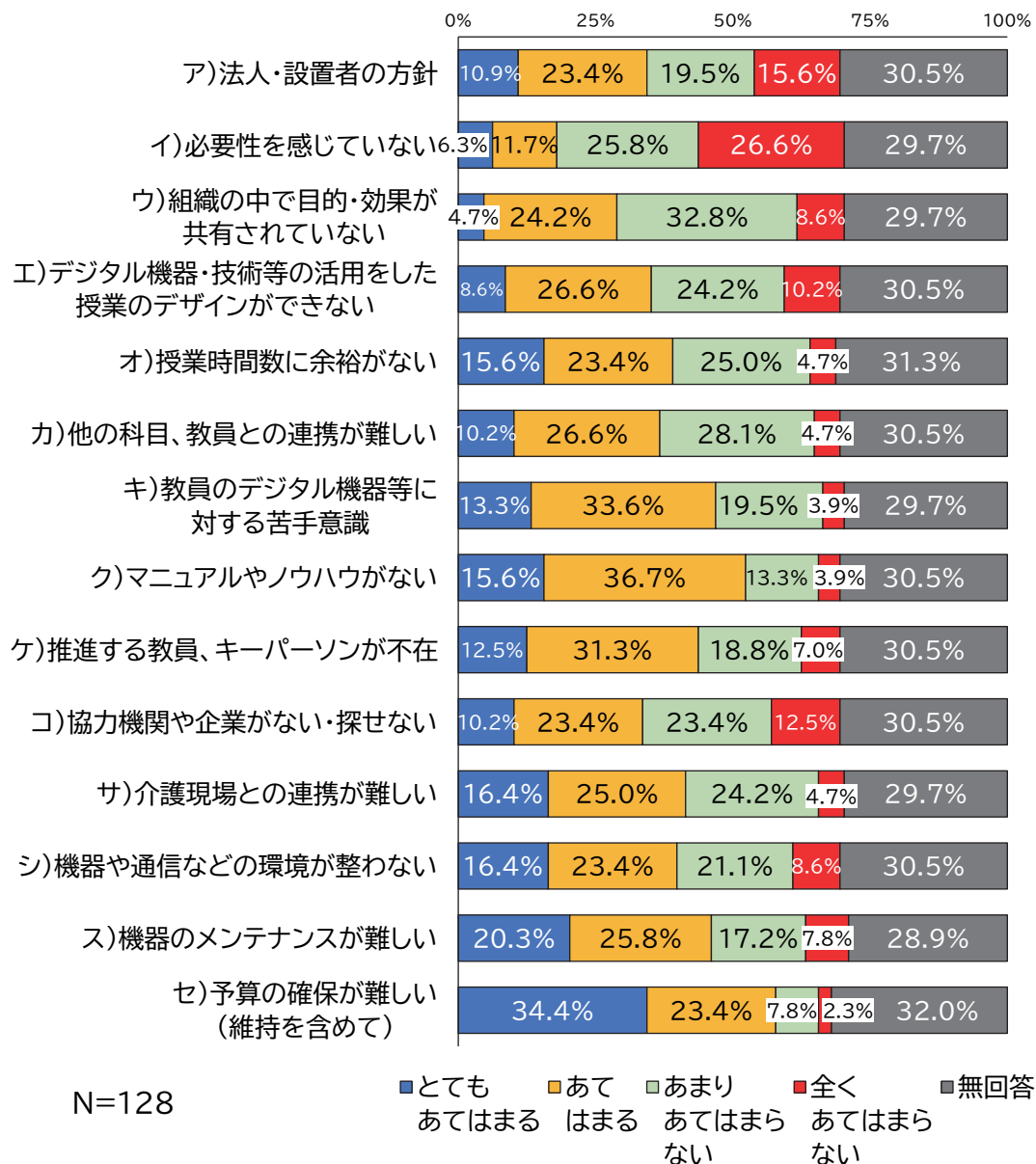
学校種別／ICT活用への今後の意向

	合計	是非、 取り組み たい	取り組み たい	あまり 取り組み たくない	全く取り 組みたく ない	無回答
全体	128 100.0	33 25.8	49 38.3	6 4.7	3 2.3	37 28.9
四年制大学	15 100.0	3 20.0	7 46.7	0 0.0	0 0.0	5 33.3
短期大学	7 100.0	1 14.3	4 57.1	0 0.0	0 0.0	2 28.6
専門学校	69 100.0	14 20.3	28 40.6	4 5.8	3 4.3	20 29.0
福祉系高等学校	37 100.0	15 40.5	10 27.0	2 5.4	0 0.0	10 27.0

※上段は回答数、下段は割合(%)

(12) ICT等のデジタル機器・技術等活用の障壁

【質問 12-1】 貴校において、以下のア～セの要因は、介護福祉士養成課程における ICT等のデジタル機器・技術等活用の障壁となっていますか。ア～セについて、あてはまるセルに○をしてください。



【質問 12-2】これらのほかに、貴校においてデジタル機器・技術等の導入・活用を難しくしている要因があればお教えてください。（自由記述）

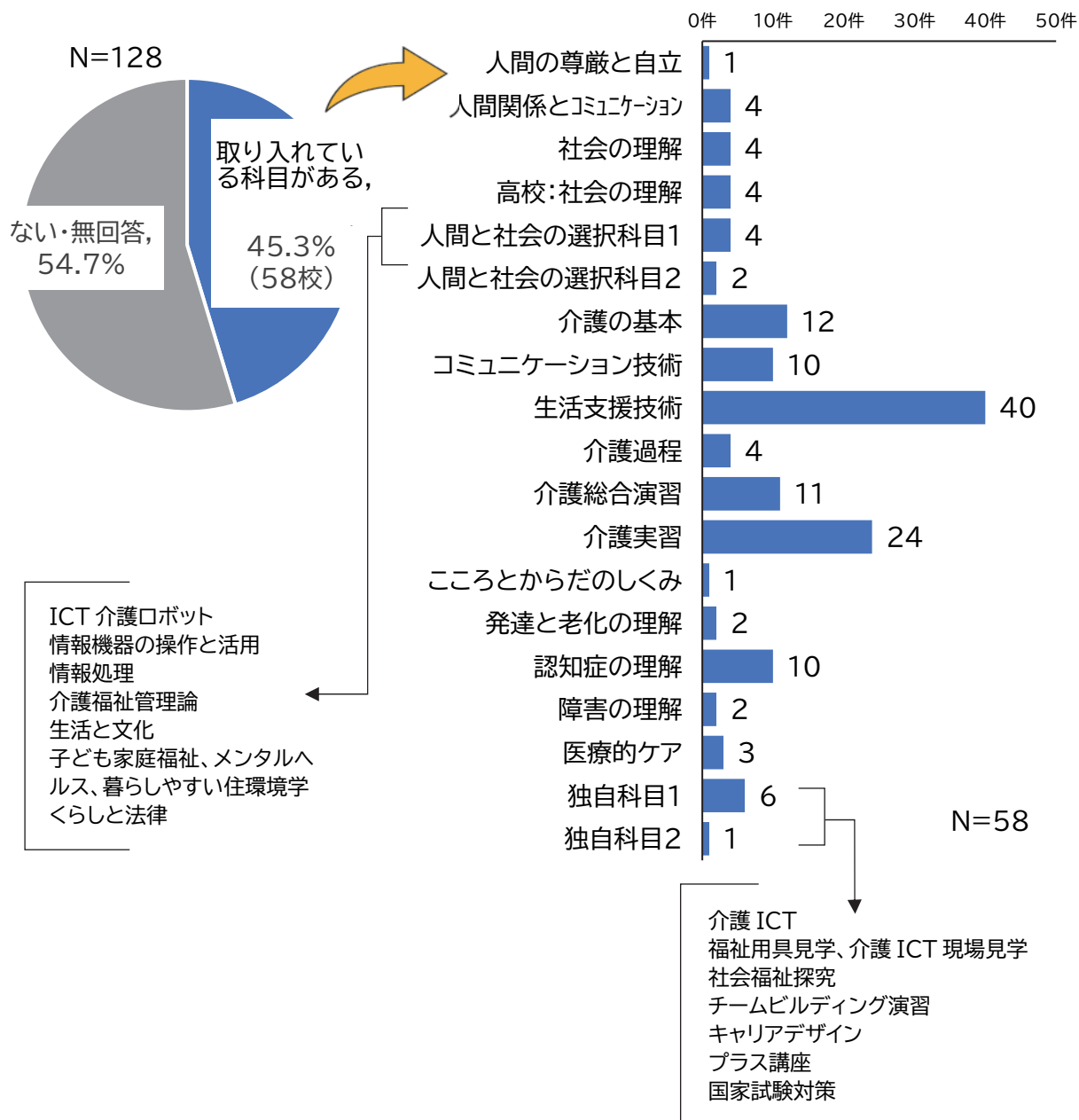
経費	<ul style="list-style-type: none"> ・ 予算の問題が大きい。 ・ 学生 1 人につき 1 台のパソコンの所有をお願いしたいところだが、経済的事情で実際は難しい状況になっている。 ・ 養成施設等は入学者確保が困難な状況であり、予算にも影響しているため、介護テクノロジー機器を購入し常設するためには、費用が高く、予算化できていないのが現状である。一方で、介護現場では介護テクノロジー導入が進んでおり、実習ではじめて介護テクノロジーに触れる学生も多いため、補助金等があれば積極的に校内にも機器を導入していきたい。
メンテナンス・維持	<ul style="list-style-type: none"> ・ Windows のサポート終了など。
教員の知識とスキル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員間での苦手意識の差が激しすぎて、苦手な教員からの反対意見がある。 ・ 主任がアナログなこと。若い先生はできると考える。生徒数が激減して存続が危うい中、お金をかけられない。 ・ 教職員のスキルアップの時間がとれない、苦手意識の払拭、システム企業の選別、検討の時間がとれない。 ・ 活用の方法を含め効果的な使用の仕方が分からない。
教員の多忙化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒や保護者のニーズの拡大による教職員の多忙化。
生徒・学生の使用方法	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業以外のことをしている。休み時間に YouTube などを観てバッテリーの残量がなくなって授業に支障をきたしている。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生数の減少により、経営的基盤が揺らいでいるため、施設設備等の充実化が難しい。学生数の減少が続けば、閉校もありうる。ICT機器を拡充することで学生数が集まるとは思えない。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特にありません。 ・ 特になし。 ・ 活用は進んでいるため、上記設問には回答しておりません。難しくしている要因もございません。

■視点2：介護テクノロジーに関する教育

(13) 介護テクノロジーを用いた介護実践教育の有無

【質問 13】 貴校の介護福祉士養成課程における以下の科目において、介護ロボット、センサー、A I、記録ソフトなど（以下、「介護テクノロジー」と表記）を用いた介護実践について教育を行っていますか。

※介護テクノロジーを取り入れていると回答があった科目を複数回答で集計



学校種別／介護テクノロジーを取り入れている科目の有無（単数回答）

	合計	介護テクノロジーを取り入れている科目がある	ない・無回答
全体	128 100.0	58 45.3	70 54.7
四年制大学	15 100.0	9 60.0	6 40.0
短期大学	7 100.0	5 71.4	2 28.6
専門学校	69 100.0	23 33.3	46 66.7
福祉系高等学校	37 100.0	21 56.8	16 43.2

※上段は回答数、下段は割合(%)

学校種別／介護テクノロジーを取り入れている科目（複数回答）

	合計	人間の尊厳と自立	人間関係とコミュニケーション	社会の理解	高校・社会の理解	科目1 人間と社会の選択	科目2 人間と社会の選択	介護の基本	ン技術 コミュニケーション技術	生活支援技術	介護過程
全体	58 100.0	1 1.7	4 6.9	4 6.9	4 6.9	4 6.9	2 3.4	12 20.7	10 17.2	40 69.0	4 6.9
四年制大学	9 100.0	0 0.0	1 11.1	1 11.1	- -	1 11.1	0 0.0	1 11.1	2 22.2	5 55.6	2 22.2
短期大学	5 100.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	- -	0 0.0	0 0.0	1 20.0	1 20.0	5 100.0	0 0.0
専門学校	23 100.0	1 4.3	3 13.0	3 13.0	- -	3 13.0	2 8.7	6 26.1	2 8.7	15 65.2	1 4.3
福祉系高等学校	21 100.0	- -	- -	- -	4 19.0	0 0.0	0 0.0	4 19.0	5 23.8	15 71.4	1 4.8

	合計	介護総合演習	介護実習	このところからのしくみ	発達と老化の理解	認知症の理解	障害の理解	医療的ケア	独自科目1	独自科目2	平均科目数
全体	58 100.0	11 19.0	24 41.4	1 1.7	2 3.4	10 17.2	2 3.4	3 5.2	6 10.3	1 1.7	2.5
四年制大学	9 100.0	2 22.2	2 22.2	0 0.0	0 0.0	3 33.3	0 0.0	1 11.1	0 0.0	0 0.0	2.3
短期大学	5 100.0	0 0.0	3 60.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2.0
専門学校	23 100.0	5 21.7	14 60.9	1 4.3	2 8.7	5 21.7	2 8.7	2 8.7	5 21.7	1 4.3	3.2
福祉系高等学校	21 100.0	4 19.0	5 23.8	0 0.0	0 0.0	2 9.5	0 0.0	0 0.0	1 4.8	0 0.0	2.0

※上段は回答数、下段は割合(%)

※平均科目数は、回答があった1校当たり

(14-1) コミュニケーション技術における介護テクノロジーの実践教育

【質問 14-1】 質問 13 において、H)コミュニケーション技術について、授業・実習で「取り扱っている」「今後取り扱う予定」である場合に伺います。

「コミュニケーション技術」における介護テクノロジー活用の回答シートに記載があったのは **10校** である。

①活用の時期・期間

選択肢	回答数
() 年前から	5
今年度から	1
今後活用予定	4

1 年前
4 年前
5 年前 (2 件)

②シラバス掲載の有無（番号は1つ）

選択肢	回答数
掲載あり	2
掲載なし	8

③取り扱うきっかけ、活用を後押ししていること（複数回答可）

選択肢	回答数
学習管理システム（LMS）の導入	3
補助金や助成金	0
推進事業等の指定校	0
自治体との協働・自治体の後押し	0
企業との協働	3
介護現場との協働	5
設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働	0
教員の研修、FD	3
科目間連携推進	2
その他	1

・施設でも介護ロボットやICT機器が導入されているため、生徒にも在学中から学ばせたいという思いがあったため、県内の大学等の協力を得て行っている

④教育における具体的使用方法や使用場面（介護テクノロジー/コミュニケーション技術）

分類	要点	記載内容
実際に体験	介護記録	介護記録において、企業による介護記録ソフト（音声入力）の講義と体験を実施 ハナストを使った介護記録のデジタル化
	介護記録、クラウド型情報共有システム	介護記録アプリ、クラウド型情報共有システムなどについて取り扱っている
	見守りセンサー、マッスルスーツ	見守りセンサーと介護支援ロボット（マッスルスーツ）の実物と実践例等を紹介
	コミュニケーションロボット、VR、インカム	コミュニケーションロボット、VR、インカムなど
	分身ロボット	「OriHime」などのロボットについて、動画などで紹介し、DETのときに実際に体験
活用例を理解	現場における活用例	実習施設における活用例の学習
機器を理解	企業と連携した情報提供	企業と連携した情報提供

⑤留意又は工夫していること（介護テクノロジー/コミュニケーション技術）

分類	要点	記載内容
リテラシーを教育	使用する意味	使用する意味を知る
	メリットとデメリットの理解	メリットとデメリットを生徒に考えさせる
	情報の管理	生成AIの使用における情報の管理
実際に体験する	実際に体験	実際に生徒に体験させる
多様な機器	多様な機器を紹介	様々な介護ソフトを各HPを元に紹介
外部機関との連携	企業のデモンストレーション	購入できないものは業者を招いてデモンストレーション
介護の質の向上	機器がない場合の工夫	機器がない場合の工夫も一緒に考えながら授業

⑥教育における課題（介護テクノロジー/コミュニケーション技術）

分類	要点	記載内容
費用	コストパフォーマンス	コスパ
	無償で体験ができない	無償で体験ができる企業が少ない
機器	最新機器への対応が難しい	最新のものに刷新していけない
		最先端技術に触れたいができていない
教員	キャッチアップが必要	教員によっては知識が浅い
連携	学外機関との連携が不可欠	実習施設、企業等との連携が不可欠

⑦効果、効果の把握・測定方法（介護テクノロジー/コミュニケーション技術）

分類	要点	記載内容
教育への効果	学びのモチベーション	学生自身の学びのモチベーション
	利用者の理解につながる	実際の利用者の視点を理解し、介助や声掛けに活かすことが出来る
就労先での効果	現場で提案ができる	知識として習得し、介護現場で生産性向上や効率化のための提案ができる人材となる
	使用に抵抗感がない	一度体験すると、抵抗なく使用することが出来る

分類	要点	記載内容
		生徒が自分にとっても身近であると感じる
その他の効果	学生募集に効果	学生募集に一定の効果がある
効果の把握や測定の方法	アンケートを行っていない	卒後何年か後にアンケートをとる方法が考えられるが、現在は行っていない
	評価基準がない	効果の把握、測定方法についての明確な基準がない

⑧今後の展開と期待（介護テクノロジー/コミュニケーション技術）

分類	要点	記載内容
体験にとどまらない学び	使い方や効果などを現場を通して学ぶ	実際に導入している介護事業所に協力を得て、使い方や効果などを施設見学を通して学びたい
	外部講師・機関と連携して多様な技術に触れる	外部講師や外部機関との連携により、より多くの技術に触れていきたい
機器の充実	養成施設等で機器を共有	養成施設等で輪番のように、同じ器具をレンタルし共用できないか
	学内で機器を充実	学内でも福祉機器を充実させ、日頃から活用しての授業を展開
その他	生成A Iで教育の幅を広げる	生成A Iのさらなる進歩によって、このような教育の幅もさらに広がることが期待される

(14-2) 生活支援技術における介護テクノロジーの実践教育

【質問 14-2】 質問 13 において、I) 生活支援技術について、授業・実習で「取り組んでいる」「今後取り組む予定」である場合に伺います。

「生活支援技術以外の各科目」における介護テクノロジー活用の回答シートに記載があったのは **37校** である。

①活用の時期・期間

選択肢	回答数
() 年前から	29
今年度から	4
今後活用予定	4

1 年前 (3 件)、2 年前 (3 件)、3 年前 (4 件)、4 年前 (8 件)、5 年前 (3 件)、6 年前、7 年前、8 年前 (2 件)、10 年前 (2 件)、15 年前、17 年前

②シラバス掲載の有無 (番号は 1 つ)

選択肢	回答数
掲載あり	19
掲載なし	18

③取り組むきっかけ、活用を後押ししていること (複数回答可)

選択肢	回答数 (件)
学習管理システム (LMS) の導入	4
補助金や助成金	8
推進事業等の指定校	3
自治体との協働・自治体の後押し	3
企業との協働	11
介護現場との協働	11
設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働	1
教員の研修、FD	7
科目間連携推進	5
その他	8

- ・「想定される教育内容 (例)」に示されたことから、動画や説明だけでなく、実際に介護ロボット等に触れて体験することが望ましいと思ったため
- ・学生は携帯を所持しているため
- ・施設でも介護ロボットや ICT 機器が導入されているため、生徒にも在学中から学ばせたいという思いがあったため、県内の大学等の協力を得て行っている
- ・マイスター・ハイスクール普及促進事業への採択 (文科省)

④教育における具体的使用方法や使用場面（介護テクノロジー/生活支援技術）

分類	要点	記載内容
実際に体験	移乗支援	移乗支援ロボットの体験型の授業を実施
	移乗、移動介助	移乗・移動介助において、介護ロボットを借用または購入し体験
	移動支援	移動に関するロボット数種類を業者よりレンタルし、使用体験をしたり演習で活用
		介護現場では抱えない介護の取組も進んでおり、移動サポート機器の使用方法や注意点について実機に触れながら学ぶ
	移乗、移動、見守りセンサー	移乗や移動機器、見守りセンサーなどをを用い、状況を想定した介助を体験
	移動、移乗支援、見守りシステム、コミュニケーションロボット	移動・移乗支援ロボット、見守りシステム、コミュニケーションロボット、機能訓練支援
	歩行支援、コミュニケーションロボット	歩行支援に関する介護ロボット、コミュニケーションロボットの実物を見せ、説明と体験
	移乗、排泄支援	移乗や排泄介助などで介護ロボットを使用
	パワーアシストスーツ	企業の協力を得て、パワーアシストスーツの体験を行っている
	見守りセンサー	見守りシステムは、学校で実演し、どのような利点があるか考えさせる
		企業とのコラボによる眠りスキャンの学習・体験
	介護ロボット、認知症VR	介護ロボットの体験会、認知症VRの体験会
	介護記録	介護ICTソフト（ほのぼの）を活用し、ICT機器を活用した介護記録や利用者情報の入力
スライディングボードや移動用リフト	移動支援の学習の際に、スライディングボードや移動用リフトを活用	
実際に体験（外部講師を招いて）	企業に来ていただき使用体験	外部講師に来てもらい介護ロボットについての授業、体験を行う 開発企業からのレンタルと出張講義・体験
	外部講師から介護ロボットの活用を学ぶ	外部講師を招聘し、ノーリフティングケアについて講義、実技を指導していただく中で、介護ロボットの活用を学ぶ
使用方法を習得	介護記録の練習	介護記録ソフト「ケアカルテ」および音声入力アプリ「ハナスト」を活用し、音声での介護記録の練習
	移乗方法の習得	移乗支援ロボットを活用した移乗方法の習得
機器を理解	福祉機器展に参加	福祉機器展見学
		福祉機器展への積極的参加
	スマート介護を通して	生活支援技術でリフトの導入をし、スマート介護についての解説を入れている
授業内で紹介	機器の紹介	機器の紹介
	各種機器の紹介	各種機器の紹介
活用例を理解	現場における活用例	現場での活用事例を紹介している
		現場での活用方法
		見守りセンサーと介護支援ロボット（マッスルスーツ）の実物と介護実践例等を紹介
		移乗支援ロボット、見守りシステム、インカム、排泄支援、コミュニケーションロボット、入浴支援、業務支援
	現場での活用方法	現場での活用方法について機器の貸出業者による説明
写真、イラスト、活用場面動画	使用はしていないが、写真やイラストを用いたり、活用場面の動画を見せる	

⑤留意又は工夫していること（介護テクノロジー/生活支援技術）

分類	要点	記載内容
リテラシーを教育	活用効果の理解	活用の効果を介護事業所の事例を紹介する
	メリット等の理解	一般的な歩行支援機器（歩行車等）とロボットを比較し、ロボットの機能や使用するメリット等についての理解を深めるようにしている
実際に体験する	実際に体験	できる限り体験を通して学べるようにしている
		会場に行き、実際に最新の機器に触れて体感させている
		実際に生徒に体験させる
		できるだけ多くのロボットやICTを知る、触れる 多様な分野のテクノロジーに実際に見て触れて学習するようにしている
利用者の理解	利用者の尊厳の理解	機器に学生が実際に触れ、操作し、利用者の視点（機器を使われる側）を体験できるように工夫
		ICTの利便性だけでなく「尊厳の保持」を踏まえた活用方法についても指導
多様な機器や最新の機器	最新機器の情報	新しいものの情報を得て、古くならないようにしている
	機器を吟味して購入	介護ロボットを吟味し購入できるものは購入している
実践につながる知識	実践で生かせる	授業で学んだことが実践で活かせるように
	抵抗感を持たない	1年次からICT機器を当たり前扱えるよう指導 生徒が介護ロボットに対し、先入観やマイナスイメージを持たないような伝え方
	使用方法の理解	使いかたを練習して、授業を行う
外部機関との連携	現場と連携	高齢者施設で勤務されている方が機器の取扱や現場での出来事などを指導
	企業と連携	開発企業の職員より説明を受けることで、正しい使い方などを理解できるようにしている 介護ロボットにおける基礎知識を学んでおき、外部講師の方のお話と結びつけること
	福祉機器展を見学・参加	国際福祉機器展で学びを深めている
介護実習との連携	介護実習との連続性	3年次の介護実習において実際の介護施設での運用につなげたい
		介護実習施設を想定した、施設設定や利用者設定を行っている
介護の質の向上	機器がない場合の工夫	介護ロボットの使い方に終始するのではなく、ノーリフティングケアや見守りに関する理論を身に付ける
	介護者の健康保持	機器がなくてもボディメカニクスなどを活用し、介護者自身の健康を守ることが出来る点を伝えている

⑥教育における課題（介護テクノロジー/生活支援技術）

分類	要点	記載内容
費用	費用の確保が困難	費用面
		学校現場に導入する際の資金面
		レンタル料の予算計上が難しい 学内の予算確保が難しくなると思われる
機器	機器が高額	学校で購入したいが、高額であり補助があっても全額ではないため難しい
		教材として大学で機器をそろえることは困難 機器を実際に学校に持ち込んで使用できるようにしたい 学校に持参してもらう介護ロボットは場所の制限がある
	最新機器への対応が難しい	新しい機器が出てくるため、授業で追いつかない

分類	要点	記載内容
	種類・数に限界がある	介護ロボットは、高価、進化が著しい
		最新の機器に触れる機会が少ない
		貸し出されている数が限られているため学生の体形に合わない場合がある
		移動サポートの実機が1台
		企業も少なく限りがある、限定している
		維持が難しい
	レンタル期間が限定される	介護ロボットの管理 特にバッテリーの消耗
	レンタルの仕組みがほしい	企業から借りている期間が5か月
授業展開	体験の機会をつくりたい	生活支援技術に関連した介護テクノロジーについて体験できる機会を作りたい
	1度の体験で終わる	1回の体験・学習で知識定着にはなかなか至らない 年1回の体験会となり、日常的に使用することが出来ない
	紹介で終わる	紹介程度で終わってしまう
	福祉機器展のみの対応	毎年開催している福祉機器展に学生と行くのが精一杯 時期が限定されるので、行けないと想定されるときもある
	授業時間数が確保できない	授業時間数に限りがあり、十分技術の習得ができない 授業の時間に限りがあり、継続しての活用ができない 体験時間や回数が少ない
	蓄積データを活用したい	蓄積されたデータをどのように分析し、ケアに活用していくかが課題
	基本的な技術軽視への不安	機器導入で基本的な技術が軽視される傾向にある
	教員	教員による情報収集が必要
情報収集が難しい		テクノロジーの良い情報収集の方法が見つからない
担当する教員に負担		教員が展示会場に出向いて情報収集するようにしているが、時間を要するため負担になっている
連携	現場の活用が進んでいない	実際に介護現場で活用されている機器が学校周辺地域の事業所では少ない 施設現場で実際に使われていない場合も多く、イメージが付きにくい
		介護テクノロジーを使用している施設が限られており、実習で学べる学生が限られる
	学外機関との連携が必要	関連事業所や企業との連携を早急に整える必要がある

⑦効果、効果の把握・測定方法（介護テクノロジー/生活支援技術）

分類	要点	記載内容	
教育への効果	学びのモチベーション	学生のモチベーション維持	
	利用者の尊厳の理解につながる	実際の利用者の視点を理解し、介助や声掛けに活かすことが出来る	
	利用者に配慮した機器の活用	どのような状態の利用者に適した機器であるのか理解が深まる	
	知識・体験の広がり		変化する介護を体験し学生の知識・見分を広げる
			動画や口頭より、知ることがより具体的になっている
			実際に介護ロボットにふれることで理解が深まる
		使用するうえでの注意事項等も、実際の機器に触れて体験することで理解が深まる	
	活用場面を理解	介護現場での活用事例を理解する	
	質の高いケア	「質の高いケア」を実感しやすい	
	業務負担軽減を実感		業務負担が軽減することを知る
			「介護者負担の軽減」が実感しやすい
	介護者の健康保持	介護者自身の健康・腰痛予防についても学ぶ事が出来る	
科学的介護につながる	「勘や経験」に頼る介護だけではなく、データを取得・分析し、実際のケアにつなげるプロセス		
記述力向上	記録に必要な項目を知ることができ、分かりやすく記述する力を養える		
効果的な介護実習	介護実習で施設へ行った際に、見学や体験をする事前学習となる		
就労先での効果	使用に抵抗感がない	機器に戸惑うことなく使用する	
		介護ロボット導入について抵抗感が軽減	
		一度体験すると、抵抗なく使用することが出来る	
		就職後現場で躊躇なく使用できる	
		現場で当たり前前に介護ロボットを活用できる人材になる	
	介護現場におけるICT化を自分事として考えるきっかけ		
	現場での普及促進につながる	最先端の介護技術を学ぶことで、施設への普及促進につながる	
		介護施設での導入促進へ寄与している	
その他の効果	求人要件	求人の中の1つの重要点として介護テクノロジーの普及をあげている施設が増加	
	介護のイメージアップ	介護のイメージアップにつながり、魅力を伝える際のツールとして使用	
効果の把握や測定の方法	授業アンケート	アンケートで実習後の学生の意識、機器に対する価値観の変化を測定	
		授業アンケートや課題レポートにて、理解度、自由記載から見て取れる	
	振り返りシート	体験授業ごとに振り返りシートを活用して質的に把握している	
	課題レポート	課題レポートにて、理解度、自由記載から見て取れる	
	定期試験	試験に出している	
測定していない、効果はわからない、ない	実施していない	アンケートをとる方法が考えられるが、現在は行っていない	
	わからない	まだよくわからない	
		現時点では、わかりません	

⑧今後の展開と期待（介護テクノロジー/生活支援技術）

分類	要点	記載内容
体験の充実	購入による体験	購入できるものは購入し体験学習を継続していきたい
	レンタルによる体験	購入は難しいため、レンタルなどで実際に体験できるように検討していきたい
	最新機器の体験	実践的で最新の機器を用いた体験型学習をカリキュラムに組み込む
	授業の中での体験	学校でも、身近に触れるものがあればとおもわれる 授業内体験を増やす
	多様な機器を体験	展示会に足を運び多くの企業の介護ロボットをみるようにしていきたい
介護のあり方	介護現場での生産性向上	介護現場での生産性向上に対して意識の向上
	科学的介護の推進	ICT活用により、これまで感覚でやってきた部分が、科学的に証明され、さらに介護の質を向上できることを証明できれば正しい取り扱い方法を知識として学ぶ必要が出てくる
体験にとどまらない学び	導入の意義の理解	誰の何のための機器かということが理解できていないと、導入の意義が変わってくるのではないか
	実習や現場で生かせる力を養う	介護実習・卒業後の現場で生かせる力を育成したい 介護現場でどのように活用しているのか学生が理解できるようにしたい
	現場での普及につながる	施設への普及につながるよう、生徒に知識、技術をしっかり身に付けさせたい
	機器導入のノウハウ	機器導入のノウハウについての教授
	蓄積データの活用	ケアカルテに蓄積されたデータの分析やケース検討など、より高度な学びに結びつける
	利用者に応じた機器の理解	どのような状態の利用者に適した機器であるのかを理解できるような授業展開
	利用者の安全に配慮した使用	利用者の安全に配慮した使用方法を理解できる授業を展開
教員の負担軽減	特定の教員に頼らない調達	個人の教員のコネクションに寄らず教材が調達できることが望ましい
機器の充実	最新の機器選定と貸出	多様な生活支援に対応する最新の機器の選定と貸出が容易になること
	学内で機器を充実	学内でも福祉機器を充実させ、日頃から活用しての授業を展開したい
	関連企業との関係を構築	関連企業の方々に福祉を学ぶ高校生の取組を知っていただく機会をつくり、そこから関係を構築していく必要がある
	必須備品としての整備方針	介護ロボットを必須備品として置くこととした国からの通知などあれば、借りるのではなく学校で購入することができる
介護を変える	小中学生へ介護ロボットを体験	小中学生へ介護ロボットを体験してもらい、介護のイメージを変えていきたい
	進路選択の要件	進路選択時に「介護施設のICT活用状況」に注目する生徒が増え、働く場所や仕事内容を主体的に考える姿勢につながっている
	介護現場を変革する人材	ICTを前提とした介護を学ぶことで、今後の介護現場を変革しうる人材に育っていくことを期待
	介護・福祉の仕事の楽しさ	介護・福祉の仕事の楽しさを拡大させたい
その他	補助金等の活用	自治体等からの補助金、助成金の創設、活用
わからない、ない	わからない	現時点では、わかりません
	ない	なし

(15) 各科目における介護テクノロジーの実践教育

【質問 15】 その他の科目の介護テクノロジー教育

「コミュニケーション技術と生活支援技術以外の各科目」における介護テクノロジー教育の回答シートに記載があったのは **22校、科目数は延32科目**である。

①活用の時期・期間（32科目の集計）

選択肢	回答数
() 年前から	21
今年度から	3
今後活用予定	8

1 年前 (7 件)、2 年前 (2 件)、3 年前 (2 件)、4 年前 (4 件)、5 年前、7 年前 (2 件)、8 年前、15 年前

②シラバス掲載の有無（32科目の集計・番号は1つ）

選択肢	回答数
掲載あり	12
掲載なし	17
無回答	3

③取り扱うきっかけ、活用を後押ししていること(32科目の集計・複数回答可)

選択肢	回答数 (件)
学習管理システム (LMS) の導入	11
補助金や助成金	3
推進事業等の指定校	2
自治体との協働・自治体の後押し	3
企業との協働	8
介護現場との協働	8
設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働	4
教員の研修、FD	5
科目間連携推進	3
その他	7

- ・業務効率、業務負担軽減
- ・カリキュラム変更でチームマネジメント教育が必須となったこと
- ・介護現場でLIFEが導入されたこと
- ・大学の協力

④教育における具体的使用方法や使用場面（介護テクノロジー/各科目）

分類	要点	記載内容
実際に体験	分身ロボット	(社会福祉基礎)介護ロボット(OriHime)を事業所の方からお借りし、生徒に紹介し、実際に操作して体験
	福祉車両のリフト	(社会福祉基礎)福祉車両車(車いす移動者)のリフト操作及び同乗体験
	インカム、電子カルテ	(介護過程)インカムの使用、電子カルテの実際を体験
実際に体験 (外部機関に出向いて)	研究開発機関に出向いて	(人間関係とコミュニケーション)センサーやコミュニケーションロボットについて、東北大学のラボに行き研究・開発されている介護系ロボットを見学・体験する
	現場に出向いて	(介護実習)コミュニケーションロボットを採用している介護事業所に出向き、見学と活用の実際を学ぶ
	専門店に出向いて	(チームビルディング演習)福祉用具の専門店に行き、使用方法など説明を受けた
実際に体験 (外部講師を招いて)	企業に来ていただき使用体験	(介護過程)企業に来校してもらい、インカムの使用、電子カルテの実際を体験
		(介護実習)コミュニケーションロボットの企業に来ていただき、ロボットが行うレクリエーションを学生とともに取り組んだ
		(介護ICT)スマート介護士のテキストを中心に、掲載されている機器についてメーカーの方にお越しいただき、使い方をレクチャーしていただいている
機器を理解	福祉機器展に参加	(介護過程_介護事例研究Ⅱ、介護過程の中に含まれている)において、最新の福祉機器の理解のために、国際福祉機器展に参加している
	LIFE やスマート介護士の説明を通して	(人間関係とコミュニケーション)LIFE や「スマート介護士」の説明を通して、介護テクノロジー全般の講義
	授業内で紹介	(介護過程)授業内での紹介にとどまる
機器を通して 学びを深める	尊厳の理解	(社会福祉基礎)「利用者の尊厳保持」を考える際に、介護リフトなどについて取り扱う
	アセスメントや計画立案	(介護過程)介護過程の展開でのアセスメントや立案に入れていきたい(例：見守りシステムでは、夜間の睡眠状況の分析、排泄支援では、排泄リズムの分析)
	科学的介護の理解	(介護総合演習)見守り機器などのデータから、利用者の生活状況を理解、把握し、データに基づいた科学的介護を考える
	業務改善	(人間関係とコミュニケーション)キャリアパスと介護職員処遇改善の授業の中で、生産性向上のための業務改善の取組として、介護記録・情報共有支援、業務支援、インカムなどを紹介している
	生産性の向上	(介護実習)実習ガイドブックに「介護テクノロジーの活用の仕方や効果を学ぶ」、「生産性向上の取組について学ぶ」ことを学生に提示し、日々の実習目標立案の参考になるようにする予定 (介護総合演習)探求学習として介護現場における課題や生産性向上について考える

⑤留意又は工夫していること（介護テクノロジー/各科目）

分類	要点	記載内容
リテラシーを教育	メリット・デメリットの理解	（社会福祉基礎）利用者の尊厳について考える際に、介護リフトなどのメリット・デメリットを考えさせた後に、動画等を活用して説明している
	必要性の理解	（人間関係とコミュニケーション）毎年、制度の仕組みと最新の情報をセットで提供し、必要性を意識できるようにしている
		（介護過程）導入していない施設もあること、進化を続けていることの理解、テクノロジーを使用しても人のあたたか・観察が大切なことを指導
	ICTを活用するマネジメント	（介護ICT）ICTを活用するマネジメントを意識させる
実際に体験する	実際に見て触れる	（介護総合演習）実際に見て触れることで、より実践的に考えることができるようにする
		（社会福祉基礎）リフトを自分で操作し車いすで車両に乗り校内を移動する体験を目的とした
		（社会福祉基礎）OriHimeに関する新聞記事を探し、生徒に紹介して身近な存在であることや興味を持たせるように工夫
実践につながる知識	活用場面の理解	（介護過程）最新の機器などを、どのような人に使うといいか、使う場面まで想定するように促している
	活用事例を理解	（介護実習）前もって活用事例を紹介していただくよう打ち合わせしている
	使用方法の理解	（介護総合演習）使い方、とにかく練習
		（社会福祉基礎）動画でOriHimeを利用している人の様子やOriHimeの機能や使用方法を学んだ
	実物の映像を利用	（介護過程）実物の映像を流す
	データの見方、分析、活用	（介護過程）はじめに、見守りシステムや排泄支援の見方や分析方法を理解する必要がある
		（介護総合演習）見守り機器などはなるべくデータを活用できるようにする
（介護総合演習）データ分析能力を身に付ける		
スマート介護士の教材使用	（人間関係とコミュニケーション）「スマート介護士」の教材を使用している	
外部機関との連携	職員にレクチャーする内容を学生向けに行う	（介護ICT）現場の職員にレクチャーするような内容を、学生向けに行っていただく
	企業見学	（介護過程）実物の映像を流したり、生活支援技術授業と関連し企業見学を通して学びを深める
生産性向上	生産性向上に触れる	（介護実習）実習目標の立案の授業にて介護テクノロジーや生産性向上について触れることで実習目標への意識づけになると考えている
その他	理解度や習熟度をチェック	（介護実習・介護総合演習）毎回の授業で提出（クラウド）、学生個々の理解度や習熟度のチェックを行う
	未来の介護を考える機会をつくる	（人間関係とコミュニケーション）学生に未来の介護を考える機会をつくること

⑥教育における課題（介護テクノロジー/各科目）

分類	要点	記載内容
授業展開	説明で終わる	（チームビルディング演習）1回専門店に行き説明を受けたが、体験は出来なかった
	体験できない	（人間関係とコミュニケーション）介護記録ソフト、情報共有支援システム、業務支援における管理システム、インカム等の実物を学校で購入し体験できない

分類	要点	記載内容
	実際の現場での使用ではない	(介護過程)実際の現場での使用ではないのでその良さがどこまで伝えられるか
	生徒同士の体験にとどまっている	(社会福祉基礎)生徒同士で体験するのではなく、実際に使用している利用者様と交流する
	毎年実施できない	(人間関係とコミュニケーション)毎年実施できていない
	授業時間数が確保できない	(社会福祉基礎)技術については、時間の関係であまりできていない
		(社会福祉基礎)利用者側と支援者側を全員経験するには時間がかかる
	見学時期との調整が必要	(介護過程)生活支援技術における企業見学の時期と合わせつつ連携が図れるよう時期に配慮
	現場のデータ活用を活用したい	(介護過程)実際に使用している施設のデータをもらい、実際の介護過程の展開に役立てたい
事例がない	(介護過程)事例がなく、独自で作成する必要がある	
介護実習	実習先で導入されていない	(介護総合演習)実際に介護現場(実習先)などで導入されていないことから、介護実習などで触れることができない
	活用している実習先が限られる	(介護実習)コミュニケーションロボットを活用している施設が限られているため選択肢が少ない
	実習先が活用しているかわからない	(介護実習)全ての実習先で介護テクノロジーを活用しているかわからない
教員	教員のITリテラシーがない	(介護実習・介護総合演習)教員側のITリテラシーや、情報共有の難しさ(開発した教員は理解ができるが、理解を進めるためにマニュアルが必要になる)
連携	学外機関との連携が必要	(社会福祉基礎)現場の方にお越しいただいて、ご指導していただきたい
		(チームビルディング演習)ICTを取り扱う業者に来校していただき、様々な機器を学生が学ぶ機会を設けたい
その他	スマホでの入力が不便	(介護実習)学生は、自分のスマホで入力している者が大半であり、狭い画面上での入力が不便

⑦効果、効果の把握・測定方法(介護テクノロジー/各科目)

分類	要点	記載内容
教育への効果	学びのモチベーション	(介護実習)学生は興味をもって取り組んでいる
	利用者の理解につながる	(介護過程)利用者への対応の大切さを改めて知る
	知識・体験の広がり	(介護過程)経験や体験を深めることで学びが深まる
	見学や体験前の事前学習になる	(社会福祉基礎)介護現場で見学や体験を行う際に、事前学習になる
	科学的介護につながる	(介護総合演習)科学的で根拠に基づいた介護実践のための能力の向上
	学習成果などのデータ蓄積ができる	(介護実習)学習成果など、ポートフォリオのデータ蓄積ができる
介護実習への効果	実習日誌を実習先と共有	(介護実習・介護総合演習)実習日誌の内容を実習先と巡回時以外でも共有できる
	実習日誌を教員間で共有	(介護実習)各学生の現状が複数の教師によって把握できる
	随時、指導・確認ができる	(介護実習・介護総合演習)どこでも、いつでも、リアルな指導ができる
		(介護実習)オンタイムで実習日誌の確認
日本語の負担軽減(留学生)	(介護実習)留学生にとって、日本語の負担が軽減する	

分類	要点	記載内容
就労先での効果	日誌の紛失防止	(介護実習)日誌の紛失がない
	実際に活用できる	(社会福祉基礎)介護ロボットを使用できるようになること
	現場で積極的に活用ができる	(人間関係とコミュニケーション)学生のデジタルに対する苦手意識を軽減し、介護現場で積極的に介護テクノロジーを活用できる人材になる
		(人間関係とコミュニケーション)介護処遇改善の取組を検討・実践するリーダー的な立場になり、率先して取り組める人材になること
	利用者にあった機器の活用ができる	(社会福祉基礎)リフト操作時に注意する点や移動時の揺れなどの体験を学生時代に経験し、利用者への配慮事項などを現場に出た時に活かす
	利用者のQOLを意識した活用	(介護過程)学生時代に最新の機器に触れることで、効率性だけでなく、利用者のQOLを意識した介護テクノロジーの活用方法を見出せる
	中核的な人材となる	(介護総合演習)介護現場における中核人材としてのスキル
効果の把握や測定の方法	アンケート	(介護総合演習)体験実施後の学生アンケート (人間関係とコミュニケーション)卒後何年か後にアンケートをとる方法が考えられる
	学生からの言葉	(介護総合演習)学生からの発言
	測定方法は未確立	(介護過程)授業においては、測定方法などはまだ確立できていない
その他		(人間関係とコミュニケーション)未来の介護が予測できる

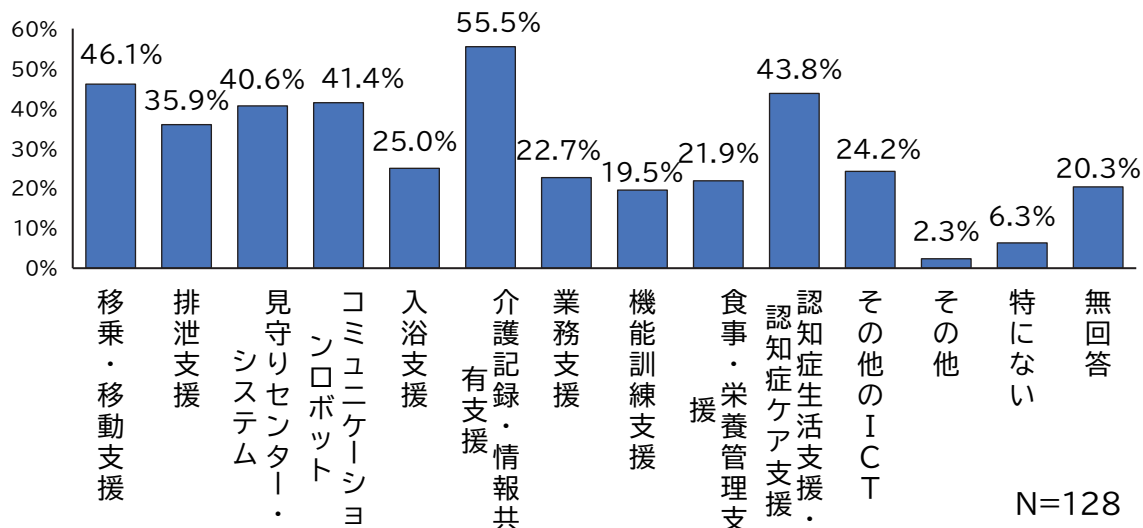
⑧今後の展開と期待（介護テクノロジー/各科目）

分類	要点	記載内容
取組を継続	毎年実施する	(人間関係とコミュニケーション)なるべく毎年実施できるようにスケジュールを組んでいきたい
	継続する	(人間関係とコミュニケーション)今後も継続
体験の充実	多様な機器を体験	(社会福祉基礎)協力先の施設と連絡を取り合い、定期的に実施し、様々な種類が体験できると良い (介護実習)多様なコミュニケーションロボットの活用の実際を体験したい
	現場で体験	(介護過程)現場において体験し、さらに理解が深まる (人間関係とコミュニケーション)介護記録ソフト、情報共有支援システム、業務支援における管理システム、インカム等を使用している介護施設を見学したり、介護実習で実物を見て、活用方法や課題を学びたい
体験にとどまらない学び	活用方法を学ぶ	(介護ICT) ICT機器が整備されている施設での実習で、どのように活用されているのかを学ばせたい
	学習意欲の向上	(介護実習)コメントをすることによって学習意欲の向上が期待できる
機器の充実	実習先のWi-Fi利用	(介護実習・介護総合演習)実習先のWi-Fi環境の利用への理解
	機器の使いやすさの向上	(介護実習)システムの使いやすさの向上
介護のあり方	意思疎通が難しい方への支援	(社会福祉基礎)意思疎通が難しい方とのコミュニケーション方法を介護ロボットを通して見つける
	新たな支援のあり方	(介護過程)介護テクノロジーを活用することは、利用者のQOLをあげることの手助けに過ぎないとい

分類	要点	記載内容
		う考え方を定着して行くことで、新たな支援のあり方が生まれる
その他	3 Kではないことを実感	(介護過程) 3 Kではない実感がもてる

(16) 関心がある介護テクノロジー

【質問 16】 貴校の介護福祉士養成課程において、取り扱いたいと思う介護テクノロジーはありますか。(複数回答可)



学校種別／関心がある介護テクノロジー

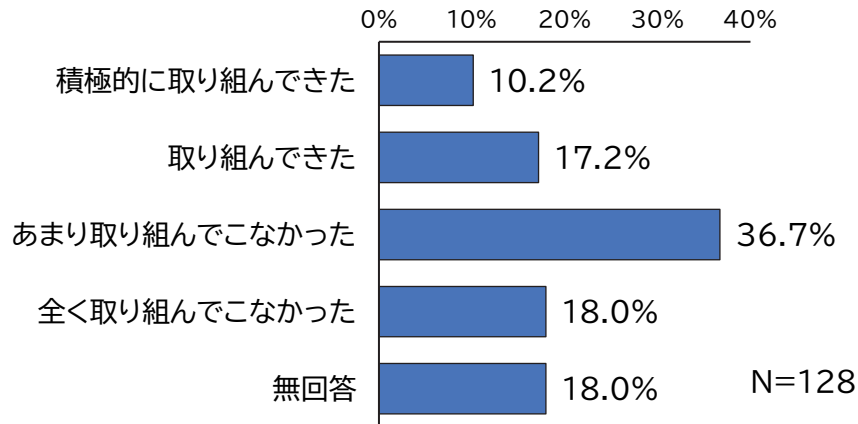
	合計	移乗・移動支援	排泄支援(予測・検知を含む)	見守りセンサーシステム	コミュニケーションロボット <th>入浴支援</th> <th>介護記録・情報共有支援</th> <th>業務支援</th> <th>機能訓練支援</th>	入浴支援	介護記録・情報共有支援	業務支援	機能訓練支援
全体	128 100.0	59 46.1	46 35.9	52 40.6	53 41.4	32 25.0	71 55.5	29 22.7	25 19.5
四年制大学	15 100.0	10 66.7	11 73.3	7 46.7	9 60.0	5 33.3	7 46.7	4 26.7	4 26.7
短期大学	7 100.0	4 57.1	5 71.4	5 71.4	3 42.9	2 28.6	4 57.1	3 42.9	2 28.6
専門学校	69 100.0	28 40.6	18 26.1	27 39.1	27 39.1	15 21.7	40 58.0	12 17.4	13 18.8
福祉系高等学校	37 100.0	17 45.9	12 32.4	13 35.1	14 37.8	10 27.0	20 54.1	10 27.0	6 16.2

	合計	食事・栄養管理支援	認知症生活支援・認知症ケア支援	その他のICT	その他	特にない	無回答	累計
全体	128 100.0	28 21.9	56 43.8	31 24.2	3 2.3	8 6.3	26 20.3	519 405.5
四年制大学	15 100.0	6 40.0	10 66.7	5 33.3	1 6.7	0 0.0	2 13.3	81 540.0
短期大学	7 100.0	2 28.6	5 71.4	2 28.6	0 0.0	0 0.0	1 14.3	38 542.9
専門学校	69 100.0	14 20.3	23 33.3	16 23.2	1 1.4	7 10.1	15 21.7	256 371.0
福祉系高等学校	37 100.0	6 16.2	18 48.6	8 21.6	1 2.7	1 2.7	8 21.6	144 389.2

※上段は回答数、下段は割合(%)

(17-1) 介護テクノロジー教育の取組

【質問 17-1】これまで、貴校は、生徒・学生に介護テクノロジー教育を行うことについて積極的に取り組んできましたか。

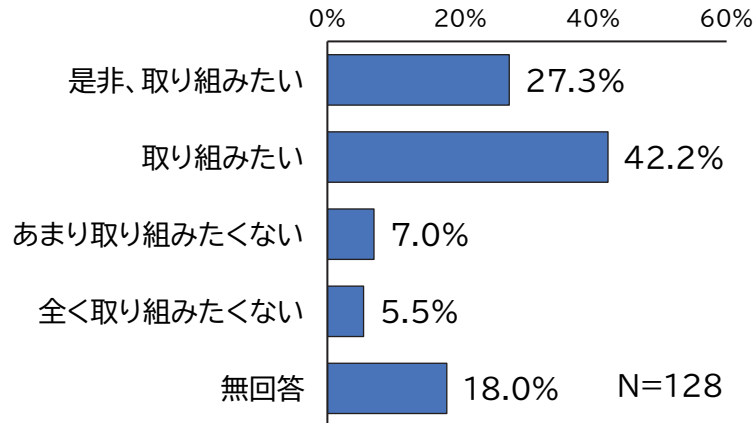


	合計	積極的に取り組んできた	取り組んできた	あまり取り組んでこなかった	全く取り組んでこなかった	無回答
全体	128 100.0	13 10.2	22 17.2	47 36.7	23 18.0	23 18.0
四年制大学	15 100.0	1 6.7	5 33.3	6 40.0	1 6.7	2 13.3
短期大学	7 100.0	2 28.6	2 28.6	1 14.3	1 14.3	1 14.3
専門学校	69 100.0	7 10.1	9 13.0	26 37.7	13 18.8	14 20.3
福祉系高等学校	37 100.0	3 8.1	6 16.2	14 37.8	8 21.6	6 16.2

※上段は回答数、下段は割合(%)

(17-2) 介護テクノロジー教育への今後の意向

【質問 17-2】 今後、貴校では、生徒・学生に介護テクノロジー教育を行うことについて積極的に取り組んでいきたいですか。

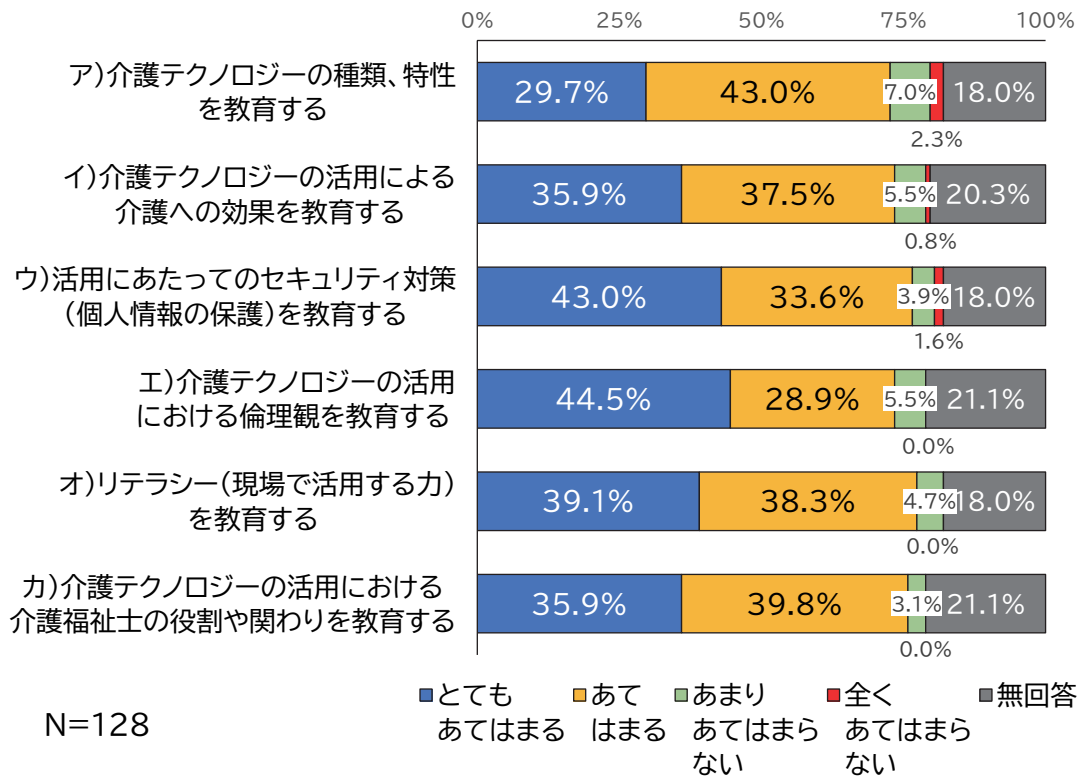


	合計	是非、 取り組み たい	取り組 み たい	あまり 取り組 み た く な い	全く取 り 組 み た く な い	無回答
全体	128 100.0	35 27.3	54 42.2	9 7.0	7 5.5	23 18.0
四年制大学	15 100.0	4 26.7	9 60.0	0 0.0	0 0.0	2 13.3
短期大学	7 100.0	3 42.9	3 42.9	0 0.0	0 0.0	1 14.3
専門学校	69 100.0	18 26.1	26 37.7	7 10.1	4 5.8	14 20.3
福祉系高等学校	37 100.0	10 27.0	16 43.2	2 5.4	3 8.1	6 16.2

※上段は回答数、下段は割合(%)

(18) 介護テクノロジー教育に関する重要な視点

【質問 18-1】 介護福祉士養成課程において、介護テクノロジーを教育することについて、どのような視点が重要であると考えますか。ア～カについて、あてはまるセルに○をしてください。



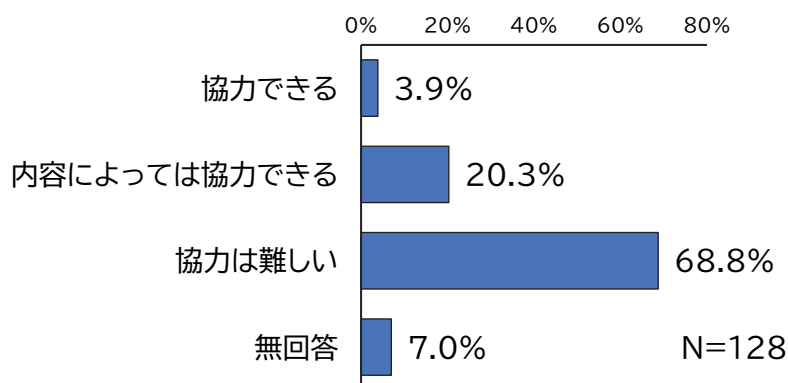
【問 18-2】これらのほかに、介護テクノロジーを教育することについて、重要と考えていることがあればお教えてください。（自由記述）

介護テクノロジーの意義・役割	<ul style="list-style-type: none"> ・ 介護職員が楽をするために使用する、ということに焦点を置かれないように注意する必要がある。誤った使用方法をしないよう、注意喚起が必要である。 ・ 介護テクノロジーへの理解、意味のある活用と同時に、人間の意志や望み、自然な営みそのものが置き去りにされないような教育を大事にしたいと考える。
教員の知識とスキル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員自らが常に新しい介護テクノロジーに精通している必要があり、現場に出るどのような活用の仕方、効果があるのかを知る必要がある。 ・ 現在の学生において、利用者の尊厳と倫理観の教育を維持しながら、如何に介護テクノロジーの特性理解と活用の仕方を学ばせるのか、高度な教育スキルが求められる。介護テクノロジーを活用（経験）した教員が少なく、これに対応した教育スキルを身につける必要がある。 ・ 積極的に取り組みたいと考える。課題があるとすれば、予算的な面と取り扱う教員の力ででしょうか。乗り越えるには時間を要するなど感じております。
介護現場等にかかす	<ul style="list-style-type: none"> ・ 介護テクノロジーを教育することで、介護現場等にかかされると考える。 ・ 学生が学校卒業後の就職先で困らないようにしていきたい。学生の将来を考えて学びの視野を広げる意味でも積極的に取り入れていきたいと思っている。 ・ 介護の現場でスムーズに介護テクノロジーが浸透するために、学生のうちから経験し、その利便性を認識させていく必要がある。 ・ 施設に導入されているかどうかで、就職先にもつながっていくと思う。また、学生が介護に興味をもてるようになることも重要であると思う。 ・ マネジメントの視点。 ・ LIFE の活用、介護職員処遇改善（業務改善、生産性向上）の考え方。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生み出す力とアイデアが重要。 ・ 基礎・基本の指導。 ・ 自ら考えること、学ぶこと、体験すること。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 外国人が ICT を上手に活用できるようになることで、記録や介護計画の作成に積極的に携われるのではないかと。親切で明るい外国人の良さを発揮し、より活躍できると思う。 ・ 学生募集が厳しい中で、介護テクノロジーを独自で教育に取り入れていくことは難しい。経済的な支援や、機器の供与などがないと養成教育が現場と乖離する懸念がある。 ・ 必要と感じているが教員が対応できない部分が多く、対応しておりません。 ・ 特にありません。

■ヒアリング協力、研修への参加意向

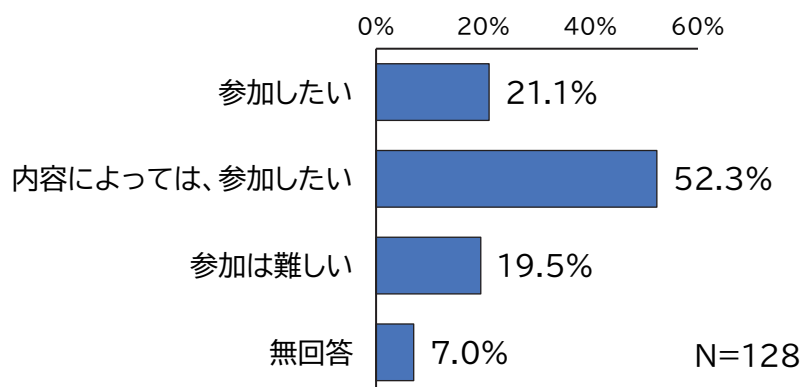
(19) ヒアリング調査への協力有無

【質問 19】 本調査研究では、介護福祉士養成課程におけるデジタル機器・技術等の活用について、具体的な取組事例を把握するためのヒアリング調査を実施します。貴校において、ヒアリング調査にご協力いただくことはできますか。



(20) 研修への参加意向

【質問 20】 本調査研究の一環として、『ICT等を活用した介護福祉士養成教育に関する研修会』を実施いたします。貴校（教員）の本研修への参加のご意向はいかがでしょう。



第3章 ヒアリング調査結果

1 概要

ICT等活用に関する教育実践に先駆的に取り組んでいる養成施設等の教員を対象としたヒアリング調査を実施し、教育実践の現状と実際に取り組んだ際の留意点及び課題について聴取した。

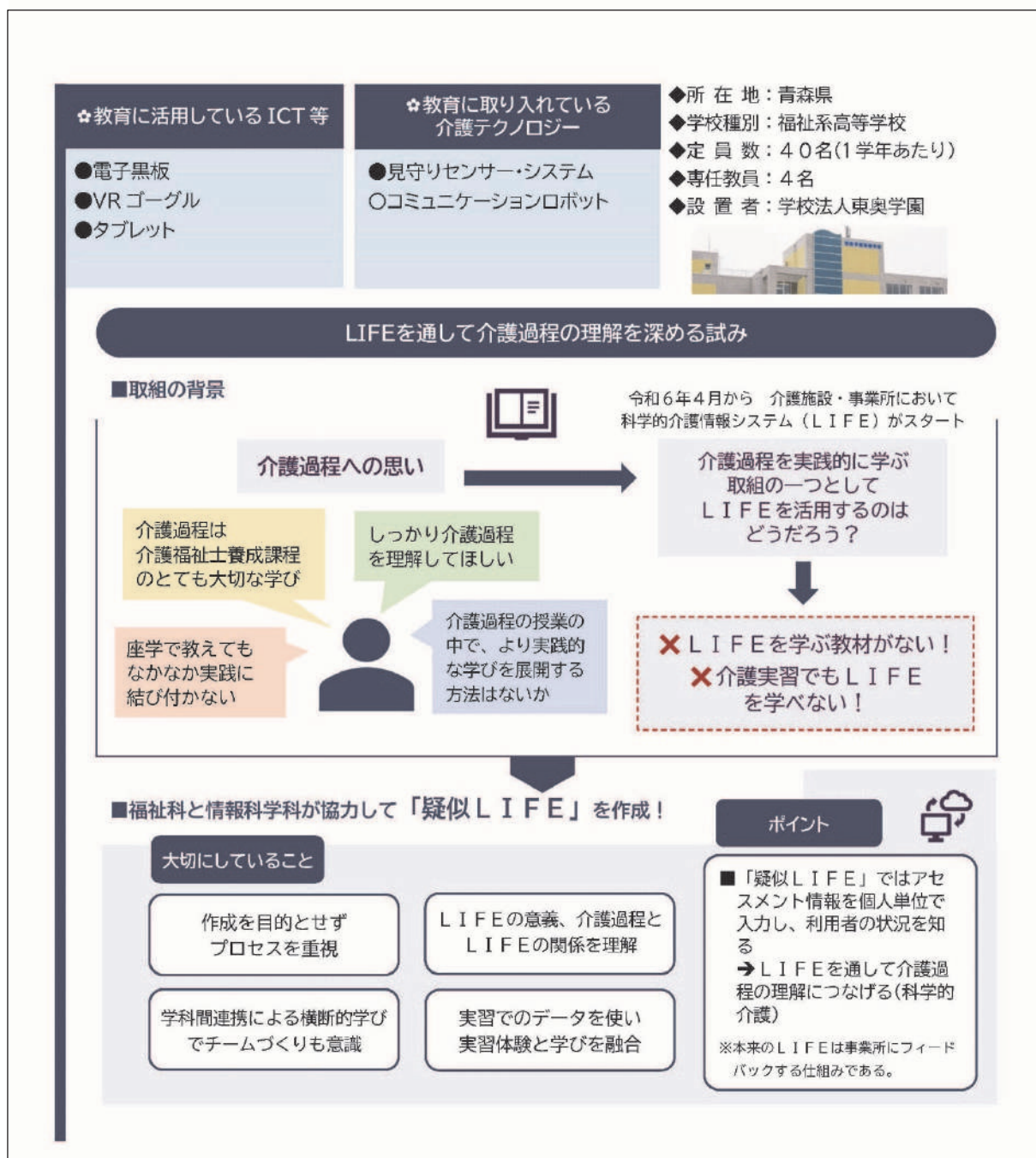
なお、当該ヒアリングは、第1回検討委員会においても実施し、本事業のテーマに関する検討委員の共通認識を図ることとした。

ヒアリング調査の実施(再掲)

目的	<ul style="list-style-type: none"> 事例集に掲載する教育事例の収集
調査対象者	<ul style="list-style-type: none"> 介護福祉士養成施設及び福祉系高等学校の教員
悉皆・抽出別	<ul style="list-style-type: none"> アンケート調査結果および検討委員会推薦等による有意抽出
調査対象	<ul style="list-style-type: none"> ICT等を活用した教育事例、介護テクノロジーを用いた介護実践についての教育事例の2つの視点をもとに、検討委員会での検討を経て対象を有意抽出した 以下8校（福祉系高等学校3、専門学校2、短期大学1、四年制大学2） <ol style="list-style-type: none"> 東奥学園高等学校（青森県） 宮城県迫桜高等学校（宮城県） 愛知県立古知野高等学校（愛知県） 東北保健医療専門学校（宮城県） 東京福祉専門学校（東京都） 富山短期大学（富山県） 仙台大学（宮城県） 桃山学院大学（大阪府） <p>※ご協力者の詳細は、本書「第5章 資料編」に掲載をしている</p>
調査方法	<ul style="list-style-type: none"> 半構造化面接 対面実施を基本とするがハイブリッドやリモートによる方法も対応した
調査時期	<ul style="list-style-type: none"> 令和8年1月～2月
研究倫理と合理的配慮	<ul style="list-style-type: none"> 調査に協力しない、回答しないことがあっても不利益は生じない 合理的配慮が必要な場合は個別に相談・対応する

2-1 ヒアリング結果【福祉系高等学校】 東奥学園高等学校（青森県）

実施日時	令和8年1月27日（火）13：30～15：00
ご対応いただいた先生	福祉科 真田 龍一 先生



■「疑似LIFE」作成を通じた学びの流れ

	具体的な学び・取組	工夫
1年目	<ul style="list-style-type: none"> ICT・IoT、介護DXについての基本的学習 介護生産性向上相談センターへの見学 ICT、介護ロボットの基本的理解 	<ul style="list-style-type: none"> 一般教科について福祉科と情報科学科で一緒に授業を行い、互いの理解を促す →チームづくりの始まり(関係構築) 実際のICT機器や介護ロボットに触れる機会を創出する →具体的なイメージをしやすくする
2年目	<ul style="list-style-type: none"> LIFEの基本的理解 介護過程の基本的理解 情報科学科と協働で疑似LIFEを作成 介護実習で生徒がアセスメントデータを収集(福祉科) アセスメントデータを疑似LIFEに入れる <p>※取組は昨年度から始まり、現在は2年目、疑似LIFEの試行作成の段階となっている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 介護過程とLIFEの座学 LIFEを作成・稼働させるためのデータ収集 →介護実習施設に協力を依頼 →介護実習において、生徒は利用者のアセスメントデータを収集(個人情報等は集めない) →自らの実習体験と介護過程・LIFEを融合 疑似LIFE作成では、情報科学科の教員も協力 →学内のパソコン実習室を利用

解説

科学的介護情報システム(LIFE)とは

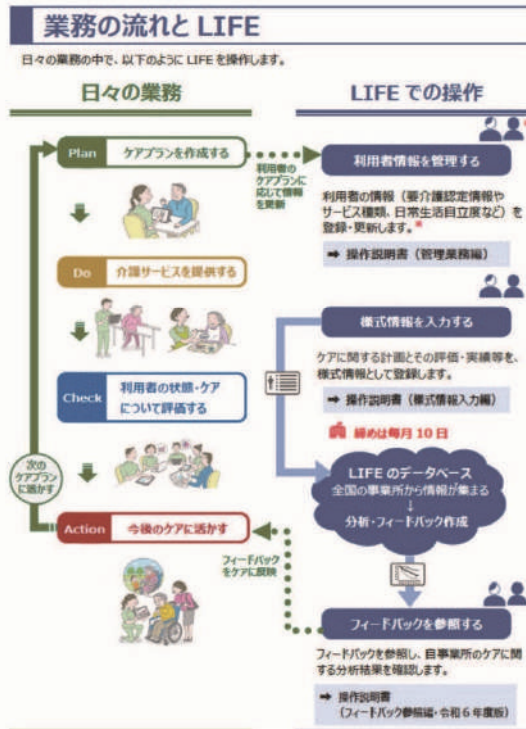
LIFE:
Long-term care Information system For Evidence

- 科学的介護情報システム(LIFE)は、介護サービス利用者の状態やケアの計画・内容についてのデータを全国の介護現場から集め、集めたデータを分析し、その結果をフィードバックする情報システムです。
- 介護施設や事業所でLIFEを利用し、記録したデータやフィードバックを活用して今後のケア(介護サービス)を見直し、繰り返し改善していく取組(PDCA)が期待されています。



※LIFEの詳細は
厚生労働省のウェブサイトを参照
https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000198094_00037.html

※右図は「LIFEクイックガイド」から抜粋



■「疑似L I F E」作成の様子



■期待される効果

【福祉科】

- ・科学的介護と介護過程に関する理解が深まる。
- ・ICT体験を重ね、ICTを使ってできること(調べる、分析する等)が増える。
- ・情報に関する基本的知識と情報活用能力が習得できる。

【情報科学科】

- ・「福祉」という分野への興味・関心喚起、福祉分野における情報科学の必要性や具体的なニーズを理解し、情報科学は福祉現場でどのような役割を担えるのかを考えるきっかけになる。



■今後の展開

- ・L I F Eは科学的介護や介護過程を学ぶ教材となり、ICT体験にもなる。
- ↓
- ・疑似L I F Eを完成させる。
→介護福祉士養成課程の教育に携わる学校に活用していただき、データを蓄積できれば、よりよい分析ができるのではないかと。

■介護テクノロジーの活用について

介護過程

HitomeQや眠りSCANのデータを活用

○データの収集

- ・実際のデータを提供していただける協力施設との連携。
- ・教員が眠りSCANを利用してデータを作成。
- ・メーカーより一部データを提供してもらう。

○データを活用する効果

- ・科学的根拠を持って、支援などを検討することが可能になる。
- ・「こうであろう」というものに裏付けができる。
- ・これまで見えづらかった生活課題を見つけることができる。

○大切にしていること

- ・HitomeQと眠りSCANは同じ見守り機器であるが、それぞれできることが違い、介護職員が求めるもの(目的)によって機器を選定することが重要。
- ・「機器があるからこれをする」のではなく、「これをしたからこの機器を使う」という考え方を教育。

介護総合演習(探求学習)

- ・福祉機器展に行く前に、介護実習で感じた介護現場の課題をグループで整理(課題を発見・整理するところからスタート)。
- ・福祉機器展に行き、課題を解決するための機器を探す。



【課題】食べこぼしをする人がいる。



- ・福祉機器展では機器が見つからない。生徒からユニバーサルテーブル(介護テクノロジーではない)利用が提案された。



○学んでほしいこと

- 介護テクノロジーを使えば何でも解決できるという意識をなくす。
- アセスメントや想像力が大切。

ICTを活用した「授業のユニバーサルデザイン化」

授業の ユニバーサル デザイン化

- ✓ ICTを活用し、全ての生徒に対して、分かりやすい授業を展開する。
- ✓ 視覚化・共有化の推進を図り、教育の質を向上させる。
- ✓ 日常的にICTに触れ、生徒のICT活用のハードルを下げる。
- ✓ 文部科学省の高等学校DX加速化推進事業※を活用している。

※情報、数学等の教育を重視するカリキュラムを実施するとともに、ICTを活用した文理横断的な探究的な学びを強化する学校などに対して、取組に必要な環境整備の経費を支援する事業。

【具体的に活用しているICT例_電子黒板】

- ・ 授業のユニバーサルデザイン化を進めるにあたり導入。
- ・ 視覚化、焦点化、共有化に有効なICT機器。
- ・ 資料や画像を提示する、ミラーリング機能で情報を共有するなどをして授業の展開が可能。
- ・ 自由に書き込みもできるので、従来の黒板と同じ感覚でも利用できる。
- ・ ブラウザ、クラウドともつながり、YouTube等の動画につないだり、クラウドにある他科目の資料等も共有できる。
- ・ 機能を効果的に使用すれば、教員の資料作成、授業準備の負担軽減につながる。

見やすく、資料の切替・展開が容易



【具体的に活用しているICT例（試験的利用）_VRゴーグル】

- ・ 利用者の目線や気持ちを体験できる。
- ・ 実際に介護を受け取る側の感覚を体験することで、自分の感覚と何が違うのかなどの視点のすり合わせが可能になる。
- ・ 生徒たちからは、面白い・怖い・びっくりしたなどの感想が出ているので、普段体験できない、される側の目線を経験するのは効果的だと感じる。
- ・ また、教員は生徒が何をみているかをタブレットで確認ができるため、生徒がどういうところを見ているのか、何に注目しているのかなど、一人ひとりの特性や理解状況の違いについて把握がしやすい。

■VRを使用して学びを深化させるために

- ・ 学習の定着のために：体験したことをまとめるワークシート等を作成し、介護に活かせる気付きや課題の抽出、支援のあり方を考えたり、整理できるようにする。
→ どういう気持ちになったか・最初に目を向けたところ・全く見ていなかったところ・どんな支援が必要か等々。
- ・ コンテンツの種類：どのようなコンテンツがあるかが重要。自校での学びに活かせる内容を作るなどして、VRのコンテンツを充実させていく必要がある。

■課題

- ・ 購入・レンタルともに高額であることが大きな課題。



2-2 ヒアリング結果【福祉系高等学校】__宮城県迫桜高等学校(宮城県)

実施日時	令和8年2月5日(木) 14:00~15:30
ご対応いただいた先生	総合学科 四釜 千尋 先生

☆教育に活用している ICT 等

- 学習管理アプリケーション
- タブレット(キーボードをセットで使用)
- 動画、●VR
- コミュニケーション支援アプリケーション
- マルチメディアDAISY図書

☆教育に取り入れている 介護テクノロジー

- コミュニケーションロボット

◆所在地:宮城県
◆学校種別:福祉系高等学校
◆定員数:20名(1学年あたり)
◆専任教員:3名
◆設置者:宮城県



Google Classroom を活用した教育活動

- ・Google Classroom を活用して、生徒との情報共有、個別指導等を展開している。

Google Classroom (グーグル クラスルーム)

- ・Google が学校向けに開発した学習管理アプリケーション。
- ・教員と生徒の間で、ファイル、情報などを共有することができる。

学びの特徴と3年間の学びの概要

- ・単位制総合学科の高等学校であり、生徒が1年生前半に「系統」を選択する。
- ・介護福祉士養成課程は「福祉教養系列」の系統となり、介護従事者としての3H(下図)を磨くことを目的に学んでいる。

HEART
思いやり

HEAD
知識

HAND
技術

1年次

■系列選択
系列選択では、福祉教養系列について知ってもらうため、福祉の座学や実技の授業を体験してもらいます。
←この年は上級生から利用者の方の安全・安心、信頼関係の形成にも繋がるリネンの取り扱方やベッドメイキングについて教えてもらいました。

■介護福祉基礎
1年次の後期より、系列の授業が始まります。災害の分野では東日本大震災時を振り返る他、新聞紙で簡易スリッパ(靴下)を作成する中で、災害時に介護従事者としてできることを考え、学んでいきます。

■総合的な探究の時間(ドリカムⅠ:基礎探究)
それぞれの系列にわかれ、探究活動を行います。現在の3年生は、施設入所のイメージについて自分の祖父母から調査を行いました。その後、「寂しさ」をキーワードに施設で暮らす方に少しでも幸せに年を越してもらいたいという思いで、クリスマスカードを作成し、渡しました。

2年次

■介護実習①
学内での実技の学習に加え、通所介護施設や入所施設で24日間、実習をさせていただきます。初めはコミュニケーションに課題を抱えながらも、少しずつ成長していきます。

■新山地区「介護教室」
毎年、新山地区の高齢者の方と交流をさせていただきます。この日のためにレクリエーションを考え、練習を重ねます。実際に喜んでいただいた時、福祉の楽しさを実感します。

■福祉のついで
社会福祉協議会主催のイベントに参加し、学科の紹介や学んだことを披露します。昨年度は介護予防の運動を来場者の皆様と一緒に行いました。

■介護職員初任者研修
2年次の2月に修了試験を行います。実習でお世話になった職員の方や利用者様への感謝の気持ちを込めて、一生懸命勉強に励みます。

■総合的な探究の時間(ドリカムⅡ:キャリア探究)
職場体験(※福祉は校外介護実習)の中で職員の方に「仕事のやりがい」等についてインタビューを行いました。その後、他施設で実習をした生徒と共有し、ドリカムの時間を活用して学びを深めました。

3年次

■介護実習②
入所施設やグループホームで、28日間実習をさせていただきます。介護計画の立案や自分達で考えたレクリエーションを実施します。

■生活支援技術「医療的ケア」
喀痰吸引、経管栄養の方法を学びます。専門的な知識・技術を身に付けることで、利用者の方のニーズに対応できる、介護福祉士を目指し日々努力していきます。

■介護福祉士国家試験
3年次(1月)の受験に向けて、6月から課外授業を実施します。友人と切磋琢磨し、全員合格に向けて過去問題や用語を繰り返し振り返ります。

■総合的な探究の時間(ドリカムⅢ:総合探究)
グループにわかれ、自分達の興味・関心のあることを探究していきます。これまではロコモティブシンドローム予防の動画の作成や、イベントを企画(小学生に福祉を学んでもらうためのゲーム・地域の高齢者の方と学煮会)を行いました。今年度は、日本でデフリンピックが開催されたため、小学生に手話を教えるイベントや施設で暮らす高齢者の寂しさ改善のため、手打ち蕎麦をふるまうイベントを企画・実施しました。

高校生ならではの課題 ～Google Classroomを使用するにあたって～

- ・スマートフォンは使えるが、タブレットは苦手 → ローマ字入力が難しい
- ・自宅にWi-Fiがない、スマートフォンを持っていない → 自宅学習が進まない
- ・説明ができない、書くことや文章作成が苦手 → Google Classroomの利用が難しい



「1年生は中学を卒業してきたばかり」
「ICTが苦手な生徒もいる」
一人ひとりに対応していく視点が必要



各科目におけるICT等活用

生活支援技術

Google Classroomを活用

【実技】

生徒同士で学びあう
繰り返し学ぶ

実技の動画や写真をグループで撮影し、動画を共有して確認や振り返り、レポート作成を行う

■例) ベッドメイキング動画

- ・生徒が利用者役、介護者役、撮影役でグループをつくる。
- ・利用者は寝ている状態、寝ている利用者のことを介護者は体位変換しながらベッドメイキング、シーツ交換をしていく。
- ・一連の流れの動画、三角コーナー・利用者が起きた後のシーツの皺・中心線の位置などの写真を撮る。



■教師からの問いかけ（抜粋）

- ・自分のベッドメイキングの動画を観てどう思うか。
- ・できなかった部分とその理由は何か。
- ・声掛けはできていたか、どんな声掛けが必要だったか。

撮られたくない生徒への配慮
画像を拡散しないなどの
ルールを共有！

■教師は次の授業までにチェックとコメントを生徒に返す

■生徒同士で動画や写真を観て、互いにチェックし、自らの課題に気付く

【講義】

調べる・まとめる・
発表する

課題を提示 → 調べる → スライドをまとめる → 発表する

■例) 身の回りにおけるバリアフリーやユニバーサルデザインを調べてみよう

- ・Google スライドを使用して生徒たちがまとめる → 同時に、複数人が分担して作業可能。
- ・生徒たちの作業や編集が教員から見えるため、進んでいる生徒、できていない生徒がわかる（生徒の進捗状況の把握）。
- ・できていない生徒を把握して、個別に声をかけたり、指導をする。

介護福祉基礎

障害のある方たちが使用する機器等

障害や新しいテクノロジーの理解に

障害のある方たちが利用するテクノロジーの体験を通して、障害を理解する

- 例) 聴覚障害の人たちってどんなコミュニケーションツールがあるのか
- ・指差しや手話などのほか、新しい技術である TalkAIIdなどを体験する。

介護過程

Google Classroom を活用

多様な高齢者像や多様な視点の理解に

介護実習で対応した事例を共有し、他の生徒がアセスメントや介護計画を考える

- 介護実習で対応した介護過程の展開のスライドを作成し、発表、共有する
- ・収集してある情報をもとに、他の生徒がアセスメントや介護計画を考える。
- ↓
- ・様々な事例に触れるとともに、様々な利用者の存在を知る。
- ・他の生徒の意見、アセスメントや介護計画等を通して、自分とは違う視点や考え方を知る。
- ・視野が広がり、自分の特性や課題がみえてくる。

こころとからだの理解

動画、VRを活用

利用者の理解に

動画を観たり、認知症のVRを体験する

- 実際の臓器の動きなどの動画を観る
 - ↓
 - ・苦手な生徒がいる場合は、模型などを使い補完的に対応することもある。
 - ・観る、観ないは本人にまかせている。
 - ・利用者が困っている、苦しんでいるときに、実際に身体では何が起きているのか、どうなっているのかを介護者として知っておくことの大切さの理解につながっている。
-
- 認知症のVRを体験
 - ・実際に体験した事例：利用者としてVRゴーグルをつけた生徒が、デイサービスの送迎車で施設に到着。
 - 「降りてください、大丈夫です」と声を掛けるが降りられない。
 - VRゴーグルをつけた生徒が見ているのは「高い所にいる自分」、怖くて降りられない。
 - 自分たちも、実習で利用者が何か困っているときに「大丈夫ですよ」と言っている。
 - どんな言葉をかけたら、利用者は安心して一歩を踏み出せるのか。
 - 一歩をどうしたら踏み出せるのかを言葉にしてみよう。
 - ・利用者を体験することで利用者の理解につながっている。

Google Classroom を活用し、実習日誌を毎日やり取り

■サポートが必要な生徒がいる

- ・実習巡回に行くと、以下の生徒の様子がよく見られる。
 - ✓不安が大きい
 - ✓自分のしていることが正しいのか・・・悩んでいる
 - ✓実習指導者に相談できていない
 - ✓本人が困りごとに気付いていない
 - ✓実習の目的や目標がずれている
- ・他の授業もあり、頻繁に実習巡回に行くことは難しい。

■生徒と実習日誌を共有したいが、
デジタルの実習日誌は使用していない

- ・高校生には個人情報の管理が難しい。
- ・AIを使って、自分の想いや感想を書かないケースがあるのでは・・・。

時間	実習内容	実習日誌	評価
7:30			
8:00	入居者様との挨拶	挨拶が丁寧で、笑顔が素敵です。	
8:30	食事の準備	食器の洗浄が丁寧で、食卓の片付けもスムーズです。	
9:00	入居者様のケア	入居者様の状態を確認し、必要に応じて対応しています。	
9:30	退席		

■Google Classroom を活用し、実習日誌を毎日やり取りすることを始める

- ・実習日誌を提出する前に、手書きの実習日誌を写真に撮り、Google Classroom で毎日送る。
- ・実習日誌のほかに、自分で今日学んだことを「一言」記載する。
- ・実習中はスマートフォン使用を禁止しているが、施設に提出する前に写真を撮らせてもらうようにしている。

【メリット_教員にとって】

- ・毎日の生徒の様子を知ることができる。
- ・生徒の悩みに気づき、必要に応じて予防的に対応できる。
- ・施設の対応を知ることができ、生徒への助言に結び付ける。

【メリット_生徒にとって】

- ・「いつもつながっているという安心感」がある。
- ・生徒の気づきをほめるコメント、悩みや困っていることに助言、不安が大きい生徒をサポート、間違えていることを指摘するなどのやり取りができる。
- ・手書きを写真で送る。
 - 「文字が書けない」「文章が苦手」である生徒の記録を書く練習につながっている。

時間	実習内容	実習日誌	評価
7:30			
8:00	入居者様との挨拶	挨拶が丁寧で、笑顔が素敵です。	
8:30	食事の準備	食器の洗浄が丁寧で、食卓の片付けもスムーズです。	
9:00	入居者様のケア	入居者様の状態を確認し、必要に応じて対応しています。	
9:30	退席		

【職員・教員・生徒が一体になって実習に取り組める】

- ・生徒の記載内容を巡回時に職員とも共有している。
- ・実習先職員・教員・生徒が一体になって実習に取り組んでいるという実感がある。

2-3 ヒアリング結果【福祉系高等学校】 愛知県立古知野高等学校(愛知県)

実施日時	令和8年1月16日(金) 13:30~15:00
ご対応いただいた先生	福祉科 高木 諒 先生

<p>☆教育に活用している ICT 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ●コミュニケーションツール ●授業支援アプリケーション ●介護記録・音声入力アプリケーション 	<p>☆教育に取り入れている 介護テクノロジー</p> <ul style="list-style-type: none"> ●見守りセンサー・システム ●介護記録・情報共有支援 ●体圧測定・歩行分析 	<ul style="list-style-type: none"> ◆所在地：愛知県 ◆学校種別：福祉系高等学校 ◆定員数：40名(1学年あたり) ◆専任教員：5名 ◆設置者：愛知県
--	---	---



ICT活用と介護テクノロジー教育を支える2つの取組

科学的裏付けに基づく介護

- ・学習指導要領では「福祉用具や介護ロボットを含む福祉機器に関する学習の充実」が明記されており、「意義や活用を扱うこと」と示されている。
- ・単に“知る”段階から“使いこなす”段階へ学びを深め、得られたデータを分析し、目の前の対象者の暮らしをどう良くするかを考える学びへと発展させている。
- ・歩行データ、睡眠データ、体圧分布などを多角的に読み解き、利用者の状態を根拠をもって判断できる力を育成している。

課題解決型学習

- ・生徒同士がチームを組み、「認知症の方や家族が孤立しない場づくり」「子どもたちの共に生きる力の育成」「介護職の魅力が伝わらない状況の変革」「高齢者が楽しみながら健康を維持できるコンテンツ開発」といった地域の福祉課題を設定する。
- ・こうした課題を出発点に、生徒たちはPBLアドバイザー[※]の助言を受けながら、自らの問いを深め、解決策を“地域に寄り添う形”で検討していく。

※Project Based Learningの学習を実施する際に、生徒に助言やサポートをする。

介護福祉教育におけるデジタル技術活用 -教育・授業の展開方法-

Microsoft Teams

- ・共同編集機能を活用し、発表資料を作成している。
- ・介護実習の個人票や作文も課題機能で作成・添削し、提出管理を効率化している。
- ・教員と生徒がアカウントを共有することで、円滑なコミュニケーションと情報共有が実現している。

ロイロノート・スクール

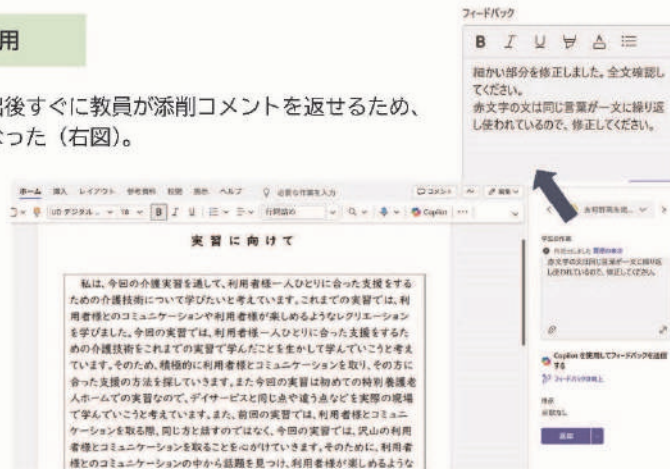
- ・授業内での意見共有や提出物の収集、発表活動を行う。
- ・写真や動画、音声など多様な形式で記録・提出が可能であり、生徒は自分の考えを視覚的に整理しやすい。
- ・提出されたカードを即時に共有・比較でき、双方向性の高い授業を実現している。

CAREKARTE ・ハナスト

- ・令和7年9月から介護記録ソフト CAREKARTE(ケアカルテ)を授業に導入し、記録方法の習得と情報活用力を育成している。
- ・科目「生活支援技術」では、音声入力アプリケーション「ハナスト」と連動させ、記録の練習を行う。

Microsoft Teams の活用

- ・介護実習の個人票や作文は、提出後すぐに教員が添削コメントを返せるため、生徒は即座に修正できるようになった（右図）。
- ・生徒は自宅や放課後でも同時に発表資料を編集できるようになり、離れた場所からでも意見交換や修正が可能。
- ・発表準備では担当ごとの作業進捗が確認でき、遅れがある部分を他のメンバーが補うなど、チーム全体で完成度を高める動きが生まれた。



ロイロノート・スクールの活用



- ・生徒は授業中に撮影した介護技術の写真や動画を即座に提出し、教員がその場で助言や修正指示を行える。
- ・意見共有では、生徒全員の考えがカードとして瞬時に一覧表示されるため、類似した意見や異なる視点を比較しながら議論を深めることができた。
- ・発表活動では、提出されたカードを組み合わせさせてスライド化できるため、短時間で視覚的に分かりやすい発表資料を作成できるようになった。

CAREKARTE・ハナストの活用

- ・介護記録ソフト CAREKARTE（ケアカルテ）を授業に導入し、記録方法の習得と情報活用力を育成している。
- ・科目「生活支援技術」では、音声入力アプリケーション「ハナスト」と連動させ、記録の練習を行う。



介護テクノロジーに関する介護福祉教育【教育・授業の内容】

ベッドセンサー

- ・利用者の呼吸、体動、睡眠状態を非接触で測定し、データとして記録できる。
- ・睡眠の質や生活リズムを分析し、必要な支援やケアの方向性を検討する演習を行う。
- ・介護実習において利用者のアセスメントに活用することを検討しており、具体的かつ根拠に基づいたケアの立案につなげる。

体圧測定・歩行分析

- ・体圧測定機器は、車いすに敷いて使用し、着座時の圧力分布を可視化することで、褥瘡予防や適切なクッション調整、ポジショニングの工夫を学ぶ教材として活用している。
- ・歩行分析機器は、利用者の歩幅や重心移動、バランス状態を数値化し、転倒予防や歩行介助方法の検討に加え、利用者の状態に適した福祉用具の選定にも活用している。

CAREKARTE

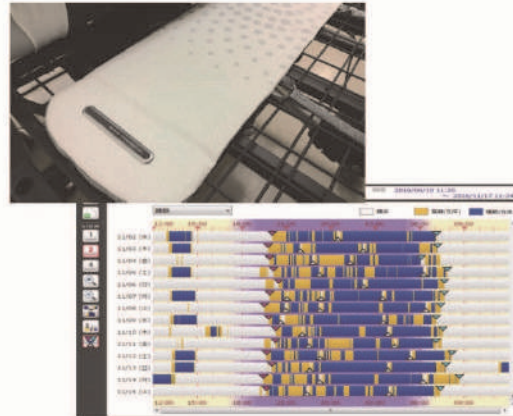
- ・介護施設・事業所では記録や各種センサーにより多くの情報が日々蓄積されるが、重要なのはそれらを単に保存することではない。
- ・蓄積されたケアデータを分析・解釈し、根拠に基づいたケアの改善や的確な判断に結びつける力を養うことが、これからの介護福祉士養成教育において不可欠である。

ベッドセンサー

- ・眠りSCANの活用により、生徒は利用者の睡眠状態や生活リズムを客観的データとして捉え、支援内容を検討する力を養っている。
- ・授業では、取得したデータを用いてアセスメントを行い、より具体的かつ根拠に基づいた介護計画の立案につなげている。
- ・ケアデータの分析方法や活用の視点については、マイスターハイスクール※の一環として、同朋大学の先生方から年間20時間にわたって専門的な座学を実施しており、単なる機器操作にとどまらず、データの読み取りと活用を体系的に学んでいる。

※専門高校と地域産業が連携し、次世代の職業人材を育成する文部科学省の事業。

大学と連携
(大学教員のリレー講義)



体圧測定・歩行分析

- ・体圧測定機器の活用により、生徒は着座時の圧力分布を視覚的に理解し、褥瘡予防の重要性や適切なクッション選定・ポジショニングの工夫を具体的に学んでいる。
- ・歩行分析機器の活用では、歩幅や重心移動、バランス状態を数値で把握することで、転倒予防や歩行介助方法の改善につなげている。
- ・分析結果を基に利用者に適した福祉用具を選定する演習を行うことで、データを根拠にした介護方法や用具選びの力を養っている。

CAREKARTE

- ・ CAREKARTE (ケアカルテ) を活用する前提として、介護施設の施設長に「科学的介護」の講義を依頼している。
- ・ CAREKARTE の活用により、生徒は正確かつ簡潔に情報を記録する技能を身につけることができる。
- ・ 入力した記録を時系列で整理・比較することで、利用者の状態変化を客観的に把握し、根拠に基づいた判断を行う力が養われる。
- ・ 実習や演習で得られた記録データを共有・分析する過程を通じて、多職種連携に必要な情報伝達の方法や視点を学ぶことができる。
- ・ これらは、介護福祉士として必要不可欠な記録力・分析力・情報共有力の育成につながるものである。

介護施設と連携



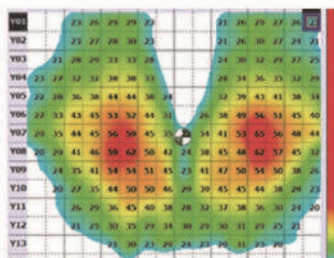
【生徒の感想】

科学的介護や業務改善につながる視点が生まれた



- ・ ベッドセンサーでは、アラームが鳴ってから利用者さんのもとへ行くと介護者の負担が大きいため、まずはその人の特性を理解するためにセンサーを使用し、(アセスメントのために活用)そこから得た情報を解析、分析し、アラームが鳴る前に利用者さんの対応ができるようにしたい。
- ・ そのことが結果的に介護者の負担を減らすことになる。
- ・ 例えば、夜間毎回同じ時間にアラームが鳴る方がいたら、毎回なぜ起きてしまうのかを分析し、アラームが鳴る前にその方の元へ行き、事前に対応することが良いと思う。

■生徒の学びが、介護実習での提案に



- ・ 体圧分布の学習は3年次の介護実習でも活用されていた。
- ・ 車いすで食事をしていただいた利用者から「臀部が痛い」との訴えがあった場面。
↓
- ・ 生徒は足台に足を置いたままの姿勢では臀部に圧が集中する可能性が高いと考え、「いすに移り替えて姿勢を整えた方が痛みが軽減するのではないか」と職員に提案した。

2-4 ヒアリング結果【専門学校】 東北保健医療専門学校（宮城県）

実施日時	令和8年2月6日（金）10：00～11：30
ご対応いただいた先生	介護福祉科 原田 由美子 先生 小巖 貴美子 先生


☆教育に活用している ICT 等

- デジタル教科書
- コミュニケーションツール
- 教務システム
- ウェブフォーム作成ツール
- タブレット
- 音声入力アプリケーション

☆教育に取り入れている 介護テクノロジー

- 移乗・移動支援
- 排泄支援
- 見守りセンサー・システム
- 介護記録・情報共有支援

◆所在地：宮城県
◆学校種別：専門学校
◆定員数：20名(1学年あたり)
◆専任教員：3名
◆設置者：学校法人日本コンピュータ学園



ICT を活用した学びの提供
Microsoft Teams & 教務システム

・2020年4月から、Microsoft Teams を使った学びの環境を整備

Microsoft Teams

シラバス
時間割
の共有

授業資料
動画
の共有

課題の提示
と
提出の管理

学内の
教員間の
チャット

学科内の教
員と学生間
のチャット

実習資料の
添削、提出

授業アンケート
→Google フォーム
URL

学生の
資料作成

実習中の
連絡・相談

■導入・活用のポイント

- ・導入のためのICT委員会を教員で立ちあげてスタート。
- ・Microsoftのマニュアルを見ながら試行錯誤。
- ・スタート時は教員向けの研修会も実施。
- ・非常勤の先生には、無理に勧めず、やれる範囲でお願いしている。

・授業資料や実習資料（日誌、介護過程用紙）に関しては、学生にルールを周知・徹底。

・2024年4月から、教務システム（infoClipper）を導入し、教務管理環境を整備

infoClipper

出欠管理

成績管理

保護者への
成績通知
※今後実施

■導入・活用のポイント

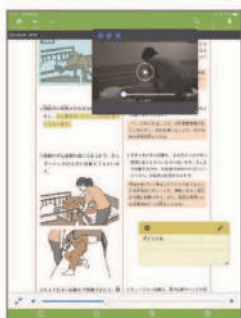
- ・出席を入力している、非常勤講師の授業の分は担任が入力。
- ・学生はポータルサイトから、出席率や成績を自分のスマートフォンで確認できる。

ICT を活用した学びの提供 デジタル教科書

i Padを一人1台提供

～タブレットでも大丈夫?～

- ・学生にとってはパソコンより身近。
- ・学生によっては入力用にキーボードを購入して使っている（学生に任せている）。
- ・1年次は貸与、2年次は譲渡。
- ・タブレットの方がコスト的に安価。



教員にもメリット

- ・教科書がデジタル化されて、資料作成がしやすくなりました

デジタル教科書[※]を採用

～デジタル教科書は便利～

- ・いつでもどこでも読むことが可能で主体的学びにつながる。
- ・ほとんどの科目の教科書を持ち運ぶことができる（紙面の資料も併用）。
- ・重くない。
- ・メモを入れることもできる。
- ・アンダーラインを引ける。
- ・目次から行きたい見出しに飛べる。
- ・検索ができる。
- ・拡大表示ができる。
- ・忘れ物が少なくなった。

※中央法規出版株式会社

■学生のメリット

- ・課題が文字で明記される。
→留学生も確認・認識しやすい。
- ・難しい漢字を書けない留学生等も入力により記載ができる。

■課題

- ・ICTに詳しい教員がいないと進まない可能性。
- ・導入・活用を推進する教員に負担がかかる。

■教員のメリット

- ・レポート等の提出物が読みやすい。
- ・学生との修正のやり取りをしやすい。
- ・レポートの提出管理などについて、業務負担が軽減。
- ・導入時は初期入力が大変だが、次年度以降は作業負担が総じて軽減。

学生に対しては使用のルールを指導 → 個人情報保護の教育につなげる

■共有資料

- ・外部の人にコピーして渡したり、ファイル譲渡はしない。

■プリントする場合

- ・自宅のプリンターでプリント。
- ・コンビニではプリントしない。

■介護実習におけるやりとり

- ・実習資料の入力は自宅が実習先のみ。電車やバスでの入力はしない。
- ・利用者のお名前、出身県はイニシャルではなくアルファベット。

■学生のメリット

- ・自分の出席状況や成績を主体的に確認できる。

■教員のメリット

- ・全体を俯瞰して管理できる。
- ・間違いが少なくなることで効率化が図られる。
- ・ペーパーレス化。

各科目におけるICT活用と介護テクノロジー教育

生活支援技術（1年前期後期）

【介護テクノロジー教育】

- ・企業のショールームに行き、見守りシステム、排泄や排尿支援の介護テクノロジーを見学（眠りSCAN等）。
- ・企業に機器を持ち込んでいただき、授業の中で体験（ROBOHELPER SASUKE）。
- ・学校で購入して体験（Hug）。

【工夫】

- ・自分で見て、触って、使う体験型の授業。
- ・生活とは何かということから始まり、生活の流れの中に、介護テクノロジーを組み込んでいく授業展開を大切にしている。

【課題】

- ・企業の継続的な協力が難しい、調整に時間がかかる。
- ・レンタルや購入ができず、見学で終わることがある。

コミュニケーション技術（2年後期）

【介護テクノロジー教育】

- ・企業の協力を得て、介護ICTの講義をしていたいただき、音声入力アプリケーション「ハナスト」を体験。

【工夫】

- ・介護実習先の職員にも講義に参加を促し、介護テクノロジーの紹介と体験をしていただいた。
- ・学生がどのようなことを学んでいるかを知っていただく機会につなげ、学生と施設職員が学びを共有した。

【課題】

- ・企業の継続的協力が難しく、調整に時間がかかる。
- ・協力が得られない場合は、ウェブサイトから様々なソフトを紹介するにとどまる。



手書きの字の上手下手に左右されずに、介護過程の内容を評価できると実習指導者にも好評

介護実習（1年～2年）

【ICT活用】

- ・Microsoft Teams を活用して、介護実習の添削や連絡をサポート(下図)。

- ①実習日誌添削、②介護過程用紙の添削
- ③教員と学生間の報告、連絡、相談

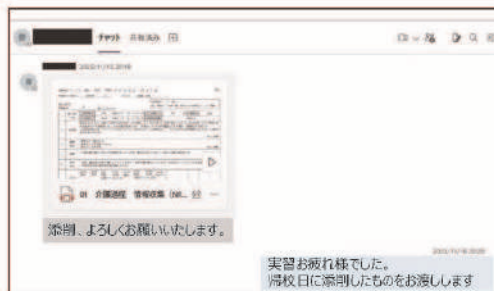
- ・介護実習の実習日誌(右図)は、iPad で入力し自宅のプリンターで印刷し翌朝提出。

【工夫】

- ・カンファレンス前日を帰校日に設定し、介護過程用紙は学校で印刷し、学生に渡す。施設にはメール送信。
- ・使用のルール(前ページ掲載)の指導を徹底。

【効果】

- ・介護実習の実習日誌(右図)、介護過程用紙作成をデジタル化することにより、体験学習に重点を置くことができています。
- ・手書きの上手下手に左右されず、学生・教員・実習先のストレスが少ない。



介護総合演習（1年～2年）

【ICT活用】

- ・Microsoft Teams の課題機能を使用し、実習にかかる全ての資料提出を管理。
- ・介護実習後に行う「実習報告会」の資料共有及び発表に関する評価アンケートの実施(右図)。

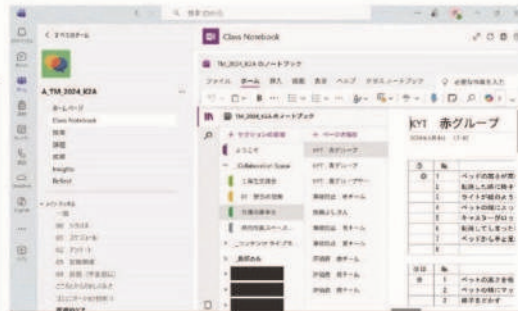
介護の基本（2年前期）

【ICT活用】

- ・Microsoft Teams の Class Notebook 機能(右図)を使用し、チームマネジメントを意識したグループワーク、共同作業を展開。

【介護テクノロジー教育】

- ・介護施設・事業所の将来を考える機会として、東北大学の青葉山リハビリラボに行き、介護ロボットの開発、実証、普及のプロジェクトを見学(2023年のみ)。



人間関係とコミュニケーション（2年後期）

【介護テクノロジー教育】

- ・介護ロボットの導入がなぜ必要なのか、職場環境等改善要件、生産性向上等について、「リーダーを育成する」という視点を踏まえて講義。

選択科目：情報処理（2年後期）

【ICT活用】

- ・介護施設・事業所で使用されることを想定して、タブレットではなくパソコンを使用した入力を体験。
- ・科学的介護情報システム（L I F E）は、その目的、仕組みなどを、厚生労働省の資料、L I F Eに入るウェブのメニュー画面の写真、排泄に関する入力項目などを例に紹介している。

【介護テクノロジー教育】

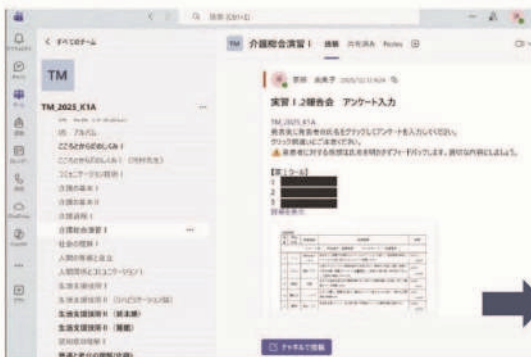
- ・『スマート介護士』のテキストを用いて、多種多様な介護テクノロジーの紹介、具体的な例等紹介をしている。



【課題】

- ・学校の中でL I F Eの体験ができない。
- ・L I F Eの学習用のプロトタイプ版などがあればイメージしやすい。

実習記録		
11月19日(水) 大東(晴) 実習時間 8:30~17:30 1年 大東		
【本日の目標】(生活支援技術・介護過程・現場の理解などから2つ以上) プライバシーを配慮しながら、オムツ交換の実践ができるようにする。担当利用者とのコミュニケーション取り、継続について情報収集する。		
時間	場所	本日の目標達成状況
8:30~9:00	待機	今日は、プライバシーに配慮しながらオムツ交換の実践ができるようにすること。そして担当利用者とのコミュニケーションを通して継続状況について情報収集することを目指して実践した。オムツ交換では、先輩職員の手伝いを受けながら手順をつつと確認し、声かけや排泄調整の方法を学び、安全と信頼に配慮しながら実践して取り組むことができた。特に、利用者が不快感を抱かないようオムツを履く位置や、動作の前後に必ず質問することを実践できたのが良かった。また、担当利用者とのコミュニケーションでは、日中の昼食や夜間の覚醒状況について会談の中で情報を得ることができ、継続しやすい状態につながった。利用者が話しやすい雰囲気づくりを実践したことでも、自然なやり取りの中から情報を引き出すことができた。本人が履いたことを指導者に確認してもらって合わない情報もあった。以上より、本日の目標は概ね達成できたと感じている。
9:00~9:30	実習参加	
9:30~10:15	パッド交換実習、トイレ一般介助実習	
10:15~10:30	利用者とのコミュニケーション	
10:30~10:45	パッド交換実習	
10:45~11:30	担当利用者とのコミュニケーション	
11:30~12:00	担当利用者との話し合い、食事配膳、下着	
12:00~12:30	休憩	
13:00~13:30	担当利用者とのコミュニケーション	
13:30~14:00	運動実習	
14:00~14:30	担当利用者とのコミュニケーション	
14:30~15:00	実習参加	
15:00~16:30	実習参加	
16:30~17:15	記録	
17:15~17:30	振り返り実践	
本日の実習の振り返り		
本日の実習では、午前中のコミュニケーションやパッド交換の実習に加え、午後の運動会への参加が特に印象に残った。実際に利用者の皆さんが体を動かす、競技に取り組む姿を近くで見ることができ、普段とは違う雰囲気や活動を感じることができた。運動会の中では、利用者が笑顔で職員や先輩の人と関わる場面が多く見られ、楽しみながら参加されている様子が見てきた。また、声援を送ったり、手を添えてサポートしたりすることで、自分自身も利用者との距離が縮まっていく感覚があった。特に、音階はあまり音楽の変化が感じられない利用者が歌歌中に突っ込んだ場面が印象的であり、どうしたら歌歌を覚えることが介護職の大きなやりがいにつながるのを感じた。また、レクリエーションの場が、利用者の意欲や社会参加の機会を広げる大切な役割を持っていることも実感した。さらに、運動会を支える職員の声かけや安全への配慮を観察し、利用者一人ひとりの状態を把握しながら活動をサポートする姿勢は非常に学びが多かった。自分も将来、利用者の笑顔を引き出せるような関わりができる介護職になりたいと強く感じた一日であった。		
次の目標(生活支援技術・介護過程・現場の理解などから2つ以上) 指導者のもとで、食事介助が実践する。担当利用者の起居動作について職員と観察から情報収集する。		
指導者コメント		
指導者氏名: ※日誌は翌日の朝に提出(運動時は次の実習日に提出)		



No.	氏名	性別	学年	実習科目	実習時間	実習場所	実習内容	実習結果	実習感想	実習評価	実習評価理由	備考
1		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
2		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	104
3		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
4		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
5		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
6		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
7		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
8		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
9		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
10		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
11		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
12		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
13		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
14		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
15		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
16		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
17		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
18		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
19		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
20		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
21		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
22		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
23		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
24		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
25		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
26		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
27		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
28		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
29		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
30		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
31		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
32		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
33		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
34		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
35		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
36		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
37		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
38		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
39		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
40		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
41		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
42		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
43		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
44		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
45		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
46		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
47		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
48		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
49		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	
50		男	1	介護	8:30~17:30	大東	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	実習参加	

2-5 ヒアリング結果【専門学校】 東京福祉専門学校（東京都）

実施日時	令和8年1月23日（金）16：00～17：30
ご対応いただいた先生等	介護福祉科 高橋 利明 先生 ユニカミノルタ株式会社 関 泰彦 様 古川 寛 様



科目「介護ICT」のカリキュラム

2年間の科目全体の到達目標（最終ゴール）

🎯 デジタル中核人材×介護福祉士としての到達目標（2年後）

1. 介護福祉士としての専門性を、ICT・介護ロボットで拡張できる
 - ・ ケアの質・安全・自立支援と、テクノロジーの関係を説明できる。
 - ・ 「楽をするため」ではなく「ケアを良くするため」のICT活用が語れる。
2. 現場の業務を“構造的に”見て、改善点を見つけられる
 - ・ 業務を分解し、「人がやるべき仕事/テクノロジーで代替できる仕事」を区別できる。
 - ・ 生産性向上=人減らしではない、と論理的に説明できる。
3. ICT・介護ロボットを“使う側”ではなく“選び・つなぎ・回す側”になれる
 - ・ 見守り、記録、インカム、ナースコール、シフト管理アプリ、連携ツールの役割を理解している。
 - ・ ツール同士の連携イメージを描ける（情報がどう流れるか）。
4. 小さな改善プロジェクトを現場で回せる
 - ・ 課題設定 → 試行 → 振り返り → 改善 のサイクルを体験している。
 - ・ チームでの合意形成・説明ができる。
5. 「介護×テクノロジー」を語る人材として、職場で一目置かれる
 - ・ 新人でも「それ、ICTでこう変えられますよ」と言える。
 - ・ デジタルが苦手な職員に橋渡しができる。

※東京福祉専門学校 × 善光総合研究所『介護ICT』について

各期ごとのテーマと到達目標

■1年 前期

【テーマ】介護施設・事業所で使われるICT・介護ロボットに触れ、基礎的な役割を理解する。

■1年 後期

【テーマ】介護業務を構造的に捉え、ICTが活きる場面を理解する。

■2年 前期

【テーマ】ICT介護ロボットを組み合わせ、現場で使いこなす視点を身につける。

■2年 後期

【テーマ】デジタル中核人材の入口として、現場を動かす介護福祉士になる。

*とにかく触れてみる ➡ なぜ?を考える
*国の制度との連動



2年間に学生がふれるICT・介護テクノロジーの例



介護テクノロジー教育1 社会福祉法人善光会 による授業 ～介護施設・事業所での活用をリアルに体験～

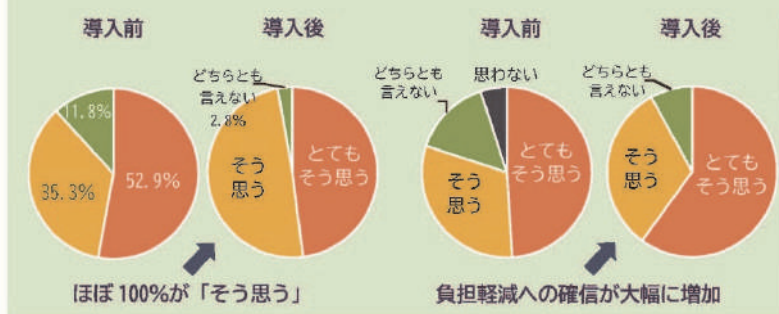
- ・介護施設・事業所で活用されている介護テクノロジーを授業で展開する。
- ・現場で実際に活用されている介護テクノロジーに触れ、使ってみる。
- ・活用イメージがわき、興味が刺激される → 就職希望へもつながる。
- ・学んだことを活かせる職場への就職が叶う。



■介護テクノロジーを学んだ学生の変化

定量的成果①：懐疑から確信へ

利用者の生活を良くするのに役立つか？ 介護職員の負担を減らすと思うか？



定量的成果②：
95%が使いたいと回答

就職したら
ロボットを使いたい？

95%

※修了時アンケート結果

「知らない」から不安になる。
「知る」ことで、それは強力な武器になる。

介護テクノロジー教育2 開発をした企業等に出張講義を依頼

- ・授業に取り入れている介護テクノロジーについては、つながりがある企業等に可能な限り来校していただき、活用の視点、使用方法、メリットや課題等を講義していただいている。

「HitomeQ ケアサポート」コニカミノルタ株式会社による授業プログラム

R7年度講義予定		KONICA MINOLTA			
<p>講義は、全5回になります。</p> <p>講義は毎回、座学とグループワークの構成です。</p> <p>最終回は、特別プログラムを用意しています。(お楽しみに！)</p>					
座学	5/8 科学的介護とは	7/17 HitomeQの体験	7/24 HitomeQで出来る事 (データ収集について)	10/16 デジタル介護過程 (データを活用した介護)	10/23 デジタル介護過程 (データを活用した介護)
	<ul style="list-style-type: none"> ・厚労省情報活用(科学的介護、LIFE、PDCAサイクルなど) ・タイムスタディ(業務分析、定量評価) ・パッケージ導入モデル(課題の可視化) 	<ul style="list-style-type: none"> ・HitomeQとは... ・コンセプト動画 ・紙資料 ・ユーザー活用事例動画 	<ul style="list-style-type: none"> ・HitomeQとは(おさらい) ・原理説明 ・各種データ紹介 ・睡眠 ・介護情報 ・行動パターン/エリアなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的介護(おさらい) ・データの紹介(おさらい) 	<ul style="list-style-type: none"> ・最終回(グループワーク)映像から事故報告書を書く ①事実を把握する ②原因を分析する ③再発防止策を決める ④実行計画を立てる ⑤進捗を確認する
時間	30分	30分	30分	30分	
グループワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルソナ(高齢者)を読み取り、9分野13項目から介護テックを選ぶ ①なぜ選ぶ、②どのように使うか? ・業務課題の整理と七つの打ち手から業務課題を構造化(可視化)する 	<ul style="list-style-type: none"> ・実演 ・センサ検知/スマホ通知 ・ナースコール ・映像見て声かけ ・転倒映像(ドラレコ) ・ケアルベ紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲスト講演 ・HitomeQユーザー活用談義 ・現場職員が語るこれからの介護 ・ペルソナを参考にHitomeQの通知設定を考える ・ペルソナ+通知情報から訪室頻を考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・データを読み解き、あなたならどのような介護をしますか? <データ事例> ・フロア別ナースコール数 ・睡眠状況と介護記録など 	
時間	60分	60分	20分×3人=60分	30分×2回=60分	90分

コニカミノルタ株式会社による5回の授業

- ・前提となる「科学的介護」の理解を皮切りに、「HitomeQケアサポート」の体験やデータの活用、デジタル介護過程[®]などを講義。
- ・実際に介護事業所にて導入定着支援を担当する社員による講義(実体験に基づく活きた講義)。
- ・近年、介護現場の業務改善が着目されている。介護福祉士を目指す学生に業界動向を踏まえ、介護テクノロジー活用による業務改善を講義。

コニカミノルタ株式会社さんからのコメント

弊社は、「お客様の見たい」を叶える企業として、2016年に介護業務に見える化するため、「HitomeQケアサポート」を上市し、今日まで多くの介護事業所にてご活用いただいています。

映像技術やICT機器を活用することにより、介護業務に見える化することができてい


ます。介護現場での介護テクノロジー活用は、当たり前になりつつあります。一方、介護人材不足は年々深刻化しており、介護福祉士養成施設での介護テクノロジー教育は重要性を増すなかで、難しさを感じています。

弊社は、介護現場の映像やデータの視点から、介護福祉士を目指す方々と一緒に介護の未来をつくっていきたくと考えています。

2-6 ヒアリング結果【短期大学】 富山短期大学（富山県）

実施日時	令和8年1月21日（水）10：00～11：30
ご対応いただいた先生	健康福祉学科 奥野 勝太 先生

<p>☆教育に活用している ICT 等</p> <ul style="list-style-type: none"> ○学習管理システム ○動画 	<p>☆教育に取り入れている介護テクノロジー</p> <ul style="list-style-type: none"> ●移乗・移動支援 ●排泄支援 ●見守りセンサー・システム ●コミュニケーションロボット ●入浴支援 ●介護記録・情報共有支援 ●業務支援 ●機能訓練支援 ●食事・栄養管理支援 	<p>◆所在地：富山県</p> <p>◆学校種別：短期大学</p> <p>◆定員数：20名（1学年あたり）</p> <p>◆専任教員：7名</p> <p>◆設置者：学校法人富山国際学園</p>
--	--	--



介護テクノロジーを教育に取り込んだ背景とねらい

・学科の目指す人物像「人々の健康と幸せ well-being を支える人材の育成」が出发点。

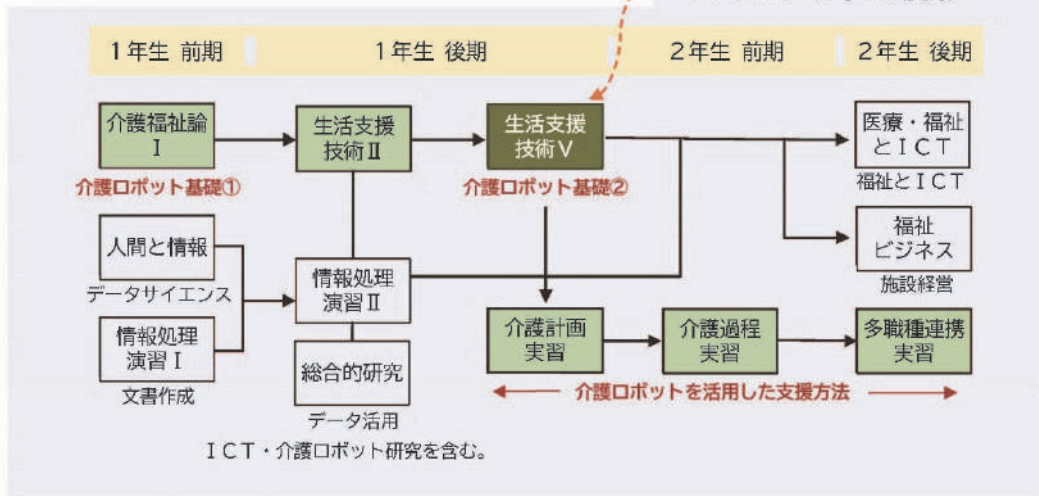


・介護ロボットやICTに触れ、価値を理解し、仕事で推進して行ける人材を育てる。

【カリキュラム構成のポイント】

- ・（下図参照）1年生で「**介護ロボットの基礎①②**」を学び、1年生後期から始まる介護実習で「**介護ロボットを活用した支援方法**」を学ぶ。
- ・生活支援技術Ⅴ（次ページ参照）において、地域の機関と連携した介護テクノロジーの学びを展開。

介護テクノロジーに関わるカリキュラム構成(全体)



地域の介護テクノロジー推進機関・介護施設との連携による授業

生活支援技術V（1年次）

- 授業目標**
- ・介護ロボット・ICTを活用できる基礎的能力を習得する。
 - ・介護ロボット・ICT活用の重要性を利用者・介護職員・組織の視点から理解する。
- 学びの柱**
- ①介護ロボットについて最新の国の施策や最先端の介護ロボットを知る。
 - ②複数の介護ロボット・ICT機器の使用方法を習得する。
 - ③介護ロボット・ICT機器の活用による効果を理解する。
 - ④介護ロボット・ICT機器の活用による利用者の思いを理解する。
 - ⑤介護ロボット・ICT機器の活用による組織のあり方を理解する。

■授業プログラム

回	授業プログラム	
第1～6回	【学 内】介護ロボット・ICTの基礎知識と操作体験	
第7～8回	【学外授業】利用者のQOLと自立支援に向けた支援	とやま介護テクノロジー普及・推進センター
第9～12回	【学 内】リスクマネジメントと組織導入の課題	
第13～14回	【学外授業】介護ロボット・ICTの実践的活用	ささづ苑かすが
第15回	【学 内】まとめ	

■学外授業 実施までの流れ：早めの準備(日程調整)と丁寧な打合せがポイント

【7か月前】企画・手配

介護テクノロジー推進センター、介護施設との打合せ開始。
目的や内容の説明、日時・時間割の調整、移動のためのパスの手配。

【2か月前】事前打ち合わせ

機器の選定と時間配分の決定、学生人数と履修状況の共有。

【実施・振り返り】

講師同行での実施（約3時間）、レポート・アンケート・意見交換。

介護テクノロジーに関する連携先を探すポイント

情報の収集先

- ・実習中に、見学や情報交換。
- ・プラットフォーム事業の拠点に相談。
- ・介護テクノロジー開発企業との情報交換。
- ・教員間の意見交換。
- ・見本市（国際福祉機器展、CareTEX）での情報交換。

連携のポイント

- ・多数のテクノロジー機器が完備されているか。
- ・導入実績・効果があるか。
- ・実習や卒業生など、「つながり」があるか。

【学外授業】 とやま介護テクノロジー普及・推進センター

■とやま介護テクノロジー普及・推進センターの概要

【設 置】	【目 的】	【主な機能】
令和5年4月 富山県	介護ロボットやICTの 活用を支援する拠点	介護テクノロジーの展示、介護事業所・開発 企業・一般県民からの相談対応、体験講座・ 研修の実施、伴走支援等

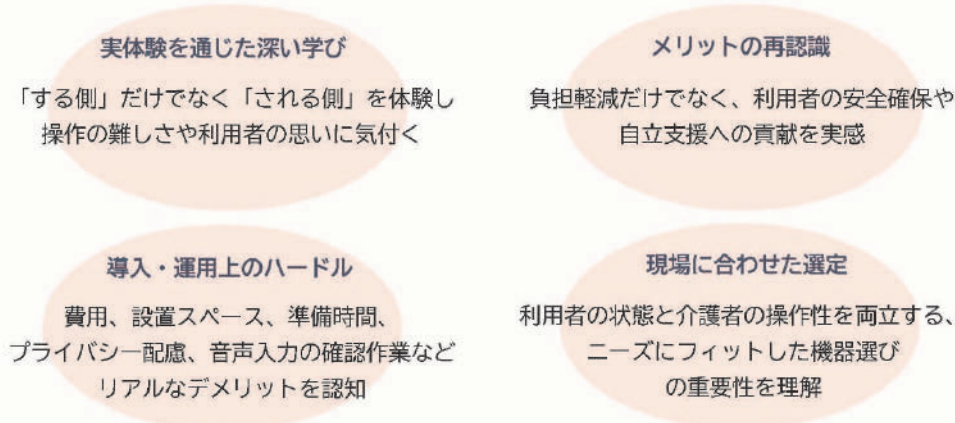
■学びのテーマ：「触れて、見て、感じる」多角的な学び。

■授業の目的：複数のテクノロジー機器を知り、疑似体験を通じて利用者の思いを知る。

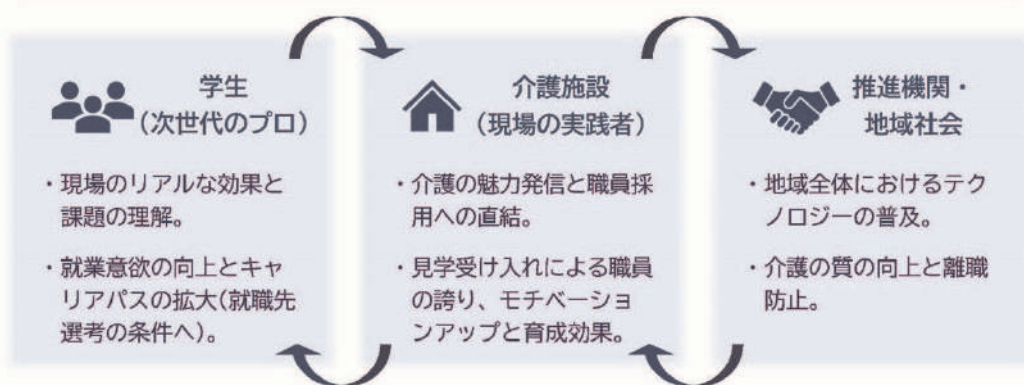
■工夫点：

- ・最新かつ介護施設導入率の高い機器を厳選。
- ・小グループ編成(4～5人)で十分な体験時間を確保し、率直な意見交換を促進。

■効果：



地域の介護テクノロジー推進機関・介護施設との連携がもたらす「Win-Win-Win」の連鎖



【学外授業】 ささづ苑かすが（地域密着型特別養護老人ホーム）

■ささづ苑かすが（社会福祉法人おおさわの福祉会）が導入している介護テクノロジー

【移乗支援】	【記録・音声】	【見守り】	【業務効率化】	【離床アシスト】
HUG スカイリフト 床走行式リフト	CAREKARTE ハナスト	眠りSCAN	DocuWorks	リショナーPlus

■学びのテーマ：「現場で生きる」マネジメントの学び。

■授業の目的：

- ・これまで触れてきたものが実際はどう使われているか。
- ・どのような効果があったか。
- ・マネジメントの観点から、どのように普及、定着しているか。



■効果：

「効率化」の真の目的を理解
単に楽をすることではない、
生み出された時間を「利用者と向き合う時間」
や「安全・安心の確保」に充てるためのもの

テクノロジーと人の温かさの融合が
質の高い介護につながる
機械に全てを任せるのではない、「人の判断と
コミュニケーション」が加わって初めて
質の高い介護が成立

丁寧なプロセスと環境づくりが
活用の定着につながる
職員の苦手意識をなくし定着させるため、
勉強会やスモールスタートとして導入する
「マネジメントの視点」が重要



連携による教育を進めるためのポイント

■連携先との日程調整

- ・学校のカリキュラムと推進機関や介護施設とのスケジュールを合わせるために、早めの準備が必要。

■移動手段や予算の確保

- ・遠方に行く場合の移動手段の確保、予算やコストとの兼ね合い。

■授業の時間配分

- ・授業プログラムの流れと連携先での体験や見学のタイミングを合わせる。



2-7 ヒアリング結果【四年制大学】__仙台大学（宮城県）

実施日時	令和8年1月29日（木）14：00～15：30
ご対応いただいた先生	体育学部健康福祉学科 堀江 竜弥 先生 後藤 満枝 先生 福田 伸雄 先生

☆教育に活用している ICT 等

- 学習管理アプリケーション
- 実習学習支援システム
- 動画(自作等)
- VR

☆教育に取り入れている介護テクノロジー

- 移乗・移動支援
- コミュニケーションロボット
- 機能訓練支援

◆所在地：宮城県
◆学校種別：四年制大学
◆定員数：80名（1学年あたり）
◆専任教員：9名
◆設置者：学校法人朴沢学園

全ての科目で GoogleClassroom を活用

活用例(抜粋)

- ・資料の共有（配布忘れがない）
- ・動画の共有
- ・授業予定や予習内容等の案内
- ・授業の振り返りや課題の提示と提出管理
- ・学生へのフィードバック
- ・欠席をした学生への個別対応（欠席分の動画や資料を共有）
- ・Meetを使ったやりとり(欠席連絡等)
- ・Googleフォームの活用
小テスト
国家試験対策模擬テスト 等

教員のメリット

- ・ペーパーレス化が進む。
- ・学生とタイムリーなやりとりができる。
- ・データを蓄積して活用できる。
- ・日々の課題を通して、学生の学びの変化を把握できる(学生の理解につながる)。
- ・複数の教員が協働で作業できる。
→複数の教員が担当するオムニバスの授業などにおいて効果的。

アセスメントシートの作成 ～介護過程～

■アセスメントシートの作成

- ・教員がスプレッドシートでフォーマットを作成
- ↓
- ・Googleドキュメントに保存
- ↓
- ・配信し、学生は授業の中で入力
- ↓
- ・教員は個々に確認をし、学生とやり取り

学生のメリット

- ・複数の学生で協働作業ができる。
- ・資料等が共有でき、繰り返しの学びができる。等

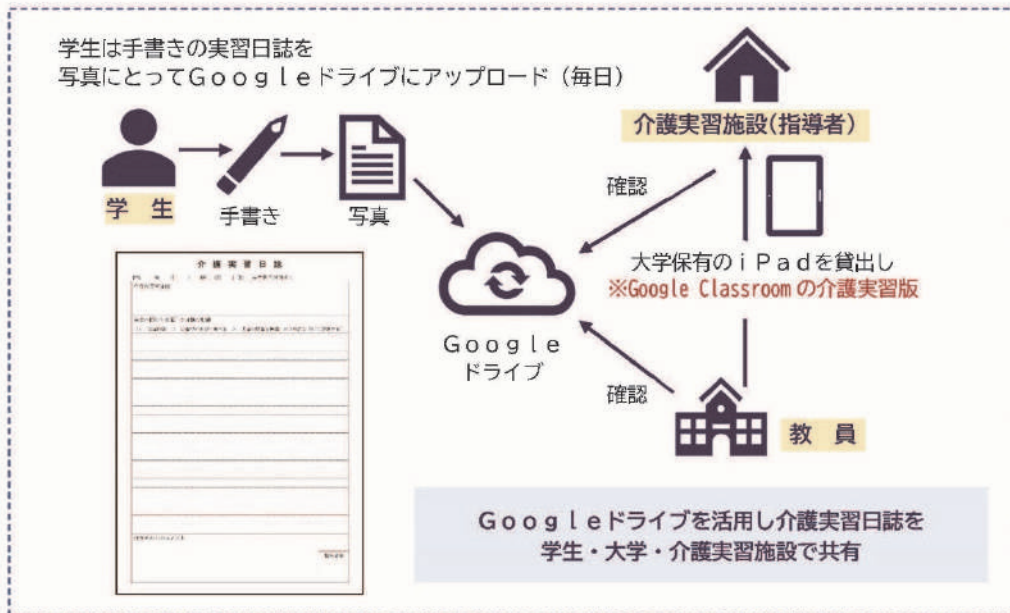
課題

- ・連絡や情報の多さに対応できない学生がいる。 → 教員側の工夫が必要。
- ・コピー＆ペーストやAI等の活用をして、自分の言葉で書かない学生がいる。等

●学習機会を保障するために

- ・部活動の大会参加、他免許の実習参加、体調不良等により、欠席する学生がいる。
- ・「学生の学習する機会を保障する」ために実施している。

Googleドライブを使った介護実習の展開



Googleドライブで介護実習日誌の写真を共有する効果・メリット

学生・大学・実習施設
がタイムリーに
情報を共有できる

巡回指導時に
学生の悩みや課題等に
対応できる

実習の状況を
確認できる

手書きは「思考する」
ことにつながる

手書きを基本とするため
コピー&ペーストが
できない

学生・実習施設ともに
複雑な操作が不要
(ストレスフリー)

写真に撮られた
実習日誌の文字の
様子から学生の心身の
調子がわかる

実習施設内でも
情報共有ができる
(指導者・フロア担当)

一緒に学生を育てている
実感があるという
実習施設の安心感

今後は、蓄積データの活用を検討していきたい

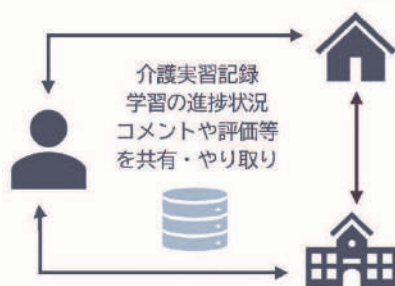
【課題】

- ・情報管理の徹底。
- ・ドライブでは共有できない情報がある。
- ・双方向のやり取りができない。
- ・パソコン等ICTデバイス使用の経験につながらない。

実習学習支援システム※
の活用シフト

■導入の背景

- ・介護施設・事業所でICTが活用されるようになっている。
- 学生もパソコン等を使えるようになってほしい。
- ・写真の共有はコメントや双方向のやり取り等ができない。



※富士フィルム株式会社

■介護実習用にシステムをカスタマイズ

- ・介護実習がどのように、どこまで進んでいるかを学生・教員・介護実習施設（指導者）が共有できる仕組みにしたい。
- ・例えば、移乗や移動について、学生は「見学をしたのか」「実際に指導者のもとで実施したのか」など、学習の進捗状況や成果を可視化して見られるシステムなるようにオーダーをしている。

■ICTの活用で生じる課題を乗り越えるために

- ・コピー＆ペーストをする、自分で考える・自分でやるということをしなくなる懸念。
- 授業や介護実習の中で、ディスカッションやフィードバックをする機会を意図的につくり、気持ちを表現する、対話をする、気付きの機会をつくる、自ら情報を整理する等を繰り返す。
- 思考力を磨く問いかけ、仕掛けを授業の中に入れていく必要がある。

介護テクノロジー教育で使用する機器は「購入やレンタル」で

【教育に取り入れている機器】

■購入

マッスルスーツ、Hug（移乗支援）、歩行アシスト機器（移動支援）、モフリン、ネコ型ロボット、赤ちゃん型ロボット（コミュニケーションロボット）、非接触型モーションセンサートレーニング「TANO」（機能訓練支援）

※教育だけでなく研究にも活用する機器類は、学内で協議の上、購入する。



■レンタル

ROBOHELPER SASUKE、移乗です（移乗支援）、VR（認知症体験）、WHILL Model C2（移動支援）、curara（機能訓練支援）、PALRO、NAO（コミュニケーションロボット）

※バージョンアップする機器、購入コストの高い機器類はレンタルで対応している。



生活支援技術の授業において 多様な機器に触れる・体験する

- ・生活支援技術の授業の中で、購入・レンタルした機器を用いて「触れる・使用する・体験する機会」をつくっている。

常に新しい情報を収集

- ・「国際福祉機器展」 「CareTEX」 への参加を活用し、企業の方々と名刺交換をしてつながって情報を得る。
- ・養成施設等の教員のネットワーク、学会、研修等を通して新しい情報を収集する。

外部から講師を招いて

- ・企業等を招いて、介護テクノロジーに関する講話をお願いすることもある。

介護テクノロジーありきにならないために

- ・アセスメントをした結果、より良い介護をするための一つの引き出しとして、介護ロボットを考えてほしい。
- ・介護の原理原則を理解した後に、「介護テクノロジー」「介護ロボット」の教育をする授業構成としている。



介護テクノロジー教育を通して見える効果と課題

見える効果

- ・面白い、楽しいという学生の反応がある。
- ・介護テクノロジーに強い関心を持つ学生がいる。
- ・学生にとっては、介護のイメージアップにつながっている。
- ・介護テクノロジーを通して、利用者の理解、尊厳を考える機会が生まれる。
→「どんな介護テクノロジーを入れれば、利用者の生活がより豊かになるんだろう」という教員の問いかけを通して、利用者の理解、尊厳を考える機会ができる。

認知症VR → 認知症の方が見ている世界を体験



さまざまな課題

- ・教育にマッチした機器を、適切な時期に使えるかが確約できない。
- ・レンタルや購入費用の確保。
→無償のレンタルが少なく、購入は高額。
- ・レンタル機器を探すことが教員の負担になる。
- ・機器はバージョンアップしていく。
→教員はタイムリーな情報収集が難しい。
- ・仕様説明動画付きのカタログなどがあると便利で安心。
- ・教員が介護テクノロジーを教育するためには「教員向けのトレーニングツール」の導入と活用が必要。
- ・地方の学校であるため、機器展等が近くで開催されないことがない。
- ・複数の養成施設等や介護施設等で、協働して取り組める仕組みがほしい。
- ・介護テクノロジーの教育について、養成施設等によって教育内容等に違いがある。

2-8 ヒアリング結果【四年制大学】__桃山学院大学（大阪府）

実施日時	令和8年2月10日（火）10：00～11：30
ご対応いただいた先生	社会学部ソーシャルデザイン学科 川井 太加子 先生 杉原 久仁子 先生 黒田 隆之 先生 石井 亨宏 先生

☆教育に活用している ICT 等

- 学習管理システム
- ウェブ会議ツール
- 動画
- 音声入力アプリケーション

☆教育に取り入れている 介護テクノロジー

- 移乗・移動支援
- 排泄支援
- 見守りセンサー・システム
- 入浴支援
- 介護記録・情報共有支援
- 機能訓練支援
- インカム等の機器

- ◆所在地：大阪府
- ◆学校種別：四年制大学
- ◆定員数：20名(1学年あたり)
- ◆専任教員：3名
- ◆設置者：学校法人桃山学院



リアルな介護現場にふれる ～Zoomを活用して高齢者施設をライブ中継～

介護の基本（1年次）

- ・有料老人ホームの職員に、介護施設について講義をしていただく。
- ・講義の中で現場と結んでライブ中継（15～20分程度）。

Zoomの機能を使用して、施設内の様子を案内

職員が居室、屋内の様子などを説明
利用者が参加しているレクリエーションの様子
利用者へのインタビュー
職員へのインタビュー 等



利用者や現場からの学びを 出発点にしたい

- ・高齢者や施設への偏見や固定的な見方をもっている学生の新たな気づきの機会。
- ・1年生でリアルな介護現場にふれ、介護の基本的な見方や考え方を知る。

リアルな介護現場を知る

- ・高齢者施設を知らない学生が介護現場を知る機会をつくる。

【学生の感想】

- ・施設の雰囲気がよくわかった。
- ・想像していたよりも活気がある。
- ・利用者さんの日々の過ごし方や気持ちを感じることができた。
- ・職員さんの仕事の様子を知る機会となった。

【留意点】・施設と授業の目的を共有する。

- ・施設の雰囲気だけではなく、利用者の様子や気持ちがわかる内容を入れる。
- ・介護施設・事業所を知らない学生も多いので、解説を途中や終了後に入れて理解を促す。
- ・利用者等のプライバシーに留意。

【課題】・機材準備を含めて、施設側に負担がかかる。

ICT(学習支援システム等)を使って学生の自律を促す

人間関係とコミュニケーション（1年次）



- ・1年生の秋学期に開講、介護福祉士国家試験を受験しない学生も受講している。
- ・大学生活に慣れてきた学生が、学習支援システム等を活用して主体的に授業に参加できるように意識。
- ・グループワークなどを行い、学生同士、学生と教員における“コミュニケーション”を大切にす授業展開。

■活用している学習支援システムは WebClass

【共有】

- ・1年間の学習内容
- ・単位の取得条件
- ・各人の出欠状況
- ・教材・資料
- ・学生自身が課題の評価を確認 等

メールを見ない学生がいるため
学習支援システムによる連絡が効果的
学生が使えるようにサポートする
ことが大切

【管理】

- ・課題の提出
- ・課題の採点（教員） 等

【学生とのやりとり（連絡）】

- ・講義に関する連絡
- ・欠席の連絡
- ・課題の提示、提出の遅延連絡 等

自律を促す取組

■課題提出の習慣化

～毎回、授業の終わりに提出～

- ① 調べる、相談する行動を促す
 - ・パソコン、スマートフォン、AI等、何を使って調べてもよい、学生同士で相談してもよいとアドバイス。
 - ・課題のテーマを「自分」に関することに設定し、AIの活用やコピー&ペーストでは回答できないように工夫。
- ② LMSを活用する環境をつくる
 - ・LMSで提示したワードの課題に記載し、PDFにしてLMSで提出が原則。
 - ・手書き希望の学生もいるので紙でも配布。
 - ・手書きの学生は、手書きを写真に撮り、PDFにしてLMSで提出。
- ③ 課題は全てに評価の点数をつけLMSで共有
 - ・自分がどれくらい理解できているのかを評価から知ることができる。

LMSを活用するにあたっての配慮

■動画の情報量が多すぎて・・・という学生には

- ・情報量が多すぎて不安になってしまう学生に、繰り返して観ることができる環境をつくる。
- ・サイズが大きい動画はLMSに上げられないため、GoogleドライブにあげてリンクをLMSで知らせる。

■情報のバリアフリー化を図る

スクリーンが見えない
小さい字が見えにくい



- ・同じ資料を3つの方法で提供し、自分にあった方法で見ることができるように配慮。
 - ✓紙面で配布
 - ✓スクリーンに投影
 - ✓自分のデバイスでLMSにあがっている資料を見る

介護施設等から介護テクノロジーを借りて授業を展開

生活支援技術Ⅲ（２年次）

授業の概要

- ・「生活支援技術Ⅲ」の計30回のうち、後半の14回で介護テクノロジーに関する集中授業を展開。
- ・非常勤講師として、社会福祉法人の法人本部本部長に依頼。
- ・介護施設及び事業者から、テクノロジーや機器の協力を得て、大学での講義や体験に活用する。
- ・1日2回（90分×2）をつなげ、計7日を使い授業。
前半→スライドを使った講義、後半→実技や体験で展開
- ・最後の13～14回目：2人1組となり、テーマを提示してプレゼンテーション。

■①介護について改めて考えてみる

1～2回目

- ・介護を必要とする人は高齢者ばかりではない。
- ・障害も含め、介護は様々な人が必要としていることを再度確認し、「介護」について一度“考える”ことを出発点としている。
- ・介護福祉士には様々な活躍の場があることも知ってほしい。

【実技・体験・紹介している機器】

- ・モーションセンサーを利用した福祉・ゲーミフィケーションテクノロジー
(TANOTECH 株式会社)
- ・介護実習室内の吊り下げ式電動リフトやスライディングボード、骨格模型

■②介護ロボットやICTについて（全体論）

3～4回目

- ・介護テクノロジーの9分野、種類などに関する知識を習得する。

【実技・体験・紹介している機器】

- ・モーションセンサーを利用した福祉・ゲーミフィケーションテクノロジー
(TANOTECH 株式会社)



■教育の効果

- ～13・14回目のプレゼンテーション発表より～
- ・学生が介護に対するポジティブなイメージを持つようになった。
- ・これまで身近ではなかった介護テクノロジーについて、学生はその可能性を知ったり、活用に対する視野の広がりを感じている。

■課題

- ・介護福祉士養成課程で使用するテキストでは、介護テクノロジー等に関する内容にあまり触れられていない。
- ・一方で、制度や政策、機器は日々進化しており、介護テクノロジー教育の方向性（どこまで・どのように教育するか）の明示が必要ではないか。

■③ノーリフトケアについて

5～6回目

- ・生産性向上や業務効率化など、介護をする側の効率化に目を向けてしまいがちであるため、あえて「ノーリフトケア」を学ぶ機会をつくる。
- ・介護テクノロジーを使えば何でも解決するという考えにならないための学び。
- ・介護テクノロジーを使わなくても、自立を妨げず、負担や不安を取り除いていく方法があることを知る。

【実技・体験・紹介している機器】

- ・装着型サイボーグ HAL 腰タイプ 介護・自立支援用 (CYBERDYNE 株式会社)
- ・モーリフト レイザープロ (バシフィックサプライ株式会社)
- ・介護実習室内の吊り下げ式電動リフトやスライディングボード、骨格模型

■④入浴支援：新しい入浴方法や機器について

7～8回目

- ・排泄や入浴のケアは大変だ・しんどいというイメージがあり、関心が高い。
- ・排泄は大学において講義・実技・体験が難しいため、入浴に焦点をあてている。

【実技・体験・紹介している機器】

- ・介護用ナノミストバス CARRY ナノミストバスヘッドスパ (株式会社アイン)
- ・シャワーオール NB2500 (エア・ウォーター株式会社)

■⑤リハビリ・トレーニング分野における活用について

9～10回目

- ・介護保険制度では、介護予防や要介護状態になっても介護度を維持・軽減する視点があることから、リハビリやトレーニング分野における介護テクノロジーを学ぶ。

【実技・体験・紹介している機器】

- ・装着型サイボーグ HAL 腰タイプ 介護・自立支援用 (CYBERDYNE 株式会社)

■⑥その他 (ICTやコミュニケーションデバイス等) の介護ロボットや機器

11～12回

- ・記録システム、音声入力などのコミュニケーションデバイスを知る。
- ・機器や機能の種類が多様で絞れないため、講師が職場で導入している機器等を中心に紹介。

【紹介している機器・機能】

- ・CAREKARTE、ハナスト (株式会社ケアコネクトジャパン)

■⑦「あなたは、どのような施設を造りたいか」

13～14回

～学生によるプレゼンテーション～

- ・介護ロボット、ICT、ノーリフトケア等を中心にした施設を造るとしたらどんな施設にしたいか。
- ・あなたは、どのような介護福祉士を目指しているか。

3 ヒアリングガイド

令和7年度老人保健健康増進等事業 介護福祉士養成課程におけるICTを活用した教育のあり方に関する調査研究事業

介護福祉士養成教育におけるICT等活用に関する調査 ヒアリングガイド

1 調査研究の全体像

1. 調査研究の背景	介護現場では・・・	・介護DX、ICT（以下、「デジタル機器・技術等」という）を活用した生産性向上の取組の推進が図られている。
	介護福祉士養成教育の現場では・・・	・新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、オンライン授業が展開されるなど、デジタル機器・技術等を活用した教育が身近に。 ・教育方法の手引き（※）では、コミュニケーション技術および生活支援技術の科目において「想定される教育内容の例」として、情報の活用と管理におけるICT活用、介護ロボットを含んだ福祉用具の活用が示されている。 ※介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き（日本介護福祉士養成施設協会、2019）
2. 介護福祉士養成教育の現状		・デジタル機器・技術等活用や介護テクノロジーを取り入れた授業展開には、養成校間の差が大きい状況。 ・養成校と介護現場が連動したデジタル機器・技術等を活用した教育の展開により、学習効果が高まり、介護サービスの質向上に寄与する人材育成が想定される。
3. 調査研究の目的		・各種調査により、デジタル機器・技術等を活用した教育、介護テクノロジーに関する教育の実態を把握する。 ・当該調査結果を踏まえ、高度な専門職人材育成に向けたデジタル機器・技術等を活用した教育の留意点及び課題等について検討し、整理することを目的として事業を実施する。
4. 調査研究のポイント		・デジタル機器・技術等を活用した教育、介護テクノロジーに関する教育により、教育がどのように変わっていくか、介護の質がどのように変わっていくかを検証する。
5. 調査研究主体		・公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会（連絡先は最終ページに記載）

1

2 ヒアリング調査の枠組みと留意事項

1. 目的	・事例集（以下8に記載）に掲載する教育事例の収集
2. 調査対象	・養成校（四年制大学・短期大学、専門学校、福祉系高校を含む）
3. 悉皆・抽出別	・アンケート調査結果および検討委員会推薦等による有意抽出
4. 調査者対数	・8校、四年制大学・短期大学、専門学校、福祉系高校の種別について偏らないよう配慮 ・ICT等を活用した教育事例、介護テクノロジーを用いた介護実践についての教育事例の2つの視点をもとに、対象を有意抽出する
5. 調査方法	・半構造化面接、対面実施を基本とするがハイブリッドやリモートによる方法も対応する
5. ヒアリング内容とフロー	・次ページを参照
7. 調査時期	・～2026年2月
8. その他	・事例集について <ul style="list-style-type: none"> ✓ 当該調査研究の成果物の1つ ✓ 調査研究、研究会などで得られた知見を事例集としてまとめ、養成校全校に向けて周知を行う ✓ デジタル機器・技術等を導入・活用した介護福祉士養成教育の教育例を紹介する ✓ 大学・短大学、専門学校、福祉系高校が参考となる内容とする ✓ 養成校で取り組みやすい教育方法の紹介を目指す

3 貴校に依頼するヒアリング調査 （参考）貴校のアンケート調査の回答は、別紙のとおり

調査の視点	<input type="checkbox"/> ICT等を活用した教育事例 <input type="checkbox"/> 介護テクノロジーを用いた介護実践についての教育事例
対象となる科目・授業例 ご担当の先生	

2

4 ヒアリング内容とフロー

フロー	質問や説明の柱	詳細（深堀の内容）
1. オープニング（5分）	A) 協力のお礼、ヒアリングの流れの説明	
	B) 自己紹介	
	C) ヒアリング目的の説明	
	D) 録音（録画）許可確認	
	E) 個人情報及びデータ活用に関する説明	
2. ウォーミングアップ（3分）	F) アンケート調査結果の共有 など	
3. ヒアリング（60分）	G) 学校全体の導入、活用状況（全体）	※ヒアリングする科目に限定せず、学校全体におけるデジタル機器・技術の導入、活用状況の概略を把握
	H) 活用の期間	
	I) 使用している機器、教材、シーン、ツールなど	※具体的な機器、教材、シーン、ツール など
	J) 活用のきっかけ、活用を後押ししていること	※指定校、助成金、協働・協力機関、介護現場との協働 など
	K) 授業における具体的使用方法や使用場面、シラバス掲載の有無	※シラバス掲載の状況 ※授業の具体的展開方法 など
	L) 留意点または工夫していること	※授業の展開方法、履修年限、科目間連携、他機関との連携 「重要な視点」に対応するため、どのような取り組みをしているか など
	M) 課題	
	N) 期待される効果、効果の把握・測定方法	※生徒・学生の意見、教員の意見、教育の質の変化 など ※アンケートやヒアリングによる効果把握、その他の評価方法
	O) 今後の展開と期待	※発展の可能性、改善点 など
	4. クロージング（10分）	P) 追加確認事項の質問
Q) まとめ、感想		
R) 協力のお礼、今後の連絡・動きに関する説明		

3

5 本ヒアリング調査に関する連絡先・お問合せ先

公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 事務局

担当：渡邊、田中 kaiyokyo-office@kaiyokyo.net
 東京都文京区本郷3-3-10 藤和シティコープ御茶ノ水2階
 TEL：03-3830-0471 FAX：03-3830-0472

株式会社コモン計画研究所

担当：相澤 aizawa@comon.jp mobile：090-1778-6293
 東京都杉並区成田東5-35-15 The Plaza F 2階
 TEL：03-3220-5415 FAX：03-3220-4417

4

第4章 教員向け研修会の開催

1 概要

ヒアリング調査で収集した教育事例を使用した教員向け研修会を実施し、教育における展開の工夫、方法について情報共有及び議論を行った。

教員向け研修会の開催（再掲）

目的	<ul style="list-style-type: none">介護福祉士養成教育におけるICT活用の工夫、方法等に関する情報共有及び議論教育事例の周知と活用、事例集への意見の把握			
対象者	<ul style="list-style-type: none">介護福祉士養成施設及び福祉系高等学校の教員			
テーマ	<ul style="list-style-type: none">ICT等を活用した介護福祉士養成教育に関する研修会			
日時	<ul style="list-style-type: none">令和8年3月6日（金）13：00～17：00			
開方場所	<ul style="list-style-type: none">TKPガーデンシティPREMIUM京橋ANNEX			
参加費	<ul style="list-style-type: none">無料			
定員・申込者	<ul style="list-style-type: none">定員 200 名、申込者 106 名			
参加者	種別	参加者数合計	会場	リモート
	四年制大学	17	2	15
	短期大学	17	0	17
	専門学校	41	7	34
	福祉系高等学校	13	1	12
	合計	88	10	78

プログラム

時間	内容
12:30～	受付
13:00～	開会
13:10～13:40	本事業の趣旨 講 師：川井太加子 先生（桃山学院大学）
13:40～14:45	事例紹介① テーマ：「『学びの質』を高めるICT活用 —高校福祉科からの実践報告—」 講 師：高木諒 先生（愛知県立古知野高等学校） 概 要： 本発表では、ICTを「教えるための道具」ではなく、学びを深めるためのきっかけとして位置づけ、教育方法・教育内容の両面からその活用を紹介する。 本研修を通して、ICTが対面の学びを深化させる可能性について考えたい。 グループディスカッション
14:45～14:55	休憩
14:55～16:35	事例紹介② テーマ：「地域の介護テクノロジー推進機関・介護施設との連携による教育事例」 講 師：奥野勝太 先生（富山短期大学） 概 要： とやま介護テクノロジー普及・推進センターや介護施設との連携に至る動機から授業目的・内容、工夫点などについて富山短期大学の事例報告やワークショップを行う。 事例紹介③ テーマ：「産学連携を軸とした介護テクノロジー教育の取組 —企業連携で見た学生の変化—」 講 師：高橋利明 先生（東京福祉専門学校） 概 要： 「どのようにして介護テクノロジー活用のためのカリキュラムを作成し、実際に運用してきたのか」を、東京福祉専門学校とコニカミノルタ株式会社、株式会社善光総合研究所との産学連携事例を通じて具体的に共有する。単なる機器の操作説明ではなく、既存の教育課程にいかに統合し、次世代の介護福祉士の育成に向けてどのように連携してきたかを紹介する。 グループディスカッション
16:35～16:45	まとめ
16:45～16:50	閉会

2-1 事例発表1 『学びの質』を高めるICT活用～高校福祉科からの実践報告～

【発表者】高木 諒先生（愛知県立古知野高等学校）

【資料】



本校の概要

- 沿革**
 - 1949(昭和24)年: 小牧高等学校古知野分校として開設。(定時制1学級)
 - 1952(昭和27)年: 古知野高等学校として設立。(定時制3学級)
 - 1997(平成9)年: 介護人材の需要拡大という社会的要請を受けて、福祉科が開設された。全日制4学科と定時制(普通科)の併設となる。
- 各学科の概要**

地域ビジネス科	4学級 16名	マーケティングコース、観光コース、プログラミングコース、ICTコース
生活文化科	1学級 40名	福祉コース、美術コース
福祉科	1学級 40名	介護職員初任者研修及び介護福祉士養成課程
- 福祉科スクールポリシー**
 - 福祉・介護の専門的な知識・技術に基づき、状況に応じた介護を実現できる人
 - 互いの価値観を認め、協力の立場に立って考えられる人
 - 多様な人と関わるためのコミュニケーションスキルを身に付け、実践できる人
 - 福祉・介護の専門職として、課題解決に向けて積極的に協働できる人
 - 地域に貢献しようとする強い意志を持ち続けることができる人

本校の概要

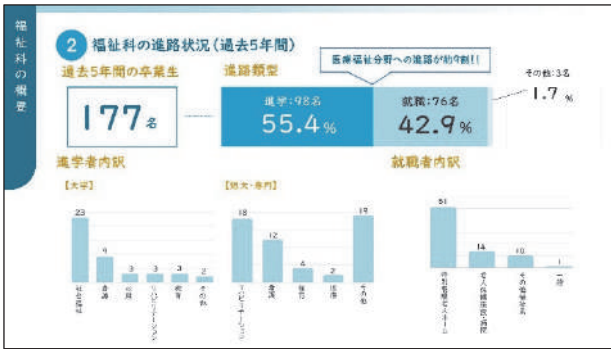
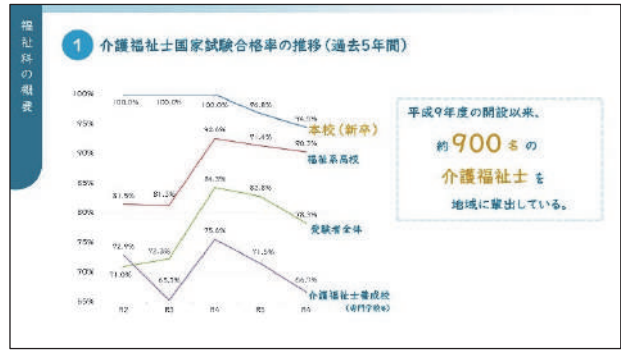
4 教育課程表(福祉科)

……介護福祉士養成課程に必要な科目

学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1年次	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目
2年次	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目
3年次	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目	基礎科目

介護実習(450時間/3年間)

1年次	42名	実習先(施設)12校、福祉科(福祉科)1校	2年次
2年次	17名	実習先(施設)12校、福祉科(福祉科)1校	3年次
3年次	34名	実習先(施設)12校、福祉科(福祉科)1校	4年次



MHSの取組

1 科学的裏付けに基づく介護(EBC)

- 科学的裏付けに基づく介護(EBC)
 - 01 科学的裏付けに基づく介護(EBC)の実践
 - 「科学的裏付けに基づく介護(EBC)の実践」は、介護現場での実践を通じて、科学的根拠に基づいた介護の実践を推進する。
 - 02 科学的介護の実践
 - 「科学的介護の実践」は、介護現場での実践を通じて、科学的根拠に基づいた介護の実践を推進する。
 - 03 認知症ケア実践
 - 「認知症ケア実践」は、介護現場での実践を通じて、科学的根拠に基づいた介護の実践を推進する。

MHSの取組

2 課題解決型学習(KOCHINO PBL)

- 課題解決型学習(KOCHINO PBL)
 - 04 「1つのテーマ」を軸として、地域課題を解決する。
 - 「1つのテーマ」を軸として、地域課題を解決する。
 - 05 福祉・介護の総合的視点「THINKER to DOER」
 - 福祉・介護の総合的視点「THINKER to DOER」を軸として、地域課題を解決する。
 - 06 福祉で実践されるために、福祉現場での実践を通じて、科学的根拠に基づいた介護の実践を推進する。
 - 福祉で実践されるために、福祉現場での実践を通じて、科学的根拠に基づいた介護の実践を推進する。

授業方法

1 介護福祉教育におけるデジタル技術活用(教育・授業の展開方法)

- Microsoft Teams**
 - Teamsの活用により、授業の展開がスムーズに行われる。
- ロイノート・スクール**
 - ロイノート・スクールの活用により、授業の展開がスムーズに行われる。
- CARE CARTE**
 - CARE CARTEの活用により、授業の展開がスムーズに行われる。

2 Microsoft Teams活用例


介護実習に向けた作文の作成



生徒は自宅や放課後でも同時に学習資料を閲覧できるようになり、離れた場所からでも意見交換や修正が図れた。また、介護実習の個人票や作文は、提出後に教員が添削コメントを送るため、生徒は即時に修正できるようになった。

さらに、共有画面では画面ごとの作業進捗が確認でき、遅れがある部分を他のメンバーが持つなど、チーム全体で完結は容易な動きが実現した。

3 ロイノートスクールの活用例



ロイノートの活用により、生徒は授業中に撮影した介護実践の様子や動画を画面に提出し、教員がその場で動画や修正指示を行えるようになった。意見共有や、生徒会長の発言がカードとして画面に一致表示されるため、類似した発言や異なる視点を比較しながら振り返る事ができた。

また、発表動画を収録されたカードを組み合わせることで、授業内で視覚的に分かり易く学習資料を作成できるようになった。

4 CARE CARTEの活用例



ケアカルテの導入により、検査や実習で得た印刷をデジタル上で集約・共有し、必要な情報を即座に呼び出せるようになることが期待される。介護実習では、生徒が入力した症候を教員がリアルタイムで確認できるため、その場で指導やアドバイスを可能にする。学びを即時に修正・深化させることが可能となる。

また、授業で入力したデータを授業で共有し、命題と比較・検討することで、症候の働きや病態の違いを学び合う機会が増えることが見込まれる。

1 介護現場における介護ロボットやICT活用に関する介護福祉教育-教育-政策の内容-

ベッドセンサー

利用者の呼吸、血圧、脈拍状態が異常を発生し、アラートとして発報できる。
脈拍の異常や生活リズムを分析し、必要な支援やケアの方向性を提示する提示を行う。
介護実習において利用者のアセスメントに活用することも検討しており、具体的な活用場面に基づいたケアの立案につながる。


体圧測定・歩行分析

他日介護福祉は、新しいことに挑戦し、希望する力を発揮し、可視化することで、看護実践や適切なコミュニケーション構築、ポジティブな工夫を学ぶ機会として活用している。
介護実習において利用者の体圧や重心移動、バランス状態を数値で把握することで、転倒予防や歩行介助方法の活用につなげている。
さらに、公開発表を基に利用者に適した福祉用具を選定する演習を行うことで、データを根拠にした介護方法や用具選びの力を養っている。

CARE CARTE

介護現場では記録や連絡をセンサーにより多くの情報が日々蓄積されるが、重要なものはそれを単に保存することではない。
蓄積されたケアデータを分析・活用し、課題に導いたケアの改善や対応の個別化につなげる方を考えることが、これからの介護福祉士養成教育において不可欠である。

2 ベッドセンサー活用例



ベッドセンサーの活用により、生徒は利用者の睡眠状態や生活リズムを数値的データとして捉え、表面内野を把握する力を養っている。

授業では、電圧データを用いたアセスメントを行い、より具体的なケアプランに基づいた介護計画の立案につなげている。また、ケアプランの分析や表を用いる点については、開成大学の教員による専門的な指導を実施しており、豊かな情報活用と丁寧な、丁寧な読み取りと活用を体系的に学んでいる。

3 体圧測定・歩行分析 活用例



体圧測定機器の活用により、生徒は自身の圧力から転倒の危険性、転倒予防の重要性や適切なコミュニケーション構築、ポジティブな工夫を具体的に学んでいる。

歩行分析機器の活用では、歩容や重心移動、バランス状態を数値で把握することで、転倒予防や歩行介助方法の活用につなげている。

さらに、公開発表を基に利用者に適した福祉用具を選定する演習を行うことで、データを根拠にした介護方法や用具選びの力を養っている。

4 CARE CARTE 活用例




ケアカルテの活用により、生徒は正確かつ簡便に情報を記録する機能を身につけることができる。入力した記録を術者間で確認・比較することで、利用者の状態変化を各職員に伝達し、根拠に基づいた判断を行う方が求められる。

また、授業や実習で得た記録データを共有・分析する過程を通じて、多職種連携に必要な情報伝達の方法や役割を学ぶことができる。

これらは、介護福祉士として必要不可欠な記録力・分析力・情報活用力の習得につながるものである。

5 科学的裏付けに基づく介護 (EBC)

データ分析からの気づき



歩行測定では歩容や重心の傾き、重心の傾きといった数値が可視化される。歩容の状態を数値的に記録でき、歩行測定データに基づいて転倒リスクを評価し、転倒予防の必要性を数値的に示すことができた。

また、歩行分析データは3次元の歩容データを基に、歩行データを基に「歩容が低い」として歩行測定データで、生徒は自身の歩容を数値的に把握し、転倒予防の必要性を数値的に示すことができた。

例えば、歩行測定データから歩容が低いことが確認された。歩容が低いことは、転倒リスクが高くなる可能性がある。歩行測定データに基づいて、歩容を改善するための指導を行うことが必要である。

実践の振り返り

1 生徒の感想より

デジタルテクノロジーは便利だけど使い方がよくないところがあるので、使う前に目的や用途を想定してどこがゴールの存在が大切だと感じた。目的や目標が明確でないまま進んでいくと、結果的に無駄な作業が多くなる。

また全て機械に任せるのではなく、機械の結果をどう使うかをよく考えることも大切だと感じた。機械に任せるのをやめて、自分で考えることが大切だと感じた。

介護者が介護現場の専門性を高め、機械ではなくあくまで人間が主体であるという認識を持つことが必要だと考えた。

介護者がデジタルテクノロジーを導入することを目的ではなく手段として認識することが大切。

また、デジタルテクノロジーを導入することで介護現場が介護福祉の専門性を発揮してしまっている。介護現場が主体となって利用者の生活の改善が出来るよう、デジタルテクノロジーを使用して従来の業務の効率化、作業、検査、記録、報告、作業の効率化を目的にして生活支援を行うことが大切だと感じた。

介護者が介護現場の専門性を高め、機械ではなくあくまで人間が主体であるという認識を持つことが必要だと考えた。

実践の振り返り

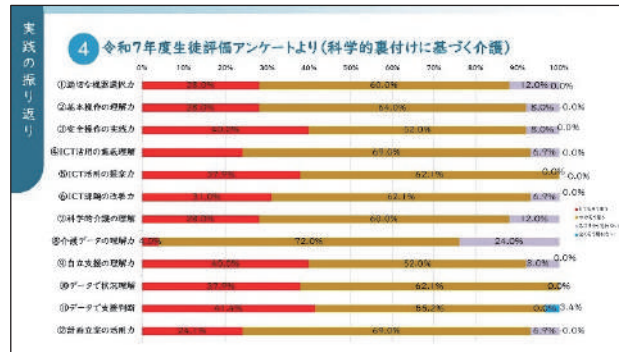
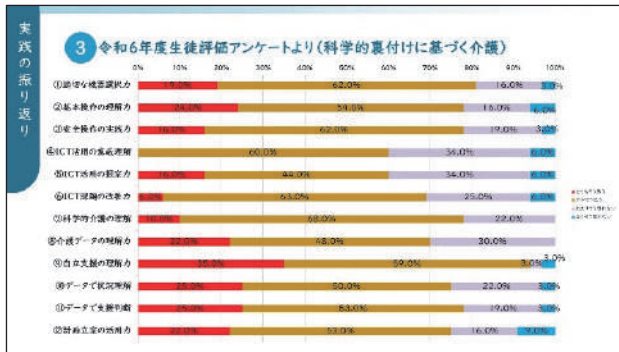
2 生徒の感想より

体圧センサーでは、アラームが鳴ってから利用者の動きや歩容が分かる。介護者の負担が大きい。まずはその人の特性を把握するためにセンサーを使用し、（アセスメントのために活用）することから始める。その後、センサーが鳴る時に利用者の動きや歩容が分かるようにしたい。そのことが結果的に介護者の負担を減らすことになる。

例えば、歩行測定データから歩容が低いことが確認された。歩容が低いことは、転倒リスクが高くなる可能性がある。歩行測定データに基づいて、歩容を改善するための指導を行うことが必要である。

AIは、迅速に行き届いた情報の集約として最適なツールである。AIは、新たな変化を捉えたり、新たな発見や利用者の生活の改善を促すことで利用者をより知ることで、それは利用者の生活の改善に繋がる。

しかし、AIの活用はあくまで利用者の生活の改善を目的として行うべきである。AIの活用はあくまで利用者の生活の改善を目的として行うべきである。AIの活用はあくまで利用者の生活の改善を目的として行うべきである。



介護福祉教育の展望 -ICT教育の実践もとじて-

① 科学的根拠に基づくケア教育の高度化
 これまで、センサーや記録ソフトで集められたデータを分析し、ケアの課題を考える教育を行ってきた。今後は、療養の場から得られるデータを組み合わせ、多角的に利用者の状態を評価する学習へ発展させる。取りこぼしなく、徹底判定・実行が可能な情報を構築し、生活全体の改善計画立案できる力を育成する。

② 現場連携による学びの実践化
 介護人材育成を、学校や現場それぞれの責任とする考えから脱却する必要がある。介護は「知識が豊富なもの」から「社会全体で担うもの」へと転換された。人材育成においても、自他種、福祉人材センター、教育機関など関係者が同じチームになる、共通の目的と力を共有することで、学校と現場現場の協働を図る。

③ ICTリテラシーと対話力の育成
 ICT活用は、データの取得や分析にとどまらず、ケアチームや他職種との連携に生かすことが重要である。ケアの方向性を検討する場面で、医療職などに相談をもって伝えられる対話力・説明力を養う。両面のデータを絡めて終わりではなく、価値を共有し協働できるコミュニケーション力を高める教育を行う。

「ICTを教育方法として どう工夫しているか」

2-2 事例発表2 地域の介護テクノロジー推進機関・介護施設との連携による教育事例

【発表者】奥野 勝太 先生（富山短期大学）

【資料】

ICT等を活用した介護福祉士養成教育に関する研修会2026.3.6

地域の介護テクノロジー推進機関・介護施設との連携による教育事例
—「生きた学び」のづくり方—

富山短期大学 健康福祉学科
准教授 奥野 勝太

目次

1. 連携教育の動機
2. 連携教育プログラムの流れ
3. 連携先の選定と事例
4. 教育的効果
5. 課題と今後の展望

教育現場が抱える「3つの限界」

介護テクノロジー機器の種類が少ない
介護ロボットが古い
学校での学びと介護施設の実務がつながりにくい

教育機関単独でのテクノロジー教育の限界
だからこそ、地域との「連携」が不可欠

限界を突破する「地域連携教育システム」

介護施設 (現場の実践・マネジメント)
学校・学生 (基礎知識と実践経験)
介護テクノロジー推進機関 (最新情報の体験・習得性)
介護ロボット開発企業 (開発の意欲・技術連携)

授業プログラムの全体像 (全15回)

Phase1 (1~6回) 【学内】介護ロボット・ICTの基礎知識と操作体験
Phase2 (7~8回) 【学外実習】利用者のQOLと自立支援に向けた実践
Phase3 (9~12回) 【学内】リスクマネジメントと組織導入の課題
Phase4 (13~14回) 【学外実習】介護施設実習(ICT活用)

「知識、技術」から「マネジメント力」「実践力」へ

最適な連携パートナーの選び方

情報収集の方法	選定基準
1. 実習中に、見学や情報交換	<ul style="list-style-type: none"> ☑多数のテクノロジー機器が完備されているか ☑導入実績・効果があるか ☑実習や卒業生など、「つながり」があるか
2. プラットフォーム事業の拠点に相談	
3. 介護テクノロジー開発企業との情報交換	
4. 教員間の意見交換	
5. 見本市での情報交換 (国際福祉機器展、CareTEX)	

連携教育の流れとスケジュール

7か月前 (企画・手配)

- 目的や内容の説明
- 日時・時間割の調整
- バスの手配

2か月前 (事前打ち合わせ)

- 機器の選定と時間配分の決定
- 学生人数(少人数グループ:4~5人)と履修状況の共有

実施・振り返り

- 講師同行での実施 (約3時間) / レポート・アンケート・意見交換

Key Rule
「お任せにしない。事前打ち合わせが最も重要」

CASE 1: 「疑似体験」の最前線へ

とやま介護テクノロジー普及・推進センター

全国初の設置 (令和5年4月 富山県)

Mission: 介護ロボットの開発・実証・普及のプラットフォーム拠点

主な機能:

- 最新の介護ロボット・研修講座・研修の実施
- ICT機器の展示
- 機器の使用貸出
- 開発企業と事業所とのマッチング

アプローチ：「触れて、見て、感じる」多角的な学び

目的
複数のテクノロジー機器を知り、疑似体験を通して利用者の思いを知る。

工夫点
最新かつ介護施設導入率の高い機器を厳選
小グループ編成(4~5人)で十分な体験時間を確保し、率直な意見交換を促進

見る・触れる・疑似体験

体験がもたらす学生の「4つの気づき」

<p>1. 実体験を通じた深い学び 「する側」だけでなく「される側」を体験し、操作の難しさや利用者の恐怖感に気づく。</p>	<p>2. メリットの再認識 負担軽減だけでなく、利用者の安全確保や自立支援への貢献を認識。</p>
<p>3. 導入・運用上のハードル 費用、設置スペース、学習時間、プライバシー配慮、音声入力の手続き作業など、リアルなデメリットを認識。</p>	<p>4. 現場に合わせた選定 利用者の状態と介護者の操作性を両立する、ニーズにフィットした機器選定の重要性を認識。</p>

CASE 2：「実践と組織運用」を学ぶ

地域密着型特別養護老人ホーム ささづ苑がすが

基本情報
・社会福祉法人 おおさわの福祉会
・富山県富山市

導入機器

- 【移乗支援】 HUG、スカイリフト、床走行式リフト
- 【記録・音声】 ケアカルテ、CareWizハフスト
- 【見守り】 庫りSCAN
- 【業務効率化】 ドキュワークス、Zmeeting
- 【離床アシスト】 リショーネPlus

アプローチ：「現場で生きる」マネジメントの学び

目的
・これまで学んできたものが実際はどう使われているか
・どのような効果があったか
・マネジメントの現場から、どのように普及、定着しているかを学ぶ

工夫点
・組織体制(委員会、研修体制など)の説明
・職員と学生との意見交換の時間を設ける
・小グループ編成(4~5人)で十分な見学時間を確保

現場のリアルとテクノロジーの可能性

「効率化」の真の目的
単に楽をすることではない。生み出された時間を「利用者と向き合う時間」や「安全・安心の確保」に充てるためのもの

テクノロジーと人の温かさの融合
機械にすべてを任せるのではない。「人の判断とコミュニケーション」が加わって初めて質の高い介護が成立

丁寧なプロセスと環境づくり
職員の苦手意識をなくし定着させるため、勉強会やスモールスタートとして導入する「マネジメントの視点」が重要



連携教育を阻む「リアルな壁」

<p>壁1: 日程調整の難易度 学校のカリキュラムと、多様な介護施設・推進機関のスケジュールをすり合わせる努力。</p>	<p>壁2: 授業の時間配分 移動時間を含めた、限られたコマ数(単位数)内での効率的な時間割の構築。</p>	<p>壁3: 移動手段と予算 バスの手配にかかるコストと、学校側の予算の兼ね合い。</p>
---	---	--

これらの課題をクリアするためにも、早めに計画的に取り組むことが不可欠

今後の展望：持続可能な介護教育に向けて

- 見学先の選択肢の開拓
より多様なテクノロジー活用事例を持つ施設とのネットワーク構築。
- 卒後の教育効果の追跡研究
連携教育を受けた学生が、現場でどのように活躍し、定着しているかのデータ化。
- 継続的なスキルアップ
変化の激しいテクノロジーに對する、職員自身の知識・技術のアップデート。

連携教育が「介護福祉士×テクノロジー」の質の高い介護のスタンダードを創り出す

2-3 事例発表3 産学連携を軸とした介護テクノロジー教育の取組 ～企業連携で見た学生の変化～

【発表者】高橋 利明 先生（東京福祉専門学校）

【資料】

自己紹介

滋慶学園グループの理念

ミッション 「職業人教育を通じて社会に貢献する」

発表内容

01

介護テクノロジー教育導入の背景

なぜ、介護テクノロジー教育を導入したか？

養成校の危機：定員充足率 48.5% の衝撃

48.5%

【2019年度 入学定員率】

介護福祉士養成校が深刻な定員不足に直面している全国17校、入学定員率48.5%。定員は介護士としての志望者数に満たないにもかかわらず、入学が決定する「K（決つた）、強い意思」というイメージを維持している。→「職や職種からの脱却」で進学、定員数を超えるケースも多発。

介護の仕事が大変だから選ばないのではない
介護業界に希望があれば介護を学ぶことを選択するのではないか

『業界と共に育む』

実践事例：教室を「最先端の介護現場」へ

02

介護ICT教育の実践報告

コミュニケーションICT介護実習室の完成



- コミュニケーションICT介護実習室: 企業知見を活かし、実際の現場と同じセンサー・記録システムを校内に構築。
- リアルタイムデータの活用: 単なるデモではなく、生きたデータを授業で扱うことで、座学と臨床のギャップを埋める。



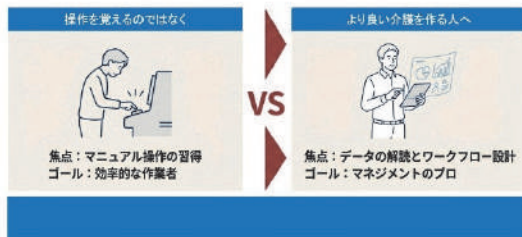
- コミュニケーションICT介護実習室: 企業知見を活かし、実際の現場と同じセンサー・記録システムを校内に構築。
- 専門家との連携: 企業のエンジニアやコンサルタントが、最新の技術動向やデータ分析手法を直接指導。

プログラム (2019年)

段階	第1段階	第2段階	第3段階	第4段階
内容	ICTでの基礎知識	ICTでの基礎知識	ICT導入によるオペレーション	オペレーションの高度化とケアディレクター育成
日程	5月16日	5月23日	7月18日	9月19日 10月3日 11月7日 12月12日
内容	介護現場におけるICTを学ぶ HitamaQの活用を知る	HitamaQ導入開始 見学	HitamaQ導入によるオペレーション 実習 方法を学ぶ 現場から改善プロセスの理解 自ら実践できる指導者を目指す	従来のワークフロー構築 ケアディレクターの能力を知る データの活用を学ぶ 初学段階の受講者を知る



介護テクノロジー教育で目指すもの



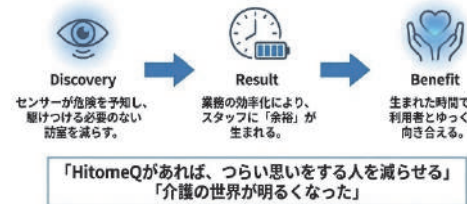
2年間のテーマは『マネジメント』

介護ロボットや介護ICTは道具にすぎない
(導入するだけでは解決しない)

いかに道具を効果的に活用し
介護職員の力を引き出し
介護の質を高められるか

学生の意識変容

意識変容のロジック: 「効率化」が「優しさ」を生む



講義の様子



科目の位置付け

独自科目の中で展開

2017~2018 自立支援介護論
↳ 年間のうち7コマ程度で展開

2019~2022 介護みらいプログラム

2023~ 介護ICT

↳ 2年間計 (120時間8単位) 通年の科目として展開

介護ICTのカリキュラム

Supported by 善光総合研究所 ZENKOU RESEARCH INSTITUTE

東京福祉専門学校 × 善光総合研究所
『介護ICT』について
2年間の科目全体の到達目標 (最終ゴール)
① デジタル中核人材(介護福祉士)としての到達目標 (2年後)
学生は卒業時に、次の状態に到達している。

1. 介護福祉士としての専門性を、ICT・介護ロボットで拡張できる
 - ケアの質・安全・負担を減らし、テクノロジーの恩恵を即時できる
 - 「楽にするため」ではなく「ケアを良くするための」応用が求められる
2. 現場の業務を「帰納的に」見て、課題を見つめられる
 - 業務を分解し、「1人1台でも使えるテクノロジー」で代替できる(仕事)を把握できる
 - 卒業時点で一人あたり1台以上、基礎的に活用できる
3. ICT・介護ロボットを「使う側」ではなく「選ぶ・つなぐ・直す側」になれる
 - 異分野、経験、インカム、ナースコール、シフト、連携ツールの役割を理解している
 - ツール向上の提案イメージを描ける (権利がどう変わるか)
4. 小さな改善プロジェクトを現場で実行できる
 - 課題設定・実行・振り返り・改善、のサイクルを体験している
 - チームでの意思統一・調整ができる
5. 『介護テクノロジー』を伝える人材として、現場で一目置かれる
 - 教員でも「でも、でも」を聞き流すことができる
 - デジタルが基本な働きとも実践しができる

介護DXをリードする
SMART
スマート介護士資格

各期ごとのテーマと到達目標

★1年 前期
テーマ: 介護現場で使われるICT・介護ロボットに触れ、基礎的な役割を理解する

★1年 後期
テーマ: 介護業務を構造的に捉え、ICTが活躍の場を理解する

★2年 前期
テーマ: ICT・介護ロボットを組み合わせ、現場で使いこなす視点を身につける

★2年 後期
テーマ: デジタル中核人材の入口として、現場を動かす介護福祉士になる

* とにかく触れてみる → なぜ? を考える

* 国の制度との連動

2年間でふれた主な介護ロボット、ICT



授業の様子

善光会の現場で活用されているテクノロジーを授業で展開

- * 活用イメージがわき、興味が刺激される
 - ↳ 就職希望へもつながる
- * 学んだことを活かせる職場への就職が叶う

21

現場で実際に活用されているテクノロジーを教えてもらう



20

03

学生の声

学生のアンケートより

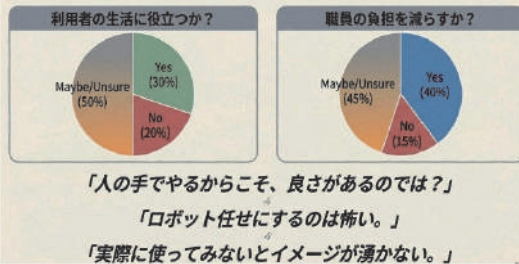
- ・ 入学直後と学年終了時に実施
- ・ 5段階から選択
- ・ その理由も記述する

- ① 介護ロボットは、利用者の生活をよくすることに役立つと思いますか？
- ② 介護ロボットは、介護職員の負担を減らすと思いますか？
- ③ 就職したら、ロボットを使いたいですか？
- ④ 自分が介護を受ける状態になったとしたら、ロボットを使ってほしいですか？

22

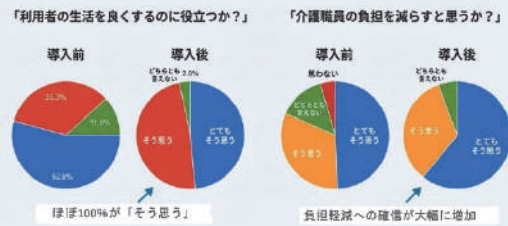
Humanist Editorial

教育前の課題：ICTに対する「食わず嫌い」と不安



23

定量的成果①：懐疑から確信へ



24

定量的成果②：95%が「ロボットを使いたい」と回答

「就職したら、ロボットを使いたいですか？」

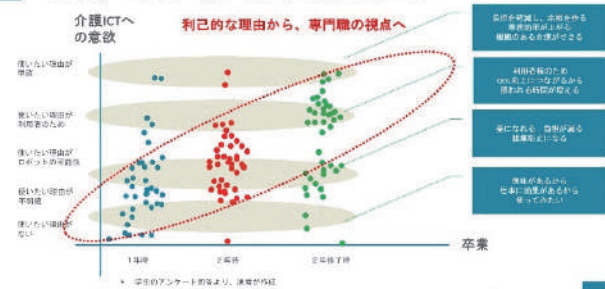
95%

修了時アンケート結果

「知らない」から不安になる。「知る」ことで、それは強力な武器になる。

25

「知る」ことと「使いたい」と思えること



26

成果：知識が不安を「武器」に変える



- ▶ 意識の激変：「知らない」からくる不安が、「知る」ことへの意欲に変わる。
- ▶ 動機の変化：「自分の腰痛予防」という利己的な理由から、「利用者のQOL向上・ケアの質の担保」という専門職としての視点へ。

27

学生の声：「ロボットは、より良いケアのための相棒」

- “業務に余裕ができることで、利用者に関わる時間が増える。”
- “根拠（エビデンス）のある介護ができるようになる。”
- “ICTは冷たい機械ではなく、人間がケアに集中するためのツールだと分かった。”

道具としての有用性を超え、ケアの質を高めるための「マネジメント資源」として認識している。

28

これからの介護福祉士に求められるもの

介護現場の未来を守る：令和7年度補正予算「医療・介護等支援パッケージ」の全容

人材確保：最大月額1.9万円相当の賃上げ支援

現場革新：ICT導入とサービス継続の支援

ICT導入補助率を「80%」へ引き上げ
従来の2/4から4/5（事業者負担20%）に増強し、研修センターや研修ソフト導入を集中支援。

サービス継続のための設備投資を補助
物流車庫や衣室に加え、ポータル管理システム、研修設備など1事業所20万円を補助。

訪問介護の提供体制を多角的に確保
中山間地域でのサテライト設置や、遠隔介護事業所による訪問介護の運営を支援に実施。

最大月額1.9万円
毎週1万円相当の賃上げに加え、生産性向上や現場環境改善で最大9千円を上乗せ。

補正予算の主要4施策の予算規模

① 賃金の上げ/雇用増進支援	1,920億円
② 介護事業所・施設のサービス継続	510億円
③ ICT・ITツール導入・活用支援	220億円
④ 訪問介護・ケアマネ提供体制確保	71億円

① 令和8年度補正予算を待たずに実施
2025年12月31日までの令和7年度まで、人件費負担軽減などの効果的な賃上げを実施します。

④ 対象は介護現場で働く幅広い職種
介護職だけでなく、看護士、リハビリ士、事務職、調理員なども対象の枠組みに含まれます。

生産性向上の取り組みが必須



これからの介護現場のマネジメント

『質の高い介護とは』を示し続ける
『介護職員の能力を引き出す』環境づくり

介護業界全体の課題
産学連携のオール介護で対応すべき

ご清聴いただき
ありがとうございました

- # 介護現場を支える卒業生のため
- # ICT介護推進をしたい
- # 介護+ICTではなく介護×ICT
- # 介護の価値を最大化

3 研修会に対する参加者意見（終了後アンケート）

参加者からのご意見はwebフォームより収集し、計51名からのご意見がありました。

1 ご所属先	回答数	割合
四年制大学	13	25.5%
専門学校	25	49.0%
短期大学	6	11.8%
福祉系高等学校	7	13.7%
全体	51	100.0%

2 ご回答者の職位等（複数回答可）	回答数	割合
I C T等を活用した教育を行っている教員	20	39.2%
介護テクノロジー教育を行っている教員	11	21.6%
学科長	9	17.6%
介護教員	11	21.6%
教務主任	4	7.8%
専攻長	2	3.9%
課程主任	1	2.0%
一般教員	1	2.0%
学校長	1	2.0%
副校長	1	2.0%
来年度教員として勤務	1	2.0%
全体	51	100.0%

3 ご担当されている科目（複数回答可）			
科目	回答数	科目	回答数
社会の理解	3	【高等学校】社会福祉基礎	2
介護の基本	17	【高等学校】介護福祉基礎	5
コミュニケーション技術	13	【高等学校】コミュニケーション技術	1
生活支援技術	28	【高等学校】生活支援技術（医療的ケアを含む）	4
介護過程	21	【高等学校】介護過程	3
介護実習	32	【高等学校】ころとからだの理解	4
介護総合演習	32	【高等学校】介護実習	5
ころとからだのしくみ	10	【高等学校】介護総合演習	4
認知症の理解	6	その他	3
発達と老化の理解	5		
障害の理解	5		
医療的ケア	14	全体	51

	5 研修会に参加して、介護福祉士養成教育に ICT や介護テクノロジーを活用・導入してみたいと思いましたが			
	ICT の活用・導入		介護テクノロジーの活用・導入	
是非、活用・導入してみたい	25	49.0%	24	47.1%
活用・導入してみたい	26	51.0%	26	51.0%
あまり活用・導入したくない	0	0.0%	0	0.0%
活用・導入したくない	0	0.0%	0	0.0%
無回答	0	0.0%	1	2.0%
全体	51	100.0%	51	100.0%

4-1 事例発表について、参考となったところ・ポイントがございましたらご記入ください
(自由記述)

キーワード	4-1 「参考となったところ」
連携	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の介護教育には、産学官が連携して、この分野の教育指導に取り組むことが必須だと強く感じました。 ・介護現場との連携により、実際に利用している職員から教えていただくこと、利用者体験・職員体験を両方向うことにし、参考になりました。 ・連携教育 擬似体験。 ・連携教育によりテクノロジー教育が効果的に実施できている事例が参考になった。 ・教育機関単独での学びは困難であり、地域や企業、施設との連携が必要であること、授業にどのように取り込んでいるかなどが参考になりました。 ・福祉用具の見学で外に出ていくことや企業とのタイアップ。 ・介護現場との連携をもっと密に行っていきたい。 ・愛知県立古知野高等学校 高木先生からのお話を伺い、地域と連携して学生の教育を行っていることに感銘を受けました。これからの時代は、共生社会が当たり前であり、支援する私たちが率先して地域と連携していかなければならないと感じました。 ・テクノロジーを生み出す側と教育側や現場との連携の意義について。 ・介護記録ソフトに関して、以前介護施設で使用していた会社に連絡した際、教育機関との連携は全く考えていないといった感じだったためあきらめておりましたが、県立高校さんの取組を見て負けたと感じました。教員の頑張り次第だと思いました。 ・高校の実習個人票オンライン指導。
今後について	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの先生方から、貴重な実践発表をいただきありがとうございました。どの実践発表も自分自身の実践に取り入れてみたいものばかりでした。 ・とても参考になりました。できることから実践していきたいと考えています。 ・ICT に向けた授業展開を検討したいと思った。 ・発想の展開が必要だと感じました。見方を変える。 ・自分の授業に対して、もっと工夫が必要だと改めて思った。 ・実際の機器を用いた学習と、現場で体験（見て終わるだけでなく、職員から話を伺うまで行われている）されていることに関して、映像教材だけで終わらせることなく、どうにか工夫して、実物を触れる機会を作っていきたいと思いました。 ・様々な ICT を活用されていて、授業に取り入れたいと考えました。貴重な発表をありがとうございます。 ・ICT 等を活用した介護福祉士養成教育に関する高木先生のご講演を拝聴し、多くの示唆を得ることができました。本校では現時点で ICT 機器の導入が十分ではありませんが、耐圧測定機器を用いた測定やデータ分析を授業に取り入れることで、学生の気づきを促し、アセスメントの視点をより広げる教育方法の可能性を強く感じました。今回の研修で得た学びを踏まえ、今後の授業改善に向けて具体的な取組を検討してまいりたいと考えております。

キーワード	4-1 「参考となったところ」
事例	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的にテクノロジーを授業で取り入れ、活用している事例やその効果をデータで示してください、非常に参考になりました。 ・各校の取組が事例で良く理解できた。 ・高等学校での授業事例について、詳しくお聞きすることができた。 ・具体的事例からイメージが付きやすかった。 ・学習活動への導入のきっかけとなる方法や取組みやすい事例など、現在、自分たちが実施している事柄を更に進めて行く方向性を感じることができた。 ・ICTの活用事例について、大変参考になりました。 ・生活支援技術、介護過程の展開に活用できるデジタル技術、ロイロノート、ケアカルテの実践例が参考になりました。 ・実践内容がわかりやすく、イメージしやすかった。
機器に関する理解	<ul style="list-style-type: none"> ・デジタル技術の種類と教育での活用方法について理解を深めることができた。 ・アプリやツールの紹介や、実際の使用事例、注意点など充実した発表でした。おかげさまで本校生徒をイメージしながらお話を聞くことができ、大変参考になりました。 ・ケアカルテについて。 ・教育にICT、AIなど、たくさんの道具を活用していることわかった。
授業の進め方	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な授業の進め方や学生たちの反応、変化。 ・授業の取り入れかた。 ・授業でのICTの活用方法。 ・実技の動画を撮影し見返す。 ・ICTを導入するだけでは教育の限界があること、業界や地域との連携が不可欠であることが印象に残りました。また、ICTを活かすための知識を身につけ、機器に触れる機会を設ける必要がある点も大変参考になりました。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTや介護ロボットの課題。 ・科学的裏づけに基づく介護。 ・アンケート調査に協力した学校数が想像以上に回収率が低かったことに驚きました。このことから取組姿勢ができていない学校とそうでない学校の差があり、ICT教育への姿勢がみえてくると思いました。 ・ICT等の講義はできても、やはり、コスト面で実際の機材を準備できないので、昨年度はスマート介護士のお試して2コマ(90分×2)導入した。パックになっているので導入しやすい。 ・介護福祉教育の展望について(愛知県立古知野高等学校の高木先生のスライド資料p21)。

4-2 事例発表について、より詳しく知りたい内容等がございましたらご記入ください
(自由記述)

キーワード	4-2「より詳しく知りたい内容等」
連携	<ul style="list-style-type: none"> ・企業や実習施設との連携方法。 ・連携教育を実施する時に最適なパートナーの選び方の詳細について。 ・産学連携の必要性が大きく、企業とのつながりやどのような企業や機関を選ぶことが良いのか?迷うことも多く推奨される事業所や機関、企業などがあると良い。 ・現場連携を推進する際は、教育現場、介護現場はどちら主導で行うべきですか。高校福祉科教員は、教員養成課程の兼ね合いで介護現場経験のある教員が少なく、現場の現状を適切に理解できる教員が少ない現状があると感じます。現場連携する上で教育と介護現場が共通認識を持って取り組むには、教育と介護現場の連携の在り方について、共通の目的の一つである「(最終的に)介護福祉士の資格取得を目指した介護人材の育成」に向け、両者を繋ぐための新たな制度やサポートや予算を含め、共通の指針を示す必要があるのではないかと考えます。
費用	<ul style="list-style-type: none"> ・私もいろいろな介護テクノロジーを取り入れたいと考えています。例えば、眠りスキャンや CAREKARTE を用いられていましたが、購入あるいはレンタルで使用されているのでしょうか。本学も研究費等の捻出が難しいためどのようにして使用できるようになっているのかなど、お教えいただければと思いました。 ・企業等と連携する際の費用等。 ・環境を整えるための予算等、言いにくいところかもしれませんがお話いただけると具体的検討に入りやすい。 ・高等学校に介護テクノロジーを駆使した機器を導入するに当たって財源は?実際どれくらいのものか?具体的に聞きたい。
機器やアプリ、使用方法など	<ul style="list-style-type: none"> ・ロイロノート、ケアカルテの使用法、活用方法を詳しく知りたいと思いました。 ・ケアカルテでの実習記録ができること。 ・介護記録ソフト、他におすすめはあるのか教えていただくと助かります。 ・介護記録、特に介護過程の ICT 化についても興味がございます。
プロセスや課題	<ul style="list-style-type: none"> ・例えば Microsoft teams やロイロノートなど、導入するまでのプロセスや費用、校内での共有事項、準備などが伺えたらよいと思いました。 ・見学先、協力していただける施設の開拓、それに伴う費用、時間配分、授業内にかに入れ込むか、その授業の効果について(在学中・卒業後)、課題についてより具体的に知りたいと思いました。
シラバス・カリキュラム	<ul style="list-style-type: none"> ・開講されている科目のシラバスを参考に知りたかった。 ・スマート介護士資格を取得するための費用やカリキュラムを知りたいと思いました(自分で情報収集しようと思います)。
AI	<ul style="list-style-type: none"> ・生成 AI の活用方法と注意点、介護テクノロジーと倫理。 ・介護過程を AI で行うという事例をもう少し詳しく聞きたかったです。介護過程という思考の段階を、AI がどう判断するのか興味があります。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・今ではなく、(近い)将来的に導入することになった場合に知りたいことが絞れてくると思う。 ・今回参加された、学校・団体などをお知らせいただければありがたいです。ICTなどを進めるうえでの情報交換などができればと考えます。 ・今後も幅広くアプリやサービス、テクノロジーなどの紹介をしていただき、まだ知らなかったツールに触れ、活用を検討して行きたいです。 ・今回の事例を発表された学校では、留学生も含まれているか?日本人と留学生ではテクノロジーに関しての取組み方や考え方、留意点などに違いはあるか? ・どの事例も ICT の活用は、生産性、有効が高いと発表があったが、具体的な判断基準などがわかりにくかった。抽象的な報告だった。教育的観点から詳しく知りたい。

4-3 研修を受講し、新たな気づきや理解等がございましたらご記入ください（自由記述）

キーワード	4-3 「新たな気づきや理解等」
自校で取り入れる	<ul style="list-style-type: none"> ・現在行っているところとからだのしくみの授業に+できる点があることに気づかされました。ありがとうございました。 ・現在 Google アプリを活用しているが、様々なものを試行していきたいと思いました。また少しずつ取り組んでいき、出来る範囲で進めていきたいと思います。 ・事例発表やグループディスカッションを通し、先生方の実践から自職場で取り組みそうな内容、アイデアを考える機会になりました。 ・介護実習記録のオンライン化について、グループディスカッションで手がかりを得られた。 ・福祉用具の展示会などに参加しても良いと思った ・国際福祉機器展には毎年参加し、学生に「見る・触れる・疑似体験する」機会を提供してきました。しかし、これまでは、どのような機器があるのかといった表面的な理解にとどまり、利用者の思いや介護援助への活用という視点まで十分に深められていなかったと感じています。今後は、利用者の立場や思いを踏まえた学びにつなげるため、学習方法を見直し、授業改善に取り組んでいきたいと考えております。 ・導入するために資金繰りや無料で行われている出前授業の取り入れ方。
重要性を認識	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTの重要性を、研修を通して実感いたしました。 ・これからの介護現場では、ICTの活用が必須となり、教育課程の中にどれだけ取り入れるかが重要になることを改めて感じました。 ・学ぶ環境を整えることがいかに大切か、今の時代に適した指導が大切か痛感した。「便利だな」で終わるのではなく、生み出された時間をいかに利用者支援に使えるかを学生に示すことが大切であるということ・産学連携はとても意義深いと思われるが、地域格差が大きく、また専門学校で機器を導入する予算が確保できない、それよりも学生確保が優先という意見を聞き、同じであると感じた。しかし、教科書には確実に介護テクノロジーに関する記載がなされており、国試対策もしなければならず、お金がないを言い訳にできないとも思った。限られた時間とお金でいかに学生に学ばせるかが大切と感じた。 ・介護現場と教育は不可欠なため、時代に沿った教育の必要性を感じた。
連携	<ul style="list-style-type: none"> ・企業とのタイアップ、もっともっと発信していくことの必要性を感じました。 ・様々な機関と協力をし、生徒の学びに繋げる重要性を改めて感じた。 ・ICT等を活用した教育の導入と継続には、介護施設、企業、研究機関などとの連携が不可欠であることを実感した。 ・学校内だけで授業を行うのではなく、様々な外部業者、施設と連携し、授業を行う必要性を感じました。産官学連携について具体的に考え直そうと思います。
教育への効果	<ul style="list-style-type: none"> ・要介護者像のイメージ化が困難な学生への教育方法として、デジタル機器を活用し、可視化することにより、学びや気づき、アセスメント力向上につながると理解しました。 ・体圧測定・歩行分析などを可視化することで、どのようなポジショニングをすればよいのかの理解度が深まると感じました。 ・ICTなどを含むいろいろなツールを活用して、科学的根拠に基づくケアを目指して、学生の分析力をあげることを更に強化したいと感じた。
ICT活用の留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTを活用するには教員の力量も必要だということ。 ・ICTは手段であり、いかに尊厳を保持していくかを理解できた。 ・道具に振り回されないようにするという視点です。

キーワード	4-3 「新たな気づきや理解等」
自校の課題	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の ICT の活用状況が進んでいない現状と、さらに効果的に活用していくためにできることを学ばせていただきました。 ・導入していきたい。導入していく必要性を感じているが、導入するための下調べや準備、アポイントメントからプラン、実施にいたるまで教育現場の各指導者の負担が非常に大きいように感じる。また、費用面や予算など課題が山積している。 ・所属学科では留学生が8～9割いるため、日本語の理解・記述指導に時間を取られて、テクノロジー教育への取組が遅れているように感じます。今後、どのように授業に組み込んでいくかが課題です。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・介護テクノロジーが介護のイメージを変えてほしいと思いました。 ・学校により導入率が違う、また、その教授法に格差があり、得られる学びが違う。 ・グループワークで感じたのは、ICT 教育をする上での環境整備 (iPad や PC) がまずは大事で、学生に任意で準備してもらおう形ではなかなか進まないということでした。やはり同じもの、同じバージョン、同じ操作性の中で教員と学生と一緒に学びながら行うのが良いと感じました。

6 その他、ご意見がございましたらご記入ください (自由記述)

キーワード	6 「その他のご意見」
開催時期・開催方法	<ul style="list-style-type: none"> ・実習や年度末で会議等が重なっており可能でしたらオンデマンドの配信等を希望します。 ・開催時期は3月から変更されないのでしょうか？3月開催であれば、中旬だと参加しやすいです。 ・対面とオンラインの両軸は、今後も並走していきたい。 ・学校行事が行われていたため、断片的にしか参加できなかった。おそらく、同様の方もいたと思うので、動画配信等で再度見ることができるようにしてほしい。
今後も研修会の開催を	<ul style="list-style-type: none"> ・今回のような最先端の介護教育に関する研修がありましたら、ぜひ参加させていただき、自己研鑽したいです。 ・今後も、研修会などの案内をぜひお願いします。 ・先月、愛知県立古知野高等学校のマイスターハイスクール「科学的介護の実践」「介護 DX まとめ」の公開授業に参加し、今回、公開授業の内容を踏まえて、さらに貴重な学びを得ることが出来ました。今後もこのような機会があればぜひ参加したいと思います。私は、次年度「介護現場と繋がりある介護教育の実践」に向け、産業教育分野で研究を行う予定です。引き続き、県内外の取組から学び、自職場での実践につなげていきたいと思ひます。引き続き、ご指導どうぞよろしくお願いいたしします。お忙しいところありがとうございました。
グループディスカッションのファシリテーターが不在	<ul style="list-style-type: none"> ・大変良い研修でした。ただ、オンラインでブレイクアウトルームのディスカッションでは、ファシリテーターがいらっしゃると話し合いがスムーズになるのではと感じました。自分の入ったグループは、いずれも沈黙の時間が多く、自分が仕切って良いものかとお互い試案する時間が多かったです。 ・オンラインの方でグループディスカッションの際、ファシリテーターもいない状況であることを説明もなく始まったので、最初の10分くらいはだれも何も話さない状況が続いた。話し始めたが、時間もなく終わったので、グループに分ける際には説明を細かにしてから分かれたほうが良かったと思う。

キーワード	6 「その他のご意見」
情報交換ができた	<ul style="list-style-type: none"> ・ご準備など大変であったと思いますが、興味関心のある内容を勉強をさせていただきました。また、グループワークもあり、他校の先生方との情報交換ができて研修を受講したという実感を得ることができました。ありがとうございました。 ・研修会に参加させていただきありがとうございました。オンラインで参加させて頂きましたが、グループディスカッションで直接、他の先生方とお話することができて実情や様々な取組をお聞きすることができて良かった。ディスカッションをさせて頂いた先生と直接ご連絡をとってみたい先生もいらっしまったので今後、このような機会があれば、何か方法があれば良いと感じた。また事前に名前の登録を行ったが、本人の同意があればかまわないが、そこに都道府県や所属などがあると後々、連絡を取りたい場合に公の方法として可能なのではないかと思う。
取り組むには課題がある	<ul style="list-style-type: none"> ・導入を考えていても、資金がなく難しい。そのため導入するための補助金等や実践で使える機器の貸出し補助の説明等があったら参考にしたい。 ・スマート介護士は導入しやすいが、教育費をどのように捻出するかが問題。所属の教員が担当することが前提であるので、別途予算を検討しなければならない。 ・全ての養成施設等が介護テクノロジーが学べるだけの充実した環境ではないと思う。介護現場でも小さい事業所などはまだまだ導入されていない、またはできない現場も多い。介護実習でも導入している事業所へ行くと実際に体験させてもらうこともあるが、そこで学生間の学びの差が出てきている。実習前に学生にどこまでの知識や技術を学ばせることができるのか、教員だけでは限界があるため、外部事業所（福祉用具・介護ロボット・ICT 関連業者・導入施設）との連携を強化し、学びの機会を増やしていきたいと感じました。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・①研修テーマ、演題など介護テクノロジーに ICT が含まれます。用語の定義づけを整理したら良いのでは？②介護養成協会のアンケート結果の動向、実態がわかり良かったです。 ・貴重な事例を紹介していただき、ありがとうございました。介護過程の ICT 化の具体例がありましたら、ご教授ください。 ・当日は仕事の都合で Zoom ミーティング参加ができず、後から資料のみ閲覧させていただきました。 ・これからも、よろしくお願いします。

第5章 資料編

1 アンケート調査票

1：貴校の基本属性

学校名	
学科・コース名	
所在都道府県	

質問1 学校種別をお教えてください。

(番号は1つ)

1. 四年制大学	4. 福祉系高等学校
2. 短期大学	5. その他()
3. 専門学校	

↓ 「5. その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

質問2 貴校の設置主体をお教えてください。

(番号は1つ)

1. 都道府県・市町村	2. 学校法人
3. 社会福祉法人	4. その他()

↓ 「4. その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

質問3 この調査にご回答いただく方の職位（お立場）等をお教えてください。（複数回答可）

(回答例→選択肢②③の場合は ②、③ 又は ②、③のように記載)

↓ 「5. その他」を選んだ場合は職位（お立場）について記入ください

【選択肢】

1. 学科学長
2. 教務主任
3. ICT等を活用した教育を行っている事務
4. 介護ロボットのセンサー、AI、記録ソフトなどを用いた介護実践についての調査を行っている教員
5. その他(職位(お立場))

質問4 介護福祉士養成にかかわる教育年数をお教えてください。

	年
--	---

質問5 介護福祉士養成に関係する学科、コースの教員数をお教えてください。（実人数）

	人
専任教員	
その他の教員	人

令和7年度老人保健健康増進等事業
介護福祉士養成課程におけるICTを活用した教育に関する調査研究事業

**介護福祉士養成課程におけるICT等を活用した教育
及び介護テクノロジー教育に関する実態調査**

●本調査は、「介護福祉士養成課程におけるICTを活用した教育のあり方に関する調査研究事業」
(厚生労働省 令和7年度老人保健健康増進等事業) において行われる調査です。

●本調査は、以下の2つの視点で質問を構成しています。

視点1：ICT等を活用した教育
→教員がICT等を活用した教育を(どのように)行っているか
→調査票4ページ、質問7～

視点2：介護ロボット、センサー、AI、記録ソフトなどを用いた介護実践についての教育
→生徒・学生への介護テクノロジー³⁾に関する教育を(どのように)行っているか
→調査票14ページ、質問13～

※介護テクノロジー
移乗支援、移動支援、排泄支援(排せつ器・検知)、見守りセンサー、コミュニケーションロボット、
入浴支援、介護業務支援(記録ソフト等)、機械制御支援、食事・栄養管理支援、認知症生活支援・認
知症ケア支援、その他ICT(インカム、ナースコール)など

●回答のご記入にあたって

- ・本調査は、学部長、教務主任、「ICT等を活用した教育」や「介護ロボット、センサー、AI、記
録ソフトなどを用いた介護実践についての教育」を行っている先生に回答をお願いいたします。
- ・回答方法は2つあり、①ウェブ回答、②エクセル回答 のいずれか1つの方法を選択してご回答くだ
さい。

①ウェブ回答：以下にアクセスをして回答することが可能です。(途中保存と再開が可能)
<https://common-research.com/kaiyo2025>
※ウェブ回答はパソコンでの回答を推奨します。

②エクセル回答：以下よりエクセルファイルをダウンロードして回答し、メール送信にて回答する
<https://www.common.jp/dl/kaiyo/index.html>
メール送信先: kaiyo@common.jp

●回答の締切は**令和7年11月14日(金)**です

●お問い合わせ
公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 事務局
東京都文京区本郷3-8-10 藤和シティコープ新茶ノ水2階
TEL: 03-3830-0471 FAX: 03-3830-0472
担当: 栗原、田中 kaiyokyo-office@kaiyokyo.net

Ⅱ. 学習管理システム(LMS)について

質問 6 貴校では、学習管理システム (LMS) (課題提示、レポート提出、教材共有などを行う仕組み) を導入していますか。

20の割合

1. 導入している (緑色は1つ)
 2. 導入していないが、導入予定
 3. 導入していないし、導入予定もない

「2. 導入していないが、導入予定」を選んだ場合は予定年月をお答えください
 ※和暦でご記入ください
 例: 63

予定年月

年 月

「2. 導入していないが、導入予定」を選んだ場合は「数字」を記入 (複数回答可)

「11. その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

質問 6-1 「導入している」場合、どのような活用をしていますか。(複数回答可)

「回答例→選択肢2と3の場合は 2, 3 又は 2, 3のように記載」

「11. その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

【選択肢】

1. 課題提示
 2. レポート提出・管理
 3. 出欠管理
 4. 記録や教材の共有
 5. 生徒・学生への個別指導・フォロー
 6. 生徒・学生への連絡
 7. 生徒・学生からの連絡
 8. 生徒・学生同士の連絡
 9. 情報共有
 10. 授業アンケート
 11. その他 ()

質問 6-2 「導入している」場合、どのような効果がありますか。(複数回答可)

「回答例→選択肢2と3の場合は 2, 3 又は 2, 3のように記載」

「8. その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

【選択肢】

1. 生徒・学生への迅速な情報提供・共有
 2. 各種管理の効率化・職業性
 3. 生徒・学生への個別対応の充実
 4. 生徒・学生の学習の進捗や到達点の把握
 5. 成績結果の集計・採点の自動化等による負担軽減
 6. 学習状況に対する詳細な客観性の把握
 7. 研修データの活用
 8. その他 ()

質問 6-3 質問6で学習管理システム (LMS) を「導入していないし、導入予定もない」と回答した場合、導入しない理由についてお聞かせください。(複数回答可)

「回答例→選択肢2と3の場合は 2, 3 又は 2, 3のように記載」

「7. その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

【選択肢】

1. 法人・教団等の方針
 2. 必要感を感じていない
 3. 組織の中で目的・効果が共有されていない
 4. 教員の対応が難しい
 5. 機器や通信などの環境が整わない
 6. 予算の確保が難しい(補填を含めて)
 7. その他 ()

Ⅲ. 【視点1】ICT等を活用した教育

質問 7 貴校の介護福祉士養成課程における以下の科目において、ICT等のデジタル機器・技術を活用した教育 (授業) が行われていますか。

1. 活用している (赤色は1つ)
 2. 活用していないが、今後活用予定
 3. 活用していないし、今後活用予定もない

① A～Sの科目について活用状況をプルダウンで選んでください

② 活用している又は今後活用予定の場合は、使用している (使用予定の) 機器・技術の番号を選んでください

③ 使用している機器・技術に「その他」がある場合は具体的に記入してください

● 選択科目、独自科目、特別講義などは★にご記入ください。

● 高等学校は、【高等学校】の科目についてご回答ください。

② 使用している(使用予定の) ICT等のデジタル機器・技術【選択肢】

1. 学習管理システム(LMS)
 2. AI
 3. VR, ARなどの機器・技術
 4. フォーター
 5. 動画教材
 6. オンデマンド教材
 7. デジタル教科書
 8. パソコン
 9. タブレット
 10. スマートフォン
 11. 意見集約やアンケートツール
 12. 双方向コミュニケーションツール(チャットなど)
 13. その他 ()

領域	A～Sの科目	① ICT等のデジタル機器・技術活用状況 (必須回答:プルダウン)	② 使用している (使用予定の) 機器・技術の番号 (複数回答可)	③ 使用している機器・技術に「13. その他」がある場合は具体的に
回答例	D)生活支援技術 (高等学校)生活支援技術 (医療的ケアを含む)	1. 活用している	1, 5, 10, 13	△△△△△△△△
領域 / 人間と社会	A)人間の尊厳と自立			
	B)人間関係とコミュニケーション			
	C)社会の理解			
	D)[高等学校]社会の理解			
	★E)選択科目 (科目番号を入れてください)			
	科目名			
	★F)選択科目 (科目番号を入れてください)			
	科目名			

②使用している(使用予定の) ICT等のデジタル機器・技術【選択肢】

- 1. 学習管理システム(LMS)
- 2. AI
- 3. VR、ARなどの機器・技術
- 4. アバター
- 5. 動画教材
- 6. オンデマンド教材
- 7. デジタル教科書
- 8. パソコン
- 9. タブレット
- 10. スマートフォン
- 11. 意見集約やアンケートツール
- 12. 双方向コミュニケーションツール(チャットなど)
- 13. その他()



領域	A～Sの科目	① ICT等のデジタル機器・技術活用状況 (必須回答、フルダウン) 【選択肢は以下の3つ 1. 活用している 2. 今後活用予定 3. 活用していない	② 使用している(使用予定の) 機器・技術の番号 (複数回答可)	③ 使用している機器・技術に 「13. その他」がある場合は 具体的に
基礎				
領域	⑤ 介護の基本 【高等学校】介護福祉基礎 【高等学校】コミュニケーション技術 【高等学校】コミュニケーション技術 【高等学校】生活支援技術 (医療的ケアを含む)			
領域	⑥ 介護過程 【高等学校】介護過程 【高等学校】介護総合演習 【高等学校】介護総合演習 【高等学校】介護実習 【高等学校】介護実習			
領域	⑦ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑧ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑨ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑩ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑪ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑫ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑬ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑭ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑮ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑯ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑰ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑱ 高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康 【高等学校】高齢者の生活と健康			
領域	⑲ 独自の科目、特別講義 【高等学校】独自の科目、特別講義 【高等学校】独自の科目、特別講義 【高等学校】独自の科目、特別講義 【高等学校】独自の科目、特別講義			
領域	⑳ 独自の科目、特別講義 【高等学校】独自の科目、特別講義 【高等学校】独自の科目、特別講義 【高等学校】独自の科目、特別講義 【高等学校】独自の科目、特別講義			

続く質問8について、前提となる事項を、以下に解説します

【参考】「介護福祉士養成課程新カリキュラム教育方法の手引き」※では、コミュニケーション技術および生活支援技術の科目の“想定される教育内容の例”として、情報の活用と管理におけるICT活用、介護ロボットを営んだ福祉用具の活用が示されています。

※日本介護福祉士養成協議会、2019

質問8 質問7(4～5P)において、H)コミュニケーション技術、I)生活支援技術について「活用している」「今後活用予定」である場合に伺います。該当しない場合は、質問9へお進みください。

(1) H)コミュニケーション技術について、具体的なICT等のデジタル機器・技術等の活用状況をお教えください。

①活用の時期・期間

1の場合同年(数字を記入) 30の場合 (数字は1つ)

1. ()年頃から
2. 今年度から
3. 今後活用予定

「1. ()年頃から」→「10. 前年からお教えください」

「2. 今年度から」→「11. 今年度から」

「3. 今後活用予定」→「12. 今年度から」

※和暦でご記入ください
例：R8

②活用のきっかけ、活用を後押ししていること(複数回答可)

「10. その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

「回答例→選択肢2と3の場合は、2、3 または、2、3のように記載」

- 【選択肢】
- 1. 学習管理システム(LMS)の導入
 - 2. 補助金や助成金の活用
 - 3. 研修等からの支援や励励
 - 4. 自治体との協働、自治体の後押し
 - 5. 企業との協働
 - 6. 介護現場との協働
 - 7. 派遣主体が同じ法人の介護事業所からの支援や励励
 - 8. 教員の研修、FD
 - 9. 科目関連連携推進
 - 10. その他()

③シラバス掲載の有無

1. 有 2. 無

④授業における具体的な使用方法や使用場面

授業における具体的な使用方法や使用場面

⑤留意点または工夫していること

留意点または工夫していること

⑥課題

課題

⑦期待される効果、効果の把握・測定方法

期待される効果、効果の把握・測定方法

⑧今後の展開と期待

今後の展開と期待

(2) **D_生活支援技術**について、具体的なICT等のデジタル機器・技術等の活用状況をお教えてください。

①活用の時期・期間

1の割合	2の割合	3の割合
(書きは1つ)	(書きは1つ)	(書きは1つ)
1. ()年以前から	2. 今年度から	3. 今後活用予定

「1. ()年以前から」→開始年をお教えてください
 「3. 今後活用予定」→予定年月をお教えてください

年 前 年 月 (数字を記入)
*印刷でご記入ください

②活用のきっかけ、活用を後押ししていること(複数回答可)

(回答例→選択肢2と3の割合は 2、3 又は 2、3のように記載)

「10. その他」を運んだ場合は具体的に記入ください

【選択肢】

1. 学習管理システム(LMS)の導入	6. 介護現場との協働
2. 補助金や助成金	7. 設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働
3. 標準事業等の指定校	8. 教員の研修、FD
4. 自治体との協働・自治体の後押し	9. 科目別連携推進
5. 企業との協働	10. その他()

③シラバス掲載の有無

(書きは1つ) 1. 有 2. 無

④授業における具体的使用方法や使用場面

(書きは1つ)

⑤留意点または工夫していること

(書きは1つ)

⑥課題

(書きは1つ)

⑦期待される効果、効果の把握・測定方法

(書きは1つ)

⑧今後の展開と期待

(書きは1つ)

質問 9

質問 7 (4~5P)において、「活用している」「今後活用予定」と回答した科目のうち、最も活用されている、又は、**継続的・持続的な活用がなされている(予定を含む)科目**について、

→**コミュニケーション技能、生活支援技術以外の3つの科目**を選び、科目ごとに具体的な状況をお教えてください。

★次ページから回答できます。1ページ=1科目となっています

質問9__1科目目 (ICT活用)

①科目名 (コミュニケーション技術、生活支援技術以外)

②活用の時期・期間 (番号は1つ)

1. ()年前から
2. 今年度から
3. 今後活用予定

10の場合 → 10. その他 ()

30の場合 (番号は1つ)

「1. () 年前から」→開始年をお教えください
「3. 今後活用予定」→予定年月をお教えください

年 月 (数字を記入)
※和暦でご記入ください
例: R8

③活用のきっかけ、活用を後押ししていること(複数回答可)

(回答例→選択肢2と3の場合は 2, 3 又は 2, 3のように記載)

↓ 「10, その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

- 【選択肢】
1. 学習管理システム(LMS)の導入
 2. 補助金や助成金
 3. 推進事業等の指定校
 4. 自治体との協働・自治体の後押し
 5. 企業との協働
 6. 介護現場との協働
 7. 設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働
 8. 教員の研修、FD
 9. 科目間連携推進
 10. その他()

④シラバス掲載の有無 (番号は1つ)

1. 有 2. 無

⑤授業における具体的使用方法や使用場面

⑥留意点または工夫していること

⑦課題

⑧期待される効果、効果の把握・測定方法

⑨今後の展開と期待

質問9__2科目目 (ICT活用)

①科目名 (コミュニケーション技術、生活支援技術以外)

②活用の時期・期間 (番号は1つ)

1. ()年前から
2. 今年度から
3. 今後活用予定

10の場合 → 10. その他 ()

30の場合 (番号は1つ)

「1. () 年前から」→開始年をお教えください
「3. 今後活用予定」→予定年月をお教えください

年 月 (数字を記入)
※和暦でご記入ください
例: R8

③活用のきっかけ、活用を後押ししていること(複数回答可)

(回答例→選択肢2と3の場合は 2, 3 又は 2, 3のように記載)

↓ 「10, その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

- 【選択肢】
1. 学習管理システム(LMS)の導入
 2. 補助金や助成金
 3. 推進事業等の指定校
 4. 自治体との協働・自治体の後押し
 5. 企業との協働
 6. 介護現場との協働
 7. 設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働
 8. 教員の研修、FD
 9. 科目間連携推進
 10. その他()

④シラバス掲載の有無 (番号は1つ)

1. 有 2. 無

⑤授業における具体的使用方法や使用場面

⑥留意点または工夫していること

⑦課題

⑧期待される効果、効果の把握・測定方法

⑨今後の展開と期待

質問 9_3 科目 (ICT活用)

①科目名 (コミュニケーション技術、生活支援技術以外)

②活用の時期・期間 (※番号は1つ)

1の情况 年 前 から 年 前 から

2の情况 年 前 から 年 前 から

3の情况 年 前 から 年 前 から

「1.() 年 前 から」→開始年をお教えください
 「2.() 年 前 から」→開始年をお教えください
 「3.() 年 前 から」→開始年をお教えください

③活用のきっかけ、活用を後押ししていること (複数回答可)

(回答例→選択肢2と3の場合) 2, 3 又は 2, 3のように記載)

↓「10, その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

【選択肢】

- 1.学習管理システム(LMS)の導入
- 2.補助金や助成金
- 3.推進事業等の指定校
- 4.自治体との協働・自治体の後押し
- 5.企業との協働
- 6.介護現場との協働
- 7.設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働
- 8.教員の研修、FD
- 9.私自関連博修進
- 10.その他()

④シラバス掲載の有無 (※番号は1つ) 1. 有 2. 無

⑤授業における具体的使用方法や使用場面

⑥留意点または工夫していること

⑦課題

⑧期待される効果、効果の把握・測定方法

⑨今後の展開と期待

質問 10 貴校の介護福祉士養成課程の教育において、関心があるICT等のデジタル機器・技術等はありませんか。(複数回答可)

(回答例→選択肢2と3の場合) 2, 3 又は 2, 3のように記載)

↓「13, その他」を選んだ場合は具体的に記入ください

【選択肢】

- 1.学習管理システム(LMS)
- 2.AI
- 3.VR、ARなどの機器・技術
- 4.タブレット
- 5.動画教材
- 6.オンライン教材
- 7.デジタル教科書
- 8.パソコン
- 9.タブレット
- 10.スマートフォン
- 11.意見集約やアンケートツール
- 12.双方向Eメール、コミュニケーションツール(チャットなど)
- 13.その他()
- 14.その他

質問 11 (1) これまで、貴校は介護福祉士養成課程の教育において、ICT等のデジタル機器・技術の活用に積極的に取り組んできましたか。

(※番号は1つ)

- 1.積極的に取り組んできました
- 2.取り組んできた
- 3.あまり取り組んでこなかった
- 4.全く取り組んでこなかった

(2) 今後、貴校は介護福祉士養成課程の教育において、ICT等のデジタル機器・技術の活用に積極的に取り組んでいきたいですか。

(※番号は1つ)

- 1.是非、取り組みたい
- 2.取り組みたい
- 3.あまり取り組みたたくない
- 4.全く取り組みたたくない

質問 12 貴校において、以下のア～セの要因は、介護福祉士養成課程におけるICT等のデジタル機器・技術等活用の障壁となっていますか。ア～セについて、あてはまるセルに○をしてください。

	障壁となっている				障壁となっていない			
	1 とてもあてはまる	2 あてはまる	3 あてはまる ない	4 全くあてはまる ない	1 とてもあてはまる	2 あてはまる	3 あてはまる ない	4 全くあてはまる ない
ア) 法人・設置者の方針								
イ) 必要性を感じていない								
ウ) 組織の中で目的・効果が共有されていない								
エ) デジタル機器・技術等の活用をした授業のデザインができない								
オ) 授業時間数に余裕がない								
カ) 他の科目、教員との連携が難しい								
キ) 教員のデジタル機器等に対する苦手意識								
ク) マニュアルやノウハウがない								
ケ) 推進する教員、キーパーソンが不在								

	障害となっていない			
	1 とても あてはまる	2 あて はまる	3 あまり あてはま らない	4 全く あてはま らない
コ) 聴力機器や企業がない・探せない				
サ) 介護現場との連携が難しい				
シ) 機器や通信などの環境が整わない				
ス) 機器のメンテナンスが難しい				
セ) 予算の確保が難しい(維持を含めて)				

これらのほかにも、貴校においてデジタル機器・技術等の導入・活用を難しくしている要因があればお教えください。

IV.【視点2】 介護ロボット、センサー、AI、記録ソフトなどを用いた介護実践についての教育

質問 13 貴校の介護福祉士養成課程における以下の科目において、介護ロボット、センサー、AI、記録ソフトなど（以下、「介護テクノロジー」と表記）を用いた介護実践について教育を行っていますか。

- ① A～Sの科目について介護テクノロジーを授業・実習で取り扱っているかをプルダウンで選んでください
- ② 授業・実習で取り扱っている又は取り扱う予定の場合は、取り扱っている(予定の)介護テクノロジーの番号を選んでください
- ③ 介護テクノロジーに「その他」がある場合は具体的に記入ください
- 選択科目、独自科目、特別講義などは★にご記入ください。
- 高等学校は、【高等学校】の科目についてご回答ください。

② 授業・実習で取り扱っている(取り扱う予定の)介護テクノロジー【選択肢】

- 1. 移動・移動支援
 - ：自動運転の車いすや歩行補助ロボットなど
 - ：排洩状況の把握・予測・検知システムなど
- 2. 排洩支援(予測・検知を含む)
- 3. 見守りセンサー・システム
 - ：センサーによる見守りなど
- 4. コミュニケーションロボット
 - ：利用者とコミュニケーション支援など
- 5. 入浴支援
 - ：入浴補助機器、温風管理システムなど
- 6. 介護記録・情報共有支援
 - ：介護記録アプリ、クラウド型情報共有システムなど
- 7. 業務支援
 - ：人手不足解消や業務効率化を図る管理システムなど
- 8. 機能訓練・情報支援
 - ：身体機能維持・向上を目指す機器
- 9. 食事・栄養管理支援
 - ：食事管理や栄養改善を支援する機器
- 10. 認知症生活支援・認知症ケア支援
 - ：認知機能低下の高齢者を支援する機器
- 11. その他のICT
 - ：インカム、ナースコールなど
- 12. その他()

単位	A～Sの科目	①介護テクノロジーを 授業・実習で 取り扱っているか (※回答:プルダウン)	②授業・実習で取り扱っ ている(予定の) 介護テクノロジー (複数回答可)	③授業・実習で取り扱っている (予定の)介護テクノロジーに 「12. その他」がある場合は 具体的に
回答例	D)生活支援技術 【高等学校】生活支援技術 (医療的ケアを含む)	取り扱っている (※回答:プルダウン) 1. 取り扱っている 2. 取り扱っていないが今後 取り扱う	1. 4 (複数回答可)	
備考	A)人間の尊厳と自立			
	B)人間関係とコミュニケーション			
	C)社会の理解			
	D)【高等学校】社会の理解			
	★E)選択科目 <small>科目番号を記入してください</small>			
	科目名			
	★F)選択科目 <small>科目番号を記入してください</small>			
	科目名			

②授業・実習で取り扱っている(取り扱う予定の)介護テクノロジー【選択肢】

- 1. 移乗・移動支援
- 2. 排泄支援(予期・告知を含む)
- 3. 見守りセンサーシステム
- 4. コミュニケーションロボット
- 5. 入浴支援
- 6. 介護記録・情報共有支援
- 7. 業務支援
- 8. 機能訓練支援
- 9. 食事・栄養管理支援
- 10. 認知症生活支援、認知症ケア支援
- 11. その他のDICT
- 12. その他()

- : 自動運転の車いすや歩行補助ロボットなど
- : 排泄状況の把握・予期・告知システムなど
- : センサーによる見守りなど
- : 利用者とのコミュニケーション支援など
- : 入浴補助機器、遠隔管理システムなど
- : 介護記録アプリ、クラウド型情報共有システムなど
- : 人手不足解消や業務効率化を図る管理システムなど
- : 身体機能維持・向上を目的する機器
- : 食事管理や栄養改善を支援する機器
- : 認知機能低下の高齢者を支援する機器
- : インカム、ナースコールなど

領域	A～Sの科目	①介護テクノロジーを 取り扱っているか (※複数選択可)	②授業・実習で取り扱っ ている(予定の) 介護テクノロジー (複数回答可)	③授業・実習で取り扱っている (予定の)介護テクノロジーに 「12. その他」がある場合は 具体的に
領域 の こ こ ろ を め ざ ら に	G)介護の基本	授業・実習で 取り扱っているか (※複数選択可) 1. 取り扱っている 2. 取り扱っていないが今後 取り扱う予定		
	H)介護福祉史			
	I)介護の基礎			
	J)介護過程			
	K)介護福祉と医療			
	L)介護実習			
	M)ここから先のしくみ 【高等学校】 理解			
	N)発達と老化の理解			
	O)認知症の理解			
	P)障害の理解			
領域 の こ こ ろ を め ざ ら に	Q)医療的ケア			
	R)通告科目、特別講義 (科目を記入してください)			
	科目名 ★S)独自科目、特別講義 (科目を記入してください)			
特別講義	科目名			

質問 14 質問13 (14～15P)において、H)コミュニケーション技術、I)生活支援技術について、授業・実習で「取り扱っている」「今後取り扱う予定」である場合に向いています。該当しない場合は、質問15へお読みください。

(1) H)コミュニケーション技術について、授業・実習における具体的な教育の状況をお答えください。

①教育の時期・期間

1の情况 (番号は1つ) → 2の情况 (番号は1つ) → 3の情况 (番号は1つ)

1. ()年頃から
2. 今年度から
3. 今後取り扱う予定

「1. ()年頃から」→開始年をお答えください
「3. 今後取り扱う予定」→予定年をお答えください

年 前 年 月 (数字を記入)
※期間をご記入ください
例: R8

②取り扱いきっかけ、活用を後押ししていること(複数回答可)

(回答例→選択肢とSの場合は 2, 3 または 2, 3のように記載)

「10. その他」を選んだ場合は具体的に記入してください

【選択肢】

- 1. 学習管理システム(LMS)
- 2. 補助金や助成金
- 3. 推進事業等の指定校
- 4. 自治体との協働、自治体の後押し
- 5. 企業との協働
- 6. 介護現場との協働
- 7. 装置主体が同じ法人の介護事業所からの支援・協働
- 8. 教員の研修、PD
- 9. 科目関連書籍
- 10. その他()

③シラバス掲載の有無

(番号は1つ) → 1. 有 2. 無

④授業における具体的使用方法、教育内容

⑤留意点または工夫していること

⑥課題

⑦期待される効果、効果の把握・測定方法

⑧今後の展開と期待

質問15_1 科目目 (介護テクノロジー)

① 科目名 (コミュニケーション技術、生活支援技術以外)

② 教育の時期・期間 (単位は1つ)

1の情况 3の情况

1. () 年前から
2. 今年度から
3. 今後取り扱う予定

「1. () 年前から」→開始年をお教えください
「3. 今後取り扱う予定」→予定年月をお教えください

年 前 年 月 (数字を記入)

※和図でご記入ください

③ 取り扱いきっかけ、活用を後押ししていること(複数回答可)

(回答例→選択肢2と3の場合は 2, 3 又は 2, 3のように記載)

↓ 「10. その他」を選んだ場合は具体的にご記入ください

【選択肢】

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| 1. 学習管理システム(LMS)の導入 | 6. 介護現場との協働 |
| 2. 補助金や助成金 | 7. 設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働 |
| 3. 福祉事業等の相応付 | 8. 教員の研修、FD |
| 4. 自治体との協働・自治体の後押し | 9. 科目関連資格推進 |
| 5. 企業との協働 | 10. その他() |

④ シラバス掲載の有無 (単位は1つ)

1. 有 2. 無

⑤ 授業における具体的使用方法、教育内容

⑥ 留意点または工夫していること

⑦ 課題

⑧ 期待される効果、効果の把握・測定方法

⑨ 今後の展開と期待

質問15_2 科目目 (介護テクノロジー)

① 科目名 (コミュニケーション技術、生活支援技術以外)

② 教育の時期・期間 (単位は1つ)

1の情况 3の情况

1. () 年前から
2. 今年度から
3. 今後取り扱う予定

「1. () 年前から」→開始年をお教えください
「3. 今後取り扱う予定」→予定年月をお教えください

年 前 年 月 (数字を記入)

※和図でご記入ください

例: 10

③ 取り扱いきっかけ、活用を後押ししていること(複数回答可)

(回答例→選択肢2と3の場合は 2, 3 又は 2, 3のように記載)

↓ 「10. その他」を選んだ場合は具体的にご記入ください

【選択肢】

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| 1. 学習管理システム(LMS)の導入 | 6. 介護現場との協働 |
| 2. 補助金や助成金 | 7. 設置主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働 |
| 3. 福祉事業等の相応付 | 8. 教員の研修、FD |
| 4. 自治体との協働・自治体の後押し | 9. 科目関連資格推進 |
| 5. 企業との協働 | 10. その他() |

④ シラバス掲載の有無 (単位は1つ)

1. 有 2. 無

⑤ 授業における具体的使用方法、教育内容

⑥ 留意点または工夫していること

⑦ 課題

⑧ 期待される効果、効果の把握・測定方法

⑨ 今後の展開と期待

質問15_3 科目目 (介護テクノロジー)

① 科目名 (コミュニケーション技術、生活支援技術以外)

② 教育の時期・期間

1. () 年頃から
2. 今年度から
3. 今後取り扱う予定

「1. () 年頃から」→開始年をお答えください
「3. 今後取り扱う予定」→予定年月をお答えください

1. () 年 月 (数字を記入) (数字を記入)
※和暦でご記入ください 例: R8

③ 取り扱うきっかけ、活用を後押ししていること(複数回答可)

(回答例一選択肢2と3の場合は 2, 3 又は 2, 3のように記載)

「10. その他」を運んだ場合は具体的に記入ください

【選択肢】

- 学習管理システム(LMS)の導入
- 補助金や助成金
- 推進事業等の指定校
- 自治体との協働・自治体の後押し
- 企業との協働
- 介護現場との協働
- 介護主体が同じ法人の介護事業所からの支援や協働
- 教員の研修、FD
- 科日間連携推進
- その他()

④ シラバス掲載の有無

1. 有 2. 無

⑤ 授業における具体的使用方法、教育内容

⑥ 留意点または工夫していること

⑦ 課題

⑧ 期待される効果、効果の把握・測定方法

⑨ 今後の展開と期待

質問 16

貴校の介護福祉士養成課程において、取り扱いたいと思う介護テクノロジーはありますか。(複数回答可)

(回答例一選択肢2と3の場合は 2, 3 又は 2, 3のように記載)

「12. その他」を運んだ場合は具体的に記入ください

【選択肢】

- 移乗・移動支援: 自動運転の車いすや非行補助ロボットなど
- 指導支援(予備・後援を含む): 指導状況の把握、予備・後援システムなど
- 見守りシステム: モニターによる見守りなど
- コミュニケーションボット: 利用者とのコミュニケーション支援など
- 入浴支援: 入浴補助機器、皮膚管理システムなど
- 介護記録・情報共有支援: 介護記録アプリ、タブレット型情報共有システムなど
- 業務支援: 人手不足解消や業務効率化を図る管理システムなど
- 機器訓練支援: 身体機能維持・向上を目指す機器
- 食事・栄養管理支援: 食事管理や栄養改善を支援する機器
- 認知症生活支援: 認知症ケア支援、認知機能低下の高齢者を支援する機器
- その他のICT: ペンカム、ナースコールなど
- その他()

質問 17

(1) これまで、貴校は、生徒・学生に介護テクノロジー教育を行うことについて積極的に取り組んできましたか。

(番号は1つ)

1. 積極的に取り組んできた 3. あまり取り組んでこなかった

2. 取り組んできた 4. 全く取り組んでこなかった

(2) 今後、貴校では、生徒・学生に介護テクノロジー教育を行うことについて積極的に取り組んでいきたいですか。

(番号は1つ)

1. 是非、取り組みたい 3. あまり取り組みたくない

2. 取り組みたい 4. 全く取り組みたくない

質問 18

介護福祉士養成課程において、介護テクノロジーを教育することについて、どのような視点が重要であると考えますか、ア〜カについて、あてはまるセルに○をしてください。

	重要である				重要ではない			
	1. とてもあてはまる	2. あてはまる	3. あまりあてはまらない	4. 全くあてはまらない	1. とてもあてはまる	2. あてはまる	3. あまりあてはまらない	4. 全くあてはまらない
ア) 介護テクノロジーの種類、特性を教育する								
イ) 介護テクノロジーの活用による介護への効果教育する								
ウ) 活用に当たってのセキュリティ対策(個人情報保護)を教育する								
エ) 介護テクノロジーの活用における倫理観を教育する								
オ) リテラシー(現場で活用する力)を教育する								
カ) 介護テクノロジーの活用における介護福祉士の役割や関わりを教育する								

これらのほかに、介護テクノロジーを教育することについて、重要と考えていることがあればお教えください。

V. ヒアリング協力、研修への参加意向

質問 19 本調査研究では、介護福祉士養成課程におけるデジタル機器・技術等の活用について、具体的な取り組み事例を把握するためのヒアリング調査を実施します（令和7年12月～令和8年2月頃を予定）。

貴校において、ヒアリング調査にご協力いただくことはできますか。

	(電話番号)	
1又は2の場合		1. 協力できる 2. 内容によっては協力できる 3. 協力は難しい
連絡先について、以下にご記載をお願いいたします。		
お名前		
職位・担当科目など		
メールアドレス、電話など		

質問 20 本調査研究の一環として、「ICT等を活用した介護福祉士養成教育に関する研修会」を実施いたします。貴校（教員）の本研修への参加の意向はいかがでしょう。

	(電話番号)	
		1. 参加したい 2. 内容によっては、参加したい 3. 参加は難しい

質問は終了です。ご協力いただき、誠にありがとうございます
ファイルは右記に送信をお願いします kaigo@comon.jp

ご案内

開催：令和8年3月6日（金）を予定
テーマ：ICT等を活用した介護福祉士養成教育に関する研修会
開催方法：対面開催（東京会場）
リモート参加可能、後日オンデマンド視聴有（期間限定公開）
参加費：無料
※本調査票を受け取られた養成校には、令和8年2月にご案内を差し上げる予定です

2 ヒアリング調査協力者・関係機関

本調査研究のヒアリング調査にご協力いただいた介護福祉士養成施設及び福祉系高等学校やご対応いただいた先生等は、以下のとおりである。

ご多忙の中、ご協力をいただきましたことに感謝を申し上げます。

学校名	所在地	ご対応いただいた先生等
東奥学園高等学校	青森県	福祉科 真田 龍一 先生
宮城県迫桜高等学校	宮城県	総合学科 四釜 千尋 先生
愛知県立古知野高等学校	愛知県	福祉科 高木 諒 先生
東北保健医療専門学校	宮城県	介護福祉科 原田 由美子 先生 小巖 貴美子 先生
東京福祉専門学校	東京都	介護福祉科 高橋 利明 先生 コニカミノルタ株式会社 関 泰彦 様 古川 寛 様
富山短期大学	富山県	健康福祉学科 奥野 勝太 先生
仙台大学	宮城県	体育学部健康福祉学科 堀江 竜弥 先生 後藤 満枝 先生 福田 伸雄 先生
桃山学院大学	大阪府	社会学部ソーシャルデザイン学科 川井 太加子 先生 杉原 久仁子 先生 黒田 隆之 先生 石井 亨宏 先生

令和7年度老人保健健康増進等事業

「介護福祉士養成課程におけるICT活用した教育のあり方に関する調査研究事業」
報告書

発行 令和8年3月
公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会

113-0033 東京都文京区本郷 3-3-10 藤和シティコープ御茶ノ水2階
TEL：03-3830-0471 FAX：03-3830-0472